

自然公園における利用者数が
利用者の期待に及ぼす影響に関する研究

山本 清龍

目次

目次	i
図表目録	iv
第1章 序論	1
第1節 研究の背景と目的	1
(1) 研究の背景	1
(2) 研究の目的	2
第2節 既往研究と本研究の位置づけ	3
(1) 混雑心理を扱った既往の研究成果	3
(2) 利用者の期待や動機を扱った既往の研究成果	7
(3) 本研究の位置づけと言葉の定義	9
第3節 本研究の構成と方法	12
補注および引用・参考文献	12
第2章 自然公園の利用と類型	15
第1節 本章の目的と構成	15
第2節 自然公園における登山の変容	15
第3節 自然公園利用者数の変遷	18
第4節 自然公園における利用の問題の扱われ方	22
第5節 自然公園の利用の類型区分	27
第6節 本章のまとめ	30
補注および引用・参考文献	30
第3章 自然公園利用者の意識把握のための手法の検討と構築	32
第1節 本章の目的と構成	32
第2節 調査指標の設計のための概念整理	32
(1) 期待、満足、不満に対する考え方	32
(2) 自然公園利用者の期待の分類の方向性	33
第3節 研究対象地の選定と調査設計	34

(1) 利用類型に応じた研究対象地の選定	34
(2) 研究対象地の概要	34
(3) 調査方法およびアンケート調査票の構成	51
第4節 本章のまとめ	64
補注および引用・参考文献	64
第4章 二つの自然公園における利用者の意識構造	67
第1節 本章の目的と構成	67
第2節 尾瀬ヶ原における利用者の意識構造	67
(1) 利用者属性	67
(2) 満足要素と不満要素	69
(3) 利用者属性と満足および不満の要素との関係性	71
(4) 利用者数の多寡と満足および不満の要素の関係性	76
第3節 富士山における利用者の意識構造	81
(1) 利用者属性	81
(2) 満足要素と不満要素	83
(3) 利用者属性と満足および不満の要素の関係性	86
(4) 利用者数の多寡と満足および不満の要素の関係性	92
第4節 本章のまとめ	97
(1) 尾瀬ヶ原における利用者の属性と意識構造	97
(2) 富士山における利用者の属性と意識構造	98
補注および引用・参考文献	99
第5章 利用者数の多寡が利用者に及ぼす負の影響	100
第1節 本章の目的と構成	100
第2節 二つの自然公園の利用および利用者意識の共通性と差異性	100
(1) 自然公園としての尾瀬ヶ原と富士山	100
(2) 利用者属性	102
(3) 利用者数および利用者属性間の関係性	102
(4) 満足要素および不満要素	105
(5) 利用者属性と満足要素、不満要素との関係性	107
(6) 利用者数の多寡と満足要素、不満要素の関係性	108

第3節 利用者数の多寡が期待に及ぼす影響	109
(1) 尾瀬ヶ原	109
(2) 富士山	114
第4節 利用者数の多寡と混雑意識の生起	117
(1) 尾瀬ヶ原	117
(2) 富士山	119
第5節 利用者数の多寡と混雑不快感の生起	121
(1) 尾瀬ヶ原	121
(2) 富士山	123
第6節 多数の利用者数による期待阻害の概念的整理	124
第7節 利用者の期待阻害を考慮した自然公園計画	127
(1) 利用者の期待を充足するための管理施策	127
(2) 利用者数が利用者の心理に与える負の影響を取り除くための 管理施策	133
第8節 本章のまとめ	136
補注および引用・参考文献	137
第6章 結論と今後の課題	139
第1節 結論および考察	139
(1) 自然公園利用者の利用と期待	139
(2) 利用者数の多寡が「自然公園利用者の期待」に及ぼす負の影響と 混雑意識、混雑不快感の生起	140
(3) 多数の利用者数がもたらす自然公園利用者の期待阻害過程	141
第2節 今後の課題	142
要旨	I
Summary	V

図表目録

図 1-2-1	混雑感形成モデル	5
図 1-2-2	階層的対処モデル (Hierarchical Coping Model)	6
表 1-2-1	既往研究にみる自然公園利用者の期待に関連する指標の要素	8
図 2-3-1	自然公園における利用者数の推移	18
図 2-3-2	利用者数の多い国立公園における利用者数推移	20
図 2-4-1	自然公園制度のしくみ	26
図 2-5-1	自然公園の利用の概念的類型区分	29
図 3-3-1	尾瀬ヶ原 (平成 14 年 6 月 9 日、筆者撮影)	35
図 3-3-2	富士山 (平成 14 年 7 月 11 日、筆者撮影)	35
図 3-3-3	尾瀬全体図	36
表 3-3-1	尾瀬および富士山に関する略年表	39
図 3-3-4	富士山全体図	43
図 3-3-5	年別尾瀬総入山者数	46
図 3-3-6	尾瀬における年別の各入山口登山者数割合	46
表 3-3-2	尾瀬 (全体) における利用者が多い上位 10 日	47
表 3-3-3	尾瀬 (全体) における利用者集中日 (1994~2005 年)	47
図 3-3-7	富士山登山者数の推移	48
図 3-3-8	富士山登山者の入山口別割合	49
表 3-3-4	富士山吉田口登山道における登山者が多い上位 10 日	50
表 3-3-5	富士山における登山者集中日 (1994~2005 年)	50
図 3-3-9	牛首分岐地点の混雑の様子 (平成 14 年 6 月 8 日、筆者撮影)	52
図 3-3-10	ミズバショウの観賞のため混雑する様子 (平成 14 年 6 月 9 日、筆者撮影)	52
図 3-3-11	富士山泉ガ滝付近登山道分岐地点 (平成 15 年 8 月 3 日、筆者撮影)	53
図 3-3-12	富士山吉田口登山道の混雑 (平成 15 年 8 月 23 日、筆者撮影)	53
図 3-3-13	尾瀬ヶ原における利用者の期待	55
表 3-3-6	尾瀬ヶ原利用者に対する第 1 回予備調査の自由回答 に見られる満足要素	56
表 3-3-7	尾瀬ヶ原利用者に対する第 1 回予備調査の自由回答 に見られる不満要素	56

表 3-3-8	本調査において質問項目とした「満足」要素	58
表 3-3-9	本調査において質問項目とした「不満」要素	58
図 3-3-14	富士山における利用者の期待	60
表 3-3-10	富士山利用者に対する予備調査の自由回答に見られる 満足要素	61
表 3-3-11	富士山利用者に対する予備調査の自由回答に見られる 不満要素	62
表 4-2-1	尾瀬ヶ原における利用者の属性	68
表 4-2-2	尾瀬ヶ原における利用者数および利用者属性間の相関	68
表 4-2-3	尾瀬ヶ原利用者の満足要素	70
表 4-2-4	尾瀬ヶ原利用者の不満要素	71
表 4-2-5	利用者属性と満足要素との関係性	72
表 4-2-6	利用者属性と不満要素との関係性	75
表 4-2-7	混雑日および閑散日における尾瀬ヶ原利用者の満足要素	77
表 4-2-8	混雑日および閑散日における尾瀬ヶ原利用者の不満要素	78
表 4-3-1	調査実施日と概況	81
表 4-3-2	富士山における利用者の属性	82
表 4-3-3	富士山における利用者数および利用者属性間の相関	83
表 4-3-4	富士山利用者の満足要素	84
表 4-3-5	富士山利用者の不満要素	85
表 4-3-6	利用者属性と満足要素との関係性	88
表 4-3-7	利用者属性と不満要素との関係性	90
表 4-3-8	混雑日および閑散日における富士山利用者の満足要素	93
表 4-3-9	混雑日および閑散日における富士山利用者の不満要素	94
表 5-2-1	尾瀬ヶ原および富士山の利用者属性	102
図 5-2-1	尾瀬ヶ原、富士山における満足評価点	103
図 5-2-2	尾瀬ヶ原、富士山における混雑意識評価点	104
表 5-2-2	尾瀬ヶ原と富士山における共通の要素	105
図 5-2-3	尾瀬ヶ原と富士山における利用者の満足要素の比較分析図	106
図 5-2-4	尾瀬ヶ原と富士山における利用者の不満要素の比較分析図	107
表 5-3-1	混雑日と閑散日の尾瀬ヶ原利用者の満足要素、 不満要素と満足、混雑意識との相関	110
表 5-3-2	混雑日と閑散日の富士山利用者の満足要素、 不満要素と満足、混雑意識との相関	111

表 5-3-3	尾瀬ヶ原の閑散日と混雑日における利用者の期待に対する 影響評価	113
表 5-3-4	富士山の閑散日と混雑日における利用者の期待に対する 影響評価	115
表 5-3-5	尾瀬ヶ原の閑散日と混雑日における利用者の混雑意識	119
表 5-3-6	富士山の閑散日と混雑日における利用者の混雑意識	121
表 5-3-7	尾瀬ヶ原の閑散日と混雑日における利用者の混雑不快感	122
表 5-3-8	富士山の閑散日と混雑日における利用者の混雑不快感	123
図 5-6-1	尾瀬ヶ原における混雑意識評価点別の「人が少なくて よかった」および「人が多すぎた」の回答者割合	125
図 5-6-2	富士山における混雑意識評価点別の「人が少なくて よかった」および「人が多すぎた」の回答者割合	125
図 5-6-3	多数の利用者数がもたらす自然公園利用者の期待阻害過程 (概念図)	126
表 5-3-9	自然公園における利用者の期待を充足するために有効と 考えられる管理施策	128
表 5-3-10	利用者の期待に応じた管理施策の効果	134
表 6-1-1	多数の利用者数が自然公園利用者の期待に及ぼす 負の影響について	140

第1章 序論

第1節 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

美しい風景を見たい、珍しい動物や植物を見たいといった期待は誰しもが持ちうるものである。しかし、野趣性に優れた自然風景地において一人佇み自然の風趣を堪能することを期待として持つとすれば、他の一人の利用者の存在すら否定的に捉えてしまうことが考えられる。この事実は、訪れる利用者の期待が個人々々において多種多様であり、場合によっては利用者の期待と他の利用者のそれが対立関係を生じさせる可能性を示唆する。

日本の自然公園のうち、わが国の景観を代表し世界的にも誇りうる傑出した風景地として指定された国立公園は、それが持つ魅力ゆえに自ずと多くの利用者を受け入れることとなり、これまでに過剰利用に起因する多くの問題が指摘されてきた。周辺に存在する水域の富栄養化や人の不用意な入り込みによる他地域の生物の移入の問題、踏みつけによる植生破壊、ゴミ問題、尿尿問題、多数の人がいることによって静かに自然が楽しめない状況が生じる問題、などである。

こうした過剰利用に関わる問題は大きく分けて二つに分類できる。一つは人が自然資源に与える影響であり、前述の周辺水域の富栄養化や他地域からの生物の移入問題、ゴミ、尿尿の問題は典型的な例である。二つ目は人が受け取る影響であり、人が自然資源に与える影響を目にすることによって生じる不快感や、前述した多数の人の存在によって静かに自然が楽しめないなどの影響である。これには、自然を介して人が人に与える影響と、自然を介することなく人から人へ直接与える影響があると考えられる。他の見方をすれば、自然資源に与える影響は目に見える物理的な問題として捉えることができ、人が受け取る影響は目に見えない心理的な問題として捉えることができる。後者の問題が目に見えないという特徴を持つだけに、問題があるという事実すら指摘されることが少ない上に、自然公園の計画における思想や技術、方法論の構築の過程で議論されることも少ない。

多くの利用者を受け入れてきた自然公園にはこれまで重要な原則が存在した。このことは、平成14(2002)年の自然公園法の改正を巡る論議にそれまでの大原則を見ることができ、例えば、加藤¹⁾が指摘するように、「誰もが・何時でも・何処でも・自由に利用できる」という「自由利用の原則」がそれである。確かに、土地所有の形態が多様な地域を公園として指定しているわが国では、自然を利用するためのルールを導入に

は困難があったと考えられる。しかし、原則として自由な利用を認めるとしても、その自由とは際限の無い自由ではなく、利用者の環境配慮意識やその意識にもとづく行動等によって適正な利用が行われることが前提となろう。また、個人々々において、そのような意識のある行動が行われた場合でも、多数の利用者の存在によってやむなく生じる負の心理があると考えられる。

一般的に自然公園の過剰利用という概念は、利用者の増加による影響が自然の持つ許容量を超えて自然環境に破壊が生じることを指すが、本稿では利用者が集中する休日において、木道や施設周辺が混雑を極め静かに自然を楽しむことが出来ない状況、即ち利用者の体験の質の劣化を問題として捉える。もともと、混雑という言葉は“いりまじって分けにくいこと”や“こみあうこと”を意味して²⁾おり、現在の自然公園では文字通り、様々な属性の利用者が混在し、利用の志向の違う多数の利用者が時間的および空間的に混み合う状況が発生している。しかし、混雑という事象は単に空間が人によって満たされ詰まりすぎた状態あるいは近接した状態か否かによって決定されるだけでなく、人が心理的に混雑を感じるか否かによっても規定される³⁾。冒頭にも述べたように、利用者はある期待を持って自然公園を訪れる。しかし、多数の利用者の存在によって、その期待が阻害され、期待そのものが変容する可能性を持つ。それゆえ、自然公園において質の高いレクリエーション体験を提供していくためには、空間的な過密状態だけでなく、その利用者個々の満足や混雑心理を検討していくことが求められる。

(2) 研究の目的

以上の視点に立ち、本稿では自然公園における諸問題のうち特に人が受け取る心理的な問題に着目し、多数の利用者の存在が自然公園利用者の期待に及ぼす影響について明らかにし考察を行う。具体的には、以下の二点である。

- (1) 利用者数の多寡が「自然公園利用者の期待」に及ぼす負の影響は、自然公園において主に想定される利用型によって、差異があることを明らかにすること。
- (2) 自然公園利用者の心理を把握し、混雑および満足に関わる利用者心理の概念整理を行うこと。

第2節 既往研究と本研究の位置づけ

本稿で扱う混雑心理および満足心理に関わる指標は、わが国の造園学分野において収容力 (Carrying Capacity) に関連する研究成果として多く見られ、その収容力に関わる知見は米国において相当の蓄積がある。ここでは、国内外の自然公園における既往の研究成果を中心に、(1)混雑という事象や混雑心理がどのように捉えられてきたのか、(2)満足、期待、動機がどの様に分類、整理されてきたのか、を概観する。

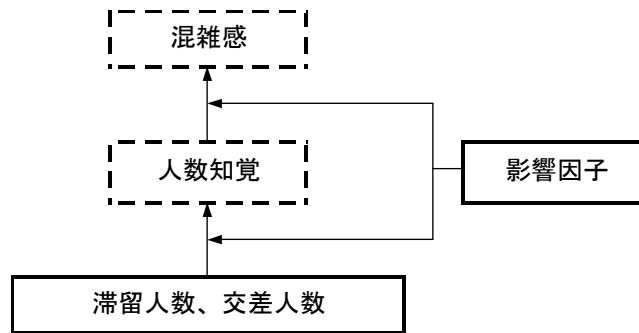
(1) 混雑心理を扱った既往の研究成果

既往研究では、利用者の混雑心理を表す様々な指標が見られるが、ここで、混雑という概念はどのような状態により発生する事象であるのかを明らかにするため、混雑心理に関わる初期の研究成果から検討しておく必要がある。Desor が言うように⁴⁾、動物は集団の個体数が大きすぎる場合に、その個体数に反応して集団のサイズを変化させることがよく知られている。この変化は同一種内競争や社会的競争、社会的圧迫の強度に対応したものであり、哺乳類の同一種間で見られる相互作用として位置付けられる。人間の場合はどうであろうか。ウェブスター英語辞典⁵⁾によると、混雑 (crowded) は(1)人やもので満たされた状態、(2)一杯に詰まり過ぎた状態、(3)近接した状態、と定義される。しかし、この定義で不十分であることは、後に詳述する既往の知見における公園利用者の混雑心理を参照しても明らかであり、当然 Desor もミニチュアモデルを用いた実験によって次のように定義を拡大している。それは、混雑は過剰な社会的な刺激の受容であり、単に空間の不足を意味するものでないことや、混雑の評価基準は混雑時に展開されている活動によって変化する、ということである。即ち混雑という概念は社会的な刺激の受容をも意味すると定義した。その他、これまでに混雑は「空間の不備の知覚」(Stokols, 1972) や「行動選択の制約」(Proshansky, Ittelson, & Rivlin, 1972)、「社会要因による過剰な刺激」(Desor, 1972)、「遠慮のない不適切な接触による過剰な刺激」(Esser, 1972)、「不必要な社会的相互作用」(Valins & Baum, 1973)、「妨害と閉塞」(Sundstrom, 1975)、「個人が望むプライバシーレベルの達成不能」(Altman, 1975)といった定義づけが為されている⁶⁾。これらの各定義は、混雑が意味するものを確かに言い当てているが、それぞれは必ずしも全体ではない。混雑の定義における発展が意味するものは、混雑という事象が、単に空間の不足 (不備) だけでなく、人間の行動や知覚、認知、対人関係、期待 (欲求、希望)、妨害 (阻害) などとも関わりを持つということである。

わが国における混雑に関わる調査研究は、昭和 49 (1974) 年の環境庁自然保護局の

報告書「自然公園における収容力に関する研究（最終報告書）」⁷⁾に始まる。報告書は近代造園学に立脚する立場から、自然公園において当時すでに慣用語となっていた「収容力」に相当する言葉として「地域容量」(Space Capacity)を充て、この言葉は新聞等のメディアで取り沙汰されるなど自然保護に関わる用語として一時定着した。また、こうした収容力に関する言葉の概念整理だけでなく、米国における調査研究の成果との比較から、収容力の定義「自然環境の回復が不可能になる限界点および利用者が公園から受ける満足や楽しみが減退を始める時点」のうち、特に後者が新しい視点であることを紹介しており、後の研究成果の蓄積はこの報告書の延長線上にあるとみることできる。その後、近藤⁸⁾や前中⁹⁾などによって、利用者の行動や滞在者密度とレクリエーション地の植物生態との関係が明らかにされている。しかし、これらの成果は、利用が公園に与える影響を明らかにしたものとして重要な知見であるものの混雑や満足に関わる利用者心理を扱ったものではなかった。

わが国において混雑に関わる分析指標を野外レクリエーション地に適用した初期の研究成果として、昭和 61 (1986) 年に青木が小石川後樂園 (7.0ha) で行ったもの¹⁰⁾がある。公園緑地の同時在園者数は利用者の混雑感と関連を持ち、小石川後樂園では同時在園者が 700 人を超えた場合、混雑していると感じる人の割合が 50%を超えることなどを明らかにしたもので、公園内の利用者数と利用者が持つ混雑感とを直接結ぶ知見であり、最も基礎的な研究成果といえる。



(出典：愛甲哲也・浅川昭一郎・小林昭裕 (1992) :
大雪山国立公園における登山利用者の混雑感に関する
研究：造園雑誌55(5), 223-228)

図 1-2-1 混雑感形成モデル

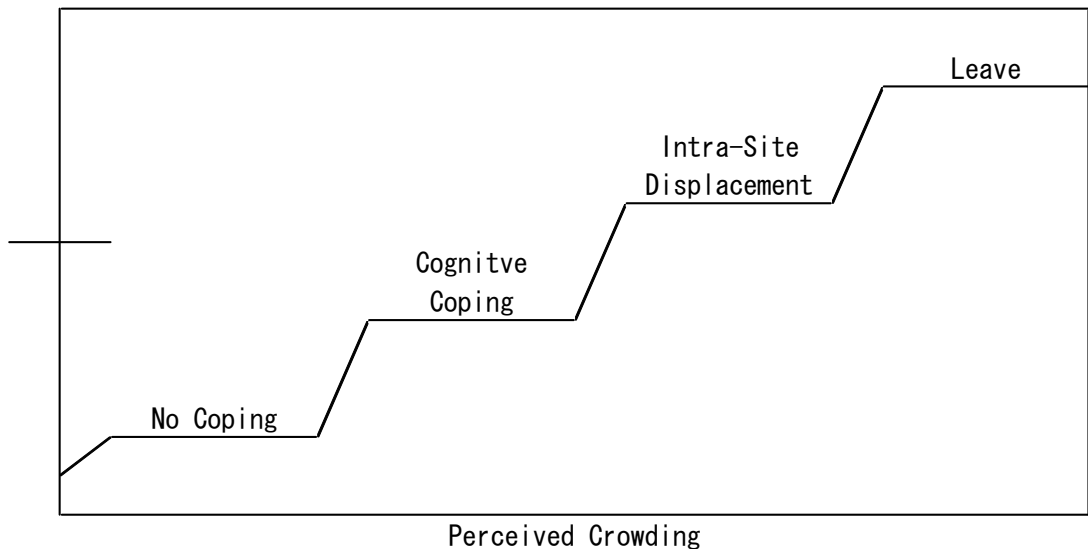
一方、自然公園では、愛甲や小林などによって大雪山国立公園においてかなりの知見が蓄積された。その研究の多くは米国における研究成果を参照しつつ行われたものであり、例えば、混雑感形成のモデル (図 1-2-1)¹¹⁾ が示す、登山道における滞留人数や交差人数が利用者の人数知覚に影響し、さらに混雑感が形成されるという一連の過程は、混雑に関わる利用者心理の概念整理を行うことを目的の一つとする本稿に対し、多くの示唆を与える。また、キャンプ場の利用の現状に対して混雑を感じている人ほど、好ましくないと回答する傾向が見られること¹²⁾ は、混雑感が不快感と関連を持つというだけでなく、もともと混雑感という利用者心理が直ちに不快感を意味し、満足の低下を促すものであるのか、あるいは混雑感の一部は不快感を意味せず、満足の低下を促さないこともありうるのか、という重要な論点を提示している。日本人には観光地等における混雑を気につけない国民性があると言われるが¹³⁾、なぜ日本人がそうした気質を持つのであろうか。例えば、わが国における祭りなどの伝統的祭事において見られる賑わいには混雑を是とする感覚が含まれていると考えられる。この時、物理的な混雑によって祭事参加者の体験の質が低下することが問題視されることはない。一方、伝統的な山岳の利用においても一種の賑わいを現出してきた場所がある。それは、現在指定されている 28 の国立公園の中には日本三霊山といわれる富士山や立山、白山などのような信仰登山の対象地として機能してきた山岳である。その伝統的宗教登山における農閑期の集団登山といった利用の形態の中では、混雑は是とされてきたのではないかと。そうであるとすれば、現在もなお混雑を是とする日本的感覚が自然公園の利用者心理の中に息づいているとも考えられる。

その他、登山者が利用人数やマナーに不快を感じ始める許容限界について明らかにしたもの¹⁴⁾がある。米国では、国立公園制度を支える重要な考え方として LAC (=Limits of Acceptable Change) があり、これは自然公園の収容力を決定する場合に用いられる

指標である。この考え方を援用し、他の利用者の人数やマナーに対する許容限界の値を明らかにしたものであり、利用者が場所ごとに違った限界値を回答し、利用ルートが長い人ほど許容限界が低下することなどを明らかにした。これは、利用者が利用人数を含めてどの程度の利用状況までを許容できるかという基準を持っているということであり、利用状況に関わる期待を利用者が持つことを示唆すると考えられる。このことは、後に続く研究成果^{15) 16)}によってより具体的に関係性が把握され、自然性が高く利用者が少ないと想定される区域に対して、登山者が自然体験欲求や心静かな時間に対する欲求の充足を期待していることが明らかにされた。さらに、混雑とマナーの悪さに対する登山者の許容限界と対処行動(コーピング行動)について明らかにしたもの¹⁷⁾もある。登山道上や野営地で出会う登山者数や悪いマナーを見る回数が許容限界を超えた場合に、登山体験全体の満足度の低下として捉えられず、かつ時期やルートの変更をすることで回答が少なかったことは、行動によって混雑を回避することよりも認知的対処が優先されたことを意味する。即ち、混雑は行動によって回避できる可能性と、認知によって回避できる可能性の両者の存在を指摘するものであり、利用者の混雑心理の形成を考えると、行動だけでなく心理についても検討すべきことを示唆する重要な知見である。混雑心理と行動との関係を階層構造(図 1-2-2)によって捉えようとした成果には Kuentzel et al. によるもの¹⁸⁾があり、(1)行動維持(No Coping)、(2)混雑に対する態度変化(Cognitive Coping)、(3)域内の非混雑地域への移動(Intra-Site Displacement)、(4)域外への移動あるいは活動中止(Leave)、の4段階の仮説を提示した。その他、Manning は利用水準やグループ間の接触、遭遇が混雑感や満足に関連があることを表したモデルを提示した¹⁹⁾。

最近では、日光国立公園など他の国立公園においても利用者の満足や混雑心理を扱った研究成果が見られるようになってきている。下嶋らは、尾瀬ヶ原の景観内に存在する他の利用者の物理的な「見え」の変化を検討し、利用者の数や配置が自然景観評価に与える影響を明らかにしている²⁰⁾。「ひと」として認識できる300mの距離内において、被験者は、基準とした100mより近い領域では物理的刺激の変化ほどには心理面での影響を感じず、逆に基準(100m)より遠い領域では物理的な刺激より拡大されてより大きく影響を感じている。このことから、利用者の混雑心理を直接利用者数と結びつけて考えるだけでなく、「見え」やその「見え」を作る空間状況についても考慮すべきといえる。また、田村らは尾瀬ヶ原の木道上の利用者間の距離と混雑感および混雑不快感との関係性を明らかにしている²¹⁾。混雑感及び混雑不快感を受ける時の単線間距は個人差が比較的小さく、混雑不快感の単線間距中央値が「限界間距」として表され、その数値は4.2mであること、進行方向の利用密度が混雑不快感に強く影響を及ぼすが、ゆっくり観賞したり木道上に立ち止まったりする行為を阻害される不快内容においては、対面方向の利用密度も混雑不快感に影響を及ぼすこと、などを導いており、利用者間の距離と混雑感、混雑不快感、あるいは利用者の期待の阻害と混雑感、混雑不快感の関係性に言及したものと注目される。

(2) 利用者の期待や動機を扱った既往の研究成果



(出典 : Kuentzel, W. F. and Heberlein, T. A. (1992) : Cognitive and Behavioral adaptations to perceived crowding: A panel study of coping and displacement : Journal of Leisure Research 24(4), pp. 377-393)

図 1-2-2 階層的対処モデル (Hierarchical Coping Model)

満足は、①十分なこと、完全なこと、②望みが満ち足りて不平のないこと、を意味し、さらに望みは期待といった言葉に置き換えることができる²²⁾。また、動機や目的も満足を考える上で関わりのある指標といえよう。自然公園においてこれらの指標を用いた研究成果は多くはないが、人間がもともと持つ欲求や人間と環境との関わりから生じるアメニティなども本研究にとって重要な知見である（表 1-2-1）。

まず、Brown et al. や Beard et al. の知見^{23) 24)}を参考にして愛甲らによって用いられた自然公園利用者の来訪動機がある²⁵⁾。アンケート結果の分析から導かれた来訪動機は、(1)自己実現欲求、(2)混雑を避ける欲求、(3)冒険的欲求、(4)自然体験欲求、(5)友人との交流欲求、(6)静けさと安らぎへの欲求、(7)家族同士の交流欲求、の七つであり、本研究の第二の目的における自然公園利用者の期待を考える上で参考になる研究成果である。また、同様に小林はBrown et al. や Beard et al. の知見を参照しつつ、大雪山国立公園における登山の利用実態を考慮した上で調査項目を作成し、アンケート調査を通じて、利用者の来訪動機が(1)心の安らぎと自然体験欲求、(2)自己実現欲求、(3)ストレスからの解放と孤独欲求、(4)冒険的欲求、(5)友人との交流欲求、(6)家族同士の交流欲求、の六つの因子によって構成されることを明らかにしている^{26) 27)}。また、同年の同著者による研究成果では、上述の研究成果を参考にして、利用者の来訪動機の因子として(1)非干渉的欲求、(2)精神的自己向上欲求、(3)冒険的体験欲求、(4)肉体的

自己向上欲求、(5)自然体験欲求、(6)友人同士の交流欲求、(7)平穏な時間への欲求、の七つを導いているほか、利用者が自然公園に期待する内容として(1)他人から干渉されない時間、(2)自分自身を試すような冒険的体験、(3)自分自身を高めるような体験、

事例	著者(年)	文献	指標	要素(因子)
1	小林昭裕(1995)	野外レクリエーション体験における利用者の満足度に関する要因分析:環境情報科学論文集9, 57-62	動機	①非干渉的欲求 ②精神的自己向上欲求 ③冒険的体験欲求 ④肉体的自己向上欲求 ⑤自然体験欲求 ⑥友人同士の交流欲求 ⑦平穏な時間への欲求
2	小林昭裕(1996)	野外レクリエーション体験への期待と、行動形態、管理への考え方、許容限界への関連性:ランドスケープ研究59(5), 133-136)	期待	①心の安らぎと静かな時間を得る ②雄大な自然景観を眺める ③他人から干渉されない時間を作る ④植物や動物、地形などを観察する ⑤日常からの脱出・ストレスの開放 ⑥友人や家族との交流を深める ⑦自身の体力や技能を高める ⑧原始的な自然に触れる
3	小林昭裕(1997)	利用者の利用体験に対する態度に基づく自然公園の管理方策:ランドスケープ研究60(5), 589-592	利用体験への重視度	①喧騒から逃れる機会 ②自主性を満たす機会 ③自分の能力を発揮する機会 ④心身を健康にする機会 ⑤野生動植物と出会う機会 ⑥自然景観とふれあう機会 ⑦家族と一緒にいる機会 ⑧親しい人達と一緒にいる機会 ⑨冒険できる機会
4	Maslow, Abraham Harold(1954)	A. H. マズロー著・小口忠彦監訳:人間性の心理学:産業能率短期大学出版部	人間の欲求	①生理的欲求 ②安定と安全の欲求 ③社会的欲求 ④自我の欲求 ⑤自己実現欲求
5	丸尾直美(1983)	緑とアメニティの経済学:都市計画128, 51-58	環境のアメニティ	①近隣の間関係 ②環境の快適さと魅力 ③安全で衛生的な環境
6	日下裕弘(2003)	今村浩明・浅川希洋志編(2003):フロー理論の展開:世界思想社, 348pp.	自然体験活動(登山)における気分(注1)	①自然の広さ・豊かさ・美しさ・尊厳性・神秘性など ②身体の能動性・活動性・エネルギー・達成感・克服感・チャレンジ・夢中・熱中・興奮など ③身体の受動性・感情的安定・感性の自由・心の解放・静けさ・母親・のんびり・ゆったり・ボンヤリ・溶け込む感じ・幸福感など ④親密な人間関係・協調性・仲間との共感・信頼感・暖かさ・優しさなど

注1) 日下は自然体験活動を「自然遊」として扱っている

(4)家族や友人同士の交流、(5)心のやすらぎと静かな時間、(6)野生動物を間近で見られる体験、(7)風景や植物などの自然との接触、を質問項目として用いている。この研究成果では、動機と期待を区別して把握しているが、動機の因子および期待の項目の内容を比較すると、非常に近い概念として捉えることが可能である。さらに、同著者による1996年の続報²⁸⁾では、(1)心の安らぎと静かな時間を得る、(2)雄大な自然景観を眺める、(3)他人から干渉されない時間を作る、(4)植物や動物、地形などを観察する、(5)日常からの脱出・ストレスの開放、(6)友人や家族との交流を深める、(7)自身の体力や技能を高める、(8)原始的な自然に触れる、の八つの項目が調査項目として用いられ、特に(8)の項目が新たに追加されている。

また、自然公園利用者の期待の中に、人間としての欲求を見出すこともできる。アメ

表 1-2-1 既往研究にみる自然公園利用者の期待に関連する指標の要素

リカの産業心理学者マズロー (Maslow, Abraham Harold) は、人間の欲求が(1)自己実現欲求、(2)自我の欲求 (人格的欲求、自主性の欲求、尊敬の欲求)、(3)社会的欲求 (集団的欲求、所属欲求、親和欲求)、(4)安定と安全の欲求、(5)生理的欲求 (生活維持の欲求)、の5段階から成り、下位欲求(5)から順に上位欲求(1)の充足にニーズが進むとする欲求段階説を唱えた。また彼は、人格における行動の動因 (行動を引き起こす直接の原因) を、有機体における欠乏状態の充足と、同じく有機体の機能の満足とに分け、そこから欲求の種類についても、前者が支配的な「欠乏欲求」と後者が支配的な「成長欲求」に分類している。マズローの功績の一つは、従来一般に考えられていた欠乏欲求を中心とする欲求概念に対して、成長欲求の存在を指摘し、人間が持つ高次の欲求の段階を鮮明にしたことにあり、もしも欲求について成長を中心にして考えていこうとするならば、欲求は否定される対象ではなく、満足されるべきもの、肯定されるべきものといえる^{29) 30)}。本稿は、期待の階層性を明らかにすることを意図しないが、期待の分類を行う際に参考とすべき知見である。

さらに、自然公園の利用者が抱く期待をより広く捉えて行こうとするならば、その期待は自然公園におけるアメニティの実現と考えることも可能である。アメニティはもともとイギリスにおける都市計画の重要な概念であり、環境の総合的な質を表し、(1)公衆衛生 (公害防止)、(2)快適さ、(3)保存の3つの相を持つ複合概念である³¹⁾。アメニティについては、1976年のOECD環境委員会が我が国の環境政策に対してアメニティの欠如を指摘したことを契機に、都市計画³²⁾やランドスケープ (造園)³³⁾の分野において議論が行われてきた。特に、丸尾は環境のアメニティの主要な構成要因を、(1)近隣

の人間関係 (プライバシー、人間的ふれあいの両立など)、(2)環境の快適さと魅力 (a 歴史的景観・歴史的建造物の保全・発展、b 五感にとっての快適性、c 自然の保全、d 多様性と個性、e 便利性)、(3)安全で衛生的な環境 (衛生的で健康的な環境、安全な環境)の3つに整理しており³⁴⁾、この3つの要因は自然公園におけるアメニティとして十分に適用できるものとする。

その他、日下裕弘は自然体験活動の一つとして、登山における気分の内容に対して因子分析を行い、(1)自然の広さ・豊かさ・美しさ・尊厳性・神秘性など、(2)身体の能動

性・活動性・エネルギー・達成感・克服感・チャレンジ・夢中・熱中・興奮など、(3) 身体の受動性・感情的安定・感性の自由・心の解放・静けさ・母親・のんびり・ゆったり・ボンヤリ・溶け込む感じ・幸福感など、(4) 親密な人間関係・協調性・仲間との共感・信頼感・暖かさ・優しさなど、の4つの因子を導いており、これらの因子は実際のフィールド体験によって生じる利用者の心理として注目される³⁵⁾。

(3) 本研究の位置づけと言葉の定義

既往研究を概観したように、既に混雑感、混雑不快感、満足(度)、満足率などの指標が用いられている。また、満足に影響を与える因子として自然公園利用者の動機や期待があることも指摘されている。しかし、これらの混雑と満足に関わる心理とがどのような関係性を持つのか、あるいは満足と混雑に関わる心理の形成過程の全体像はいかなるものか、十分に整理されているとは言い難い。さらに、自然公園において利用者数が多数の場合に、利用者の期待はどのような影響を与えるのかは明らかでない。

これまで満足や混雑に関わる心理指標やその他関連のある指標についてあえて定義することは無かったが、ここで、本稿における言葉の定義をしておく必要がある。

まず、混雑に関わる重要な指標として利用者数があり、本稿では特に自然公園の利用者数を扱う。ここで直ちに、利用者数と混雑意識を結びつけるのみであれば、物理的な空間の閉塞あるいは利用者の多さが即ち混雑心理を生起させることとなり、議論の余地は無い。例えば、電車の車内などのように限定された狭い空間の中における混雑を想定するのであれば、このような構図が成立するかもしれない。しかし、自然公園の公園内に設けられた森林トレイルのすれ違いにおいて、あるいは街中のトイレの順番を待つ行列の中でも混雑意識が生じることは、混雑という概念をより広く捉えていく必要のあることを示唆する。ここで紹介した二つの例から考えられることは、一つは、予想を超える利用者の人数が認識される時に混雑意識が生じるということであり、森林トレイルで予期しない数の利用者を目にした時に起こる心理と考えられる。二つ目は、自然公園の利用者の期待が充足されない時に混雑を感じるということであり、トイレの順番を待つことなく円滑に公園施設を利用したいという期待が満たされずに混雑意識が生じると考えられる。従い、混雑意識は予想を超える他の利用者の人数が認識される時、あるいは、それによって利用者の期待が阻害される時に生じる意識と整理できる。

一方、利用者の期待が満たされる場合には、利用者の心理に満足が生じ、満たされない場合には満足の低下が起きると考えられる。満足あるいは満足の低下を生起する要件の期待(expectation)については、関連する言葉として欲求(need)、動機(motive)などがあり、心理学においては明確に区別される。高野清純の定義³⁶⁾によれば、欲求

は個人内に特定の仕方で生起し、比較的長く継続する動機づけられた傾向である。また、動機は目標を達成しようとする行動について記述する場合に用いられ、欲求によって生起する。これらの言葉との比較から、自然公園の利用者が抱く期待は継続しない比較的短期のものであり、欲求と同様に動機を伴うものと位置づけられる。さらに、混雑意識の生起と満足の低下は同時に発生する場合には混雑不快感となり、そうでないこともありうると思われる。

以上が、本稿で扱う指標に対する考え方であり、端的には以下のように定義づけできる。

- ・ 利用者数：自然公園における利用者の人数（人）。
- ・ 混雑意識：予想を超える他の利用者の人数が認識される時、あるいは、それによって利用者の期待が阻害される時に生じる意識。
- ・ 満足：自然公園利用者の期待（望み）が満ち足りて充足されること。
- ・ 混雑不快感：満足の低下を伴う混雑意識。
- ・ 満足の低下（満足の瑕疵）：自然公園利用者の望み（期待）が満ち足りず、充足されないこと。

第3節 本研究の構成と方法

本稿は6章によって構成した。第1章では、研究の背景に触れた上で目的を明確にし、自然公園における利用者の混雑心理や期待、動機を扱った既往の研究を概観することによって本研究の位置づけを行う。第2章では、わが国の自然公園における登山の質の変容を整理し、自然公園の利用者数の変遷を4期に区分し、変化の要因と関連づけて把握する。また、自然公園における利用の問題の捉えられ方を整理した上で、自然公園の利用を類型区分するための分析軸を抽出し、利用型を導く。第3章では、期待、満足、不満に対する考え方を整理し、自然公園利用者の期待を分類することによって、調査指標の設計のための概念整理を行う。また、利用類型に応じて研究対象地の選定を行い、その研究対象地の概要を把握した上で、本研究を遂行するに相応しい研究方法を構築する。第4章では、時間消費型利用の自然公園の代表事例の尾瀬ヶ原と、目的達成型利用の自然公園の代表事例の富士山について、利用者属性、満足要素と不満要素、利用者数の多寡と満足および不満要素との関係性を把握し、それぞれの自然公園における利用者の意識構造を明らかにする。第5章では、自然公園における利用者数の多寡が利用者の期待に及ぼす影響や混雑意識、混雑不快感の生起について明らかにする。また、思索的検討によって多数の利用者による期待阻害について概念的整理を行う。さらに、本研究の結果を踏まえた上で、自然公園における利用者の期待を充足するために有効と考えられる管理施策について論じ、考察を行う。最後に、第6章では、以上の得られた知見を総括し、今後の課題を示す。

補注および引用・参考文献

- 1) 加藤峰夫 (2003) : 自然公園制度の新たな展開と課題-利用調整地区を例として : 国立公園 618, 8-11
- 2) 新村出編 (1998) : 広辞苑第五版 : 岩波書店, 1022pp.
- 3) Desor, J. A. (1972) : Toward a Psychological Theory of crowding : Journal of Personality and Social Psychology 21(1), 79-83
- 4) 前掲3)
- 5) Webster's new universal dictionary of the English language; 2nd ed., 1970
- 6) Schopler, J., and J. E. Stockdale (1977) : An Interference Analysis of Crowding : Environmental Psychology and Non-Verbal Behavior 1, 81-88
- 7) 環境庁自然保護局 (1974) : 自然公園における収容力に関する研究 (最終報告)
- 8) 例えば近藤三雄・小沢知雄 (1977) : 芝生地の収容力に関する基礎的研究 I -踏圧-

- 土壌硬度に対する芝生地の植群の抵抗性からみた収容力について：造園雑誌 40(3), 11-23
- 9) 例えば前中久行(1989)：踏みつけによる芝生の損耗とその回復成長の数式モデル：造園雑誌 47(5), 129-134
- 10) 青木陽二(1986)：同時在園者数による混雑感の分析：造園雑誌 50(2), 108-111
- 11) 愛甲哲也・浅川昭一郎・小林昭裕(1992)：大雪山国立公園における登山利用者の混雑感に関する研究：造園雑誌 55(5), 223-228
- 12) 愛甲哲也・小林昭裕(1993)：大雪山国立公園における登山利用者からみたキャンプ場の混雑感評価と関わる要因：造園雑誌 56(5), 169-174
- 13) 自然公園施設研究会編(1993)：自然公園等施設整備実務必携：第一法規出版, 392-416
- 14) 小林昭裕(1994)：大雪山国立公園において登山者が利用人数やマナーに不快を感じ始める許容限界について：造園雑誌 57(5), 313-318
- 15) 愛甲哲也・浅川昭一郎(1995)：大雪山国立公園の登山者が来訪動機の充足を期待した区域と登山経路：ランドスケープ研究 58(5), 213-216
- 16) 小林昭裕(1996)：野外レクリエーション体験への期待と、行動形態、管理への考え方、許容限界との関連性：ランドスケープ研究 59(5), 133-136
- 17) 愛甲哲也・浅川昭一郎(2000)：混雑とマナーの悪さに対する登山者の許容限界とコーピング行動について：ランドスケープ研究 63(5), 619-624
- 18) Kuentzel, W. F. and Heberlein, T. A. (1992)：Cognitive and Behavioral adaptations to perceived crowding: A panel study of coping and displacement：Journal of Leisure Research 24(4), pp. 377-393
- 19) Robert E. Manning(1999)：Studies in outdoor recreation: Oregon State University Press, 374pp.
- 20) 下嶋聖・羽生田麻衣・栗田和弥・一場博幸・麻生恵(2002)：尾瀬ヶ原における利用者の数や配置が自然景観に与える影響について：ランドスケープ研究 65(5), 665-668
- 21) 田村裕希・望月寛・麻生恵(2003)：尾瀬ヶ原の木道上における利用者間の距離と混雑感及び混雑不快感との関係性：ランドスケープ研究 66(5), 705-710
- 22) 前掲2)
- 23) Brown, P. J. and Haas, G. E. (1980)：Wilderness recreation experience：The Rawah case：Journal of Leisure Research 12(3), 229-241
- 24) Beard, J. G. and Ragheb, M. G. (1983)：Measuring leisure motivation：Journal of Leisure Research 15(3), 219-228
- 25) 愛甲哲也・小林昭裕(1993)：大雪山国立公園における登山利用者からみたキャンプ場の混雑感評価と関わる要因：造園雑誌 56(5), 169-174

- 26) 小林昭裕 (1993) : 大雪山国立公園を事例とした登山者の満足度、動機および回答者の特性感の関連性 : 造園雑誌 56(5), 175-180
- 27) 小林昭裕 (1995) : 野外レクリエーション体験における利用者の満足度に関する要因分析 : 環境情報科学論文集 9, 57-62
- 28) 小林昭裕 (1996) : 野外レクリエーション体験への期待と、行動形態、管理への考え方、許容限界への関連性 : ランドスケープ研究 59(5), 133-136
- 29) Gibney, Frank B. 編 (1972-1975) : ブリタニカ国際大百科事典 : T B S ブリタニカ
- 30) 畠瀬稔 (1996) : 人間性心理学とは何か : 大日本図書, 98-130
- 31) 東京農業大学農学部造園学科造園用語辞典編集委員会 (1985) : 造園用語辞典 : 彰国社, 535pp.
- 32) 例えば、西村幸夫 (1987) : 都市アメニティ論の現在 : 都市計画 147, 79-81
- 33) 例えば、油井正昭・熊谷洋一 (1986-88) : 造園学会全国大会分科会報告 : 造園雑誌 50(1), 21-27,, 51(1), 41-49,, 52(1), 35-44
- 34) 丸尾直美 (1983) : 緑とアメニティの経済学 : 都市計画 128, 51-58
- 35) 今村浩明・浅川希洋志編 (2003) : フロー理論の展開 : 世界思想社, 348pp.
- 36) 山下俊郎他 (1969) : 情緒・欲求・動機 : 金子書房, 310pp.

第2章 自然公園の利用と類型

第1節 本章の目的と構成

本章の目的は、わが国の主に山岳性自然公園の利用を把握した上で、利用の観点から自然公園の利用の類型区分を行うことである。そのため、**第2節**では、わが国の自然公園において主要な利用形態と考えられる登山についてその質の変容を概観し、**第3節**では、本研究が着目する利用者数の多寡と深い関わりがある、自然公園の利用者数の変遷を整理する。また、**第4節**では、自然公園における利用の問題がどのように捉えられてきたかを明らかにする。以上を踏まえて、**第5節**では、自然公園の利用を類型区分するための二つの軸を抽出し、二つの軸によって、わが国の山岳性の自然公園における利用型を四つに区分する。最後に、**第6節**では、本章を小括する。

第2節 自然公園における登山の変容

わが国の自然公園には瀬戸内海国立公園のように海の公園や、中部山岳国立公園のように山岳性の公園もある。本稿は、その数ある自然公園のうち山岳性の自然公園に着目するものであり、そこで見られる主要な利用形態の一つに登山がある。登山と自然公園との関わりは深く、塚本の整理¹⁾によれば、川村博らによる『日本名山図會』（文化9（1812）年）に掲載された89座中73座（34座：国立公園、27座：国定公園、12座：都道府県立自然公園）が自然公園に指定されている。また、志賀重昂による『日本風景論』（明治27（1894）年）において記載された166座中139座（84座：国立公園、35座：国定公園、20座：都道府県立自然公園）が、また、深田久弥による『日本百名山』（昭和39（1964）年）の100座中99座（76座：国立公園、12座：国定公園、11座：都道府県立自然公園）が自然公園に指定されている。塚本が挙げたこれらの文献は、その時代において広く読まれた文献として知られると同時に、登山史を振り返る時に参照されることの多い文献であり、自然公園に所在する山岳が登山対象としていかに重要な位置を占めているかを示すものである。

一方、自然公園における山岳利用を考える時、利用対象となる山岳と宗教の関わりは重要である。というのも、日本三霊山と言われる富士山、立山、白山を代表として、わが国のほとんどの山岳において宗教との関係が見出されるからであり²⁾、その宗教観の中に日本人の自然観と独特の利用形態を見ることができる。自然公園における利用形態の本質を探る上で登山の質の変容の把握が重要であることから、簡単に登山史を概観したい^{3) 4) 5) 6) 7)}。

山岳に宗教的意味を与えて尊崇し、また山岳を対象として種々の宗教的儀礼を行う例は世界の諸宗教に様々な形で見られるが、山の多い日本の宗教においては、特に重要な位置を占めた。特に、六世紀なかばの仏教伝来以後、山岳崇拜と密教的信仰が結合して、修験道は日本独自のかたちをみせはじめ、大峰山、高野山をはじめ、立山、白山、木曾御岳、石鎚山、出羽三山など各地の霊場が開かれていった。

平安時代（794～1192年）に入ると、密教僧が熱心に山岳修行を行い、修行によって験を修めた修験者は全国各地の山岳寺院に依拠した。特に中央では吉野の金峰山（御岳）と熊野三山が、修験道場大峰山への拠点として多くの修験者を集め、山伏の集団が形成された。

鎌倉・室町時代（1192～1573年）に入ると、熊野の金峰から大峰山に入って修行する峰入（みねいり）が盛んに行われ、闕伽（あか：水汲みの作法）や小木（こぎ：護摩木採集の作法）、灌頂などの峰入の作法が整えられた。また、峰入のための衣体も整えられ、さらにこれらの切紙を集成した教義書も作られた。

江戸時代（1603～1867年）中期には、山岳信仰の対象もすでに地域社会の範囲を大きく越えて、全国的な規模で広がっていた。特に出羽三山をはじめ立山、白山、富士、大峰などがほとんど全国圏に及ぶ大きな信仰圏を形成していた。そこでは講への加入者が講金を積み立てて毎年籤引きによって代表者を決定し、その代表者が講中の代参として登拝旅行を行ったのである。江戸時代後期になると、はじめて、宗教的な関わりを持たない、山登り自体を楽しむ風潮が一部の文人、医師、画家などの間に見られるようになる。その後、登山は当時厳重な旅行制度が課せられていた武士ではなく、農民や町人の間で広まり、その登山の形態は旅行の延長線上にあったと言われる。単に趣味として登るという意味において、現代の登山との根本的な差異は無い。しかし、こうした山登り自体を楽しむ登山者はあくまで少数の例外であり、当時の多くの人たちにとってはやはり信仰のための登山であった。

明治（1868～1911年）に入ると、近代登山が幕を開ける。日本登山史における近代登山のはじまりをどこに置くかという問題は諸説あり、明治 27（1894）年の志賀重昂の『日本風景論』の刊行を言う場合や、明治 38（1905）年の日本山岳会の創立を区切りとする場合などがある。いずれにせよ、この頃に日本に従来からあった信仰登山とは別の理念に立った登山、すなわち好奇心や冒険心、探検心に基づくスポーツ的な要素を多分に含む近代登山が始まる。村上俊雄の『山岳と宗教』（昭和 31（1956）年）⁸⁾ では「(前略)・・・山は登頂してしまえば登山の目的は達せられる。現在の登山は登頂と同時にその目的を完了する。これに対し古来の登山は何度でも繰り返され、この繰り返れしによって「先規通達」する者が先達としてあがめられ、しかも登山の忍苦、浄行の法悦、六根清浄にして延命を願い、その山の開祖の徳に浴し、その法縁を相業する。前

者ことに近代的アルピニストの態度には自然に対する不屈の気象は見えても山はどこまでも自然物としてとらえられている。自然をして自然たらしめている根源などについては想到していない。またその自然と人間との関係などについてはあまり考えられていない。」と、痛烈に近代以降の登山を非難している。この記述は昭和年代のものであるが、内容は明らかに近代登山の幕が開く前と後を比較し、その登山が持つ質の差異を明確に指摘したものといえよう。また、明治 38（1905）年の日本山岳会の創立以後の 10 年間は、縦走登山という利用形態が始まった時期であり、小島烏水や武田久吉を登場させた第一期黄金時代とされる⁹⁾。

さらに、黄金時代が終わる 1910 年代から 1920 年代にかけて、慶応や学習院、東大などの大学の山岳部が先端に行く先鋭的登山の時代が幕を開け、スポーツとしての性格を一層強めた西洋風のアルピニズムに移行し、より高く困難な山を求めて海外遠征の時代に入る。

その後、大正時代（1912～1925 年）から昭和（1926～1988 年）初期にかけては、国民の生活水準の向上に伴い、エリート層を対象として大学生や社会人の間に登山とスキーが広まり、登山者が増加した。

日中戦争（1937～1945 年）から太平洋戦争（1941～1945 年）にかけては、各地の学校の集団登山などが見られたものの、不要不急な旅行や登山をやめようという社会全体の雰囲気から、登山熱は一旦影を潜めることとなる。

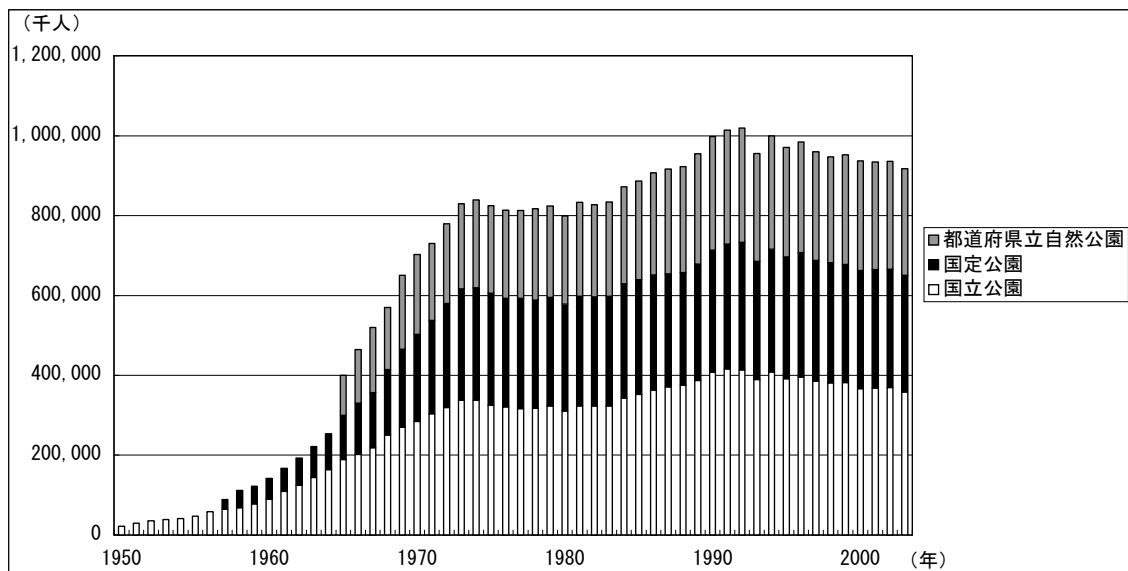
戦争が終わると、登山はすぐに復活し、昭和 31（1956）年の日本隊によるマナスル登頂がブームの火付け役となり、昭和 35（1960）年前後から登山が本格的に復活し、1970 年代までこのブームが続く。しかし、その後は若者の登山離れが始まり、登山者は減少する。

1990 年代に入ると中高年を中心とする登山ブームが始まり、近年では、米国や韓国、台湾などからの外国人登山者も増加している¹⁰⁾。

第3節 自然公園利用者数の変遷

本研究が自然公園の利用者数の多寡を問題として取り上げる以上、量の問題として、自然公園における利用者数についても概観しておきたい。環境省自然環境局が昭和 25 (1950) 年から平成 15 (2003) 年まで行った自然公園等利用者数調によって、自然公園の利用者数を図 2-3-1 に示す。利用者の増減の変化点を境にして概ね 4 期に区分することができる。

まず、戦後から昭和 49 (1974) 年までは増加の一途を辿り、これは「第 1 次利用拡大期」である。当初利用者数に関わる調査が 19 の国立公園で行われていたのに対し、昭和 49 (1974) 年には 367 の自然公園で実施されるようになっていたことが、統計的増加に含まれていることから、増加の全ての要因を明らかにするものではないが、敗戦国となったわが国が外貨獲得を意図し、国内外に対して国立公園の観光利用を宣伝したことや、昭和 25 (1950) 年に勃発した朝鮮戦争による軍需景気によって自然公園に対する国民的利用が促進されたことによるものである¹¹⁾。また、昭和 30 年代から昭和 40 年代にかけては高度経済成長期であり、国民の所得が著しく増加し、車での観光が一般化する中で、観光客を受け入れる国立公園においても多くの観光道路が開通し、昭和 40 年代末期までの増加をもたらしたと考えられる。



(環境省自然環境局 (1950~2003) : 自然公園等利用者数調により作成)

図 2-3-1 自然公園における利用者数の推移

しかし、昭和 48 (1973) 年のオイルショック (石油危機) 以後の、昭和 50 (1975) 年から昭和 58 (1983) 年にかけては利用者の増加には歯止めがかかり¹²⁾ ほぼ横這いであり、この時期は「**利用停滞期**」である。

さらに、昭和 59 (1984) 年からは、昭和 49 (1974) 年までの伸び率程ではないが、再び、利用者数が増加する「**第 2 次利用拡大期**」(昭和 59ー平成 4 年) を迎える。この間、国民の余暇時間の増加、自然とのふれあいの要求の高まり、リゾート構想に伴い、平成 4 (1992) 年には利用者数が延べ約 10 億 2 千万人に達している。

平成 2 (1990) 年のバブル経済の崩壊の影響や、わが国全体の人口構成の影響を受けてか、近年では概して減少傾向にあり「**利用減少期**」(平成 5 年ー) となっている。平成 15 (2003) 年の自然公園利用者数は延べ約 9 億 2 千万人である。

国立公園の利用者数についても全く同様の傾向があり、昭和 48 (1973) 年までは常に増加を示している。これについても、調査実施国立公園が 19 から 26 に増えていることが要因の一つである。また、昭和 49 (1974) 年から昭和 58 (1983) 年にかけて谷間があり減少を経て増加に転じつつほぼ横這いである。さらに、昭和 59 (1984) 年からは徐々に増加の傾向を示し、平成 3 (1991) 年には過去最高の延べ約 4 億 2 千万人が利用している。平成 4 (1992) 年以降は減少傾向を示し、平成 15 (2003) 年の利用者数は延べ約 3 億 6 千万人である。

特に利用者数の多い国立公園について利用者数の推移を整理したものが図 2-3-2 である。ここでいう利用者数の多い国立公園とは、国立公園数が現在の 28 に達する昭和 62 (1987) 年時点で利用者数の多い上位五つの国立公園を指している。中でも、富士箱根伊豆国立公園は昭和 40 (1965) 年に瀬戸内海国立公園を抜いて以来、最も利用者数の多い国立公園として位置している。これは、昭和 39 (1964) 年に伊豆諸島地域 (旧伊豆七島国定公園) の編入によるところも大きいですが、その後の利用者数の増加については、昭和 40 年代 (1965ー1974) に車での観光が一般化したという社会的背景や首都圏に近いという立地特性にも関連があると考えられる。伊豆諸島地域が編入された昭和 39 (1964) 年以降では、昭和 48 (1973) 年まで利用者数は増加を続け、自然公園および国立公園の利用者数の推移と同様に、昭和 49 (1974) 年から昭和 58 (1983) 年までの 10 年間に利用停滞期があり、この間利用者数はほぼ横這いである。自然公園全体において見られた谷間の最初の年が昭和 50 (1975) 年であり、国立公園全体で昭和 49 (1974) 年、富士箱根伊豆国立公園で昭和 48 (1973) 年とほぼ同時に同様の減少が見られるのは、この頃大きな社会問題となった昭和 48 (1973) 年のオイルショック (石油危機) の影響によるものと考えられる。昭和 59 (1984) 年以降は概ね利用者数が増加し、平成 3 (1991) 年には過去最高の延べ約 1 億 1 千万人を記録している。しかし、翌 (1992) 年以降は減少に転じ、平成 15 (2003) 年は延べ約 1 億人の利用者数となっ

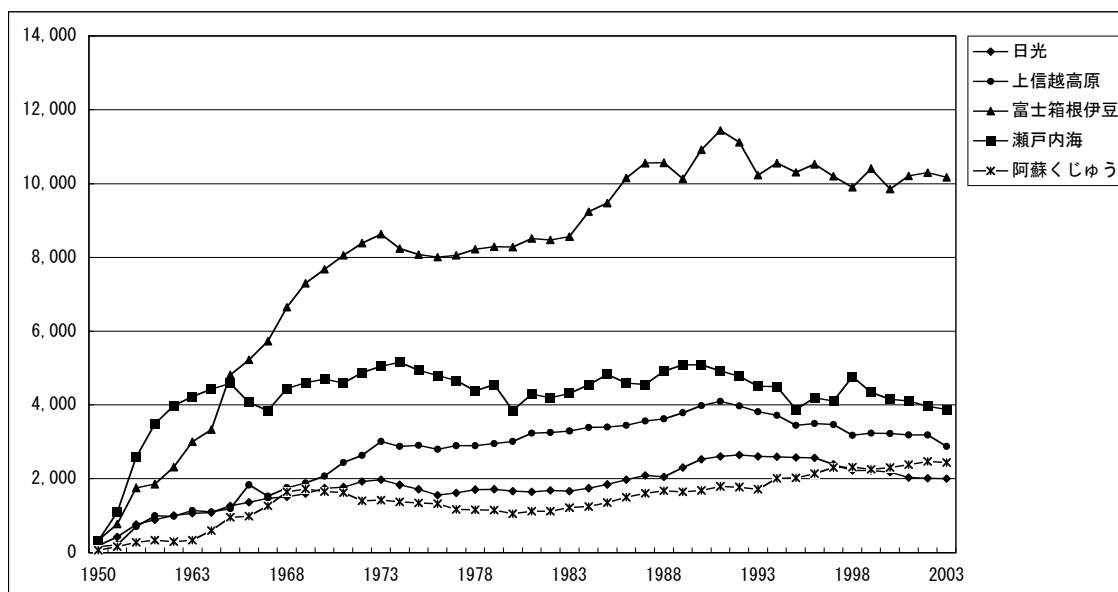
た。

昭和 62 (1987) 年時点で二番目に利用者の多い瀬戸内海国立公園では、富士箱根伊豆国立公園とは違った傾向を見せている。昭和 48 (1973) 年までの増加傾向は富士箱根伊豆国立公園と同様であり、この年 (1973 年) に過去最高の延べ約 5 千百万人を記録して以来、昭和 49 (1974) 年以降は概ね減少傾向にある。

一方、昭和 62 (1987) 年時点で第 3 位と第 4 位に位置する日光国立公園と上信越高原国立公園は富士箱根伊豆国立公園と全く同様の利用者数の推移を見せている。昭和 48 (1973) 年まで増加した後に、約 10 年間の谷間を経て、日光国立公園では平成 4 (1992) 年に過去最高の延べ約 2 千 6 百万人の利用者数を、上信越高原国立公園では平成 3 (1991) 年に過去最高の延べ約 4 千百万人の利用者数を記録し、以降は減少に転じている。

最後に、阿蘇くじゅう国立公園は、上述した富士箱根伊豆国立公園、日光国立公園、上信越高原国立公園、瀬戸内海国立公園の 4 つの国立公園に見られた傾向とは違った利用者数の推移である。昭和 44 (1969) 年まで増加した後は減少に転じ、昭和 55 (1980) 年からは再び増加し、平成 14 (2002) 年に過去最高の延べ約 2 千 5 百万人の利用者数に達している。阿蘇くじゅう国立公園において最後に公園区域の拡張が行われたのは昭和 28 (1953) 年の鶴見岳周辺道路沿線の拡張であることを考えれば、他の四つの国立公園と比較して、利用者数の推移に差異があると見てとることができる。

図 2-3-2 利用者数の多い国立公園における利用者数推移



(環境省自然環境局 (1950~2003) : 自然公園等利用者数調により作成)

以上、自然公園および国立公園における利用者数の推移について整理を行った。自然公園が戦後において急激に利用者が拡大し、停滞期を経て、平成に入り過去最高を記録していることや、近年では多くの自然公園において利用者数が減少傾向にあることが分かる。また、利用者数の変化とその変化をもたらす社会経済的な要因を関連づけた一連の整理を通し、自然公園や国立公園だけでなく、利用者数の多い上位五つの国立公園の中で、富士箱根伊豆国立公園や日光国立公園、上信越高原国立公園の三つの国立公園に共通して「第1次利用拡大期」、「利用停滞期」、「第2次利用拡大期」、「利用減少期」が見られた。

第4節 自然公園における利用の問題の扱われ方

前節で戦後において自然公園の利用者が増大する中で、自然公園や国立公園において共通する利用者数の変化点があることを把握した。ここでは、それぞれの時期において、自然公園の利用の問題やあり方はどのように捉えられ検討されてきたのか、主に、新聞報道や国立公園行政を担当した省庁における審議会の答申、制度的発展の背景を中心に、その経緯について見てみたい。

昭和6(1931)年に制定されたわが国の国立公園法は「大景観の保護と観光客の誘致」を目的するものであったが、昭和17(1942)年、戦争の緊迫化に伴い厚生省衛生課が廃止され温泉行政が一時中断し、同19(1944)年に国立公園事務が停止した。敗戦後間もなくは、外貨獲得の手段として国立公園の活用が期待されるなど、自然公園が持つ国民の保健、休養、教化の役割は忘れ去られていた¹³⁾。戦後再び、公園行政が機能し始めるのは、昭和24(1949)年のリッチー報告が契機となっている。これは、連合軍総司令部よりわが国に対して出された「国立公園指定は米国本土の国立公園専門家による調査報告を得た後に処理せよ」との指示を受けて、専門家として来日したチャールズリッチー氏によって作成された報告書である。その主な内容はわが国の国立公園行政のあり方、財政、組織も含む管理運営のあり方であり、戦後の国立公園行政に多大な貢献をしたと言われる¹⁴⁾。

第1次利用拡大期(昭和25年～同49年)に入ると、国立公園法において当時の事情に即応しない点が多くなってきたことや、もっと広い範囲の公園を対象にすべきとの考えから自然公園法の作成が進められ¹⁵⁾、昭和32(1957)年に同法を廃止し、自然公園法が公布された。この第1次利用拡大期の中でも初期においては、登山客のマナーの悪さやキャンプ熱の高まり、利用者層の中に家族連れが増加するなどの利用の問題や質的变化が指摘されるものの、利用そのものの問題が社会問題にまでは発展していない。そのことよりも、自然公園の指定が鉱業などの産業を圧迫することを懸念する声があがり、「観光か産業か」という対立¹⁶⁾や、尾瀬などのように電源開発構想に関連して「電気かコケか」「国民が大事かトンボが大事か」といった自然保護と開発の対立¹⁷⁾が生じ、これらの問題が大きな社会問題となった。

昭和30年代後半(1960年代)からは、生活水準の向上やレジャーブーム、都市における生活環境の過密化に伴って、国民のレクリエーションに対する関心が急速に高まりつつある傾向に対し、これらの生活欲求を満たすための施策を積極的に推進するため、厚生省国立公園部の局昇格が検討され始めた(昭和39(1964)年に局昇格)¹⁸⁾。また、そのような状況の中で、統一した自然公園大系を作り出す必要性から、昭和36(1961)年に自然公園審議会の「国立公園の体系整備について」(答申)、同37(1962)年に同

審議会の「国定公園の候補地の選定について」(答申)が出された。これらの答申の内容は、主に公園を体系付けすること、国定公園の候補地を選定することであり、利用の問題やそのあり方は扱われなかった。その後、レジャーブームや観光道路の開通によって、国立公園の利用者は昭和 38 (1963) 年までの五年間で倍増し、公園に関わる宣伝が活発になる一方で、公園の貴重な植物が荒らされ景勝地にゴミがあふれるという問題が顕在化し、自然公園美化運動が開始されることとなった¹⁹⁾。また、自然公園における公共投資の立ち後れから、各国立公園間の整備の不均衡、民間における営利主義の弊害のあることが問題視された²⁰⁾。この状況に鑑み、厚生省は自然公園審議会に対して「自然公園制度のあり方とその基本的方策」について諮問し、自然公園審議会は昭和 41 (1966) 年の中間答申において(1)土地買い上げ制度、(2)施設の整備、(3)管理機構の教化、(4)自然保護思想の徹底、の必要性を指摘した²¹⁾。この答申は、利用の問題を検討したものではないが、自然公園法が自然保護の精神をうたっているにもかかわらず積極的な保護策を実行に移す権限を明確にしていないという不備を指摘し、後の自然環境保全法の制定(昭和 47 (1973) 年)、自然公園法および自然環境保全法の改正(昭和 48 (1973) 年)に繋がった。しかし、自然保護のための管理体制は法令の整備によっても確立できず、同(1973)年には行政管理庁が「開発に対する国や都道府県の歯止め策が確立していないことが破壊の一因となっている」として、昭和 46 (1971) 年に設置された環境庁をはじめ関係省庁に自然保護行政の強化を勧告した²²⁾。その後、マイカー利用が自然をゆっくり楽しむという国立公園本来の目的をそこなうものであることから、環境庁が尾瀬などをモデル地区として国立公園内自動車適正要綱にもとづいてマイカー規制を実施し²³⁾、自然公園の利用を直接コントロールできる施策を講じた。さらに、第 1 次利用拡大期の終わり頃、昭和 49 (1974) 年には「自然公園における収容力に関する研究(最終報告書)」²⁴⁾が報告され、国立公園の利用の管理のための手法として受け入れることのできる自然公園の利用者数が提案された。このように、第 1 次利用拡大期の末期には自然公園の利用の管理に関わる施策や研究報告が行われたが、総じて、自然公園の利用が拡大していく中で自然保護のための管理体制が構築された時期といえる。

利用停滞期(昭和 50 年～同 58 年)に入ると、多くの自然公園において問題となっていたゴミやトイレの問題を解決することや、自然公園の利用に対してより積極的に介入していくことを意図して、環境庁によって昭和 50 (1975) 年から「公園専用地区」の設置が検討され始めるようになり、土地の買い上げ制度や入山規制、入山料徴収などの具体的な管理施策が検討され始める²⁵⁾。また、翌(1976)年、自然環境保全審議会は、時代の変化にあわせて自然公園それぞれの計画を、保護規制強化の方向で再編成する必要があることを指摘し、特別地域、特別保護地区の拡張の必要性を示唆した²⁶⁾。こうし

た一連の動きはそれまでの自然保護のための規制を強化しようとするものであり、自然公園の利用のより良いあり方が探求された時期ではなかった。しかし、利用停滞期が終わる昭和 58（1983）年には、環境庁が（1）無秩序な利用を防ぐこと、（2）自然景観を保護すること、（3）利用者の安全を図ること、（4）自然保護思想の普及啓蒙や自然に対する理解を深めること、を目的として自然公園の施設整備の予算を要求しており²⁷⁾、自然保護だけでなく、自然公園利用の促進を意図する内容も含まれる。また、前（1982）年には、日本自然保護協会がボランティアレンジャー（自然解説指導員）の募集を開始しており、環境庁の予算要求の中に見られる考え方は、自然公園における利用の変化に対応したものと考えられる。こうして、ようやく施設整備にもとづいた自然公園利用の促進についても議論されるようになったが、総じて、利用停滞期は自然保護のための規制の強化が図られ、具体的な施策が検討された時期と位置づけられる。

第 2 次利用拡大期（昭和 59～平成 4 年）になると、昭和 60（1985）年から、環境庁が国立公園ガイドのボランティアの養成を始め、自然公園の利用者の行動に対して誘導を行う事業を開始する。また、当時行政的手法としてもはやされた民間の活用策として、環境庁が民間企業に融資し、自然公園の利用施設づくりを進めることが決定され、それまで自然保護を基調として歩んできた自然公園行政の規制の姿勢が緩むことが懸念された²⁸⁾。しかし、この決定は、民間を監督、指導しやすくするというだけでなく、自然公園で起きていた利用の集中を緩和し、分散を図ることをも目的としており、よりよい利用のあり方が模索されている。このような状況の中で、平成元（1989）年に自然環境保全審議会自然公園部会利用のあり方検討小委員会によって「自然公園の利用のあり方について」（報告）²⁹⁾が報告された。これは、国が戦後初めて自然公園における利用上の問題点を正面から検討した報告であり、以下のようなことが指摘された。一つは利用上の問題点として、自然公園に対して多様なイメージ（本文中では期待という言葉も用いられている。）が混在することを指摘し、国立公園、国定公園、都道府県立自然公園の基本的方向性を考えるべきとしている。二つ目は、従来の公園計画制度が自然の風景を観賞する周遊型観光を前提とし、点と線の計画で十分だったものが、自然をゆっくりと楽しむ探勝型やスポーツ等を目的とする滞在型への変化によって、既存の公園計画制度が制度疲労に陥っていることである。三つ目は、わが国の観光客はこれまで混雑やわい雑さに比較的無頓着であり、植生等への影響だけでなく騒音など、自然公園内の有名観光地の多くで過剰利用が発生していることである。その他、地形や雪、風、波等の自然条件によって成立する新たな自然利用や、施設整備や管理の遅れ、既存の利用拠点の再検討の必要、に対して配慮していくべきことを指摘し、利用の基本的な考え方として「持続的利用」を原則とすべきとした。しかし、それまで自然公園行政の対象外とされてきた面的な開発を認める内容を含むことから、日本自然保護協会は「規制が緩和

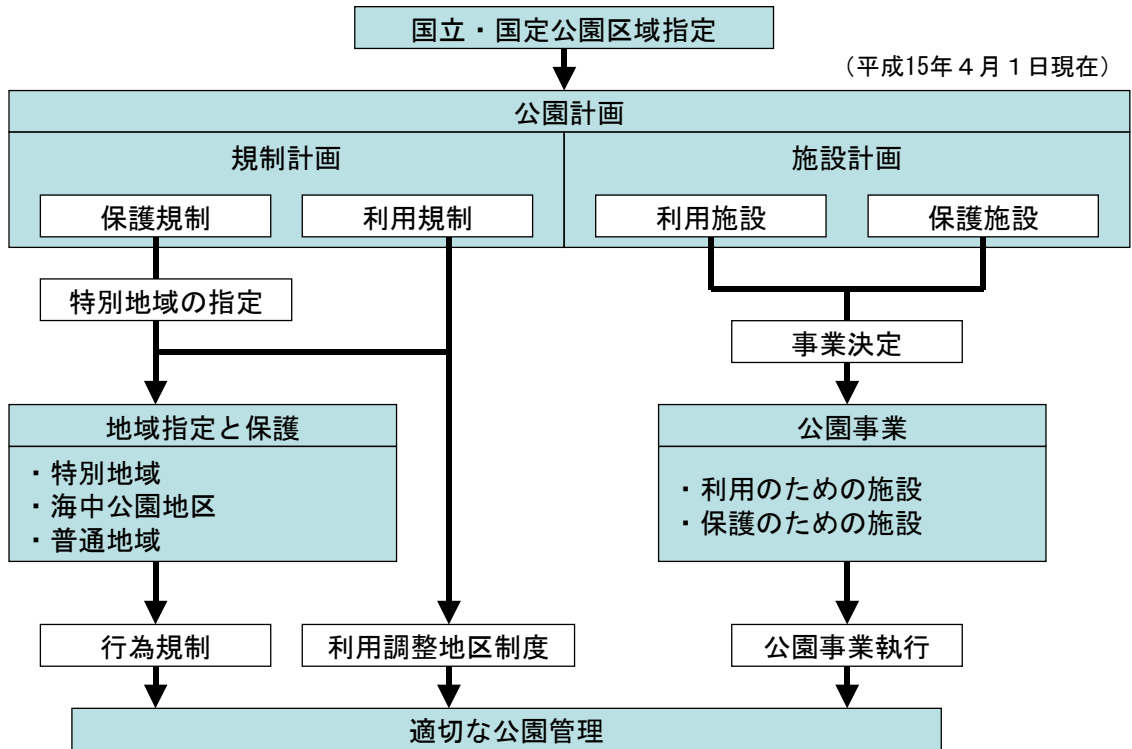
されることがあってはならない」と警告した³⁰⁾。一方、環境庁が実施する具体的な施策としては、平成3（1991）年に上高地で初めてチップトイレ制を導入し、利用停滞期から検討されてきた施策が、利用者の善意という形で実現されるに至った。概して、第2次利用拡大期は、利用の問題が戦後初めて正面から検討され、自然公園行政が自然保護から利用を含めた保全へと転換した時期と位置づけられる。

利用減少期（平成5年～）には、平成7（1995）年に中央環境審議会自然環境部会によって「自然公園のあり方に関する中間答申」³¹⁾が行われた。自然公園においては、単なる行楽的な利用から、より原始的で神秘的な自然とふれあうことや、自然のしくみを理解することへの要求が高まっているとして、自然公園の役割の明確化や地域指定（ゾーニング）のあり方、保護管理手法など継続して審議すべき課題を示した上で、利用の調整等について提案を行っている。この答申を受け、平成14（2002）年に自然公園法が改正された。この新しい自然公園法は、自然公園が保護すべき「景観」の重要な要素が動植物等の生物多様性であることを明記するとともに、規制の対象や内容を拡充、強化するものであり、特に利用調整地区制度は公園への立ち入りを認定制とし、利用者数の人数を調整できるものである³²⁾。この改正内容は、利用停滞期において既に検討されたことがようやく結実したものとも捉えられるが、利用に対する調整が法的構成を持って実現した点で画期的な改正である。その意味で、利用減少期は、自然公園の利用の問題を解決するための具体的施策が決定された時期といえる。

以上のように、自然公園における利用の問題は、第1次利用拡大期や利用停滞期においては自然保護のための規制の問題として扱われ、制度上の問題や土地所有の問題が取り沙汰されたが、第2次利用拡大期から混雑など利用上の問題が検討されるようになり、利用減少期に入ってようやく、原生自然とのふれあいの確保等を意図して、自然公園の利用の問題を解決するための具体的な管理施策が検討され、決定されたといえる。

現在の自然公園は、日本のすぐれた自然の風景地を保護し、国民の保健休養教化に資するために法律および条例によって設定されている。しかし、平成18（2006）年2月現在、利用調整地区が設定された例はなく、昭和49（1974）年の自動車利用適正化要綱に基づくマイカー規制等を併用しつつ、利用施設と保護施設から成る施設計画によって、利用を誘導していくことが基本的な方向性となっている^{33) 34)}（図2-4-1）。自然公園における問題は、単に量としての利用者数が増加しただけでなく、質としての利用の変化にも、その所在を認めることができ、上述した答申等にも記述されている通り、自然公園が保護すべき対象は自然環境だけでなく、利用者の体験の質もまたその対象といえる。それゆえ、自然公園利用の一側面として、利用形態の検討が求められる。

図2-4-1 自然公園制度のしくみ



(出典：財団法人国立公園協会（2004）：自然公園の手引き， p. 53)

第5節 自然公園の利用の類型区分

かつて、観光行為といえば風景鑑賞を除いては考えられなかった³⁵⁾。現在では、単なる風景鑑賞にとどまらず、「見る」から「する」(行動する、体験する)観光へ、そして「味覚」や「嗅覚」等を含めた五感に働きかけるものへと、その対象を拡大している。こうした人々の利用の志向の変化に伴って、自然公園に求められる役割も変化しており、管理施策を含めた自然公園計画を考える上で、利用を類型区分することが重要である。

まず、日本自然保護協会は自然環境の状況と利用形態に着目して類型区分を提案した³⁶⁾。その区分では、(1)生態系保全重視タイプ、(2)景観・レクリエーション重視タイプ、(3)歴史・文化公園タイプ、の三つに区分され、典型事例として(1)では知床国立公園や釧路湿原国立公園、霧島屋久国立公園屋久島地区が、(2)では富士箱根伊豆国立公園や大山隠岐国立公園、阿蘇くじゅう国立公園が、(3)では伊勢志摩国立公園や日光国立公園東照宮周辺地域が、挙げられている。

また、堀繁は国立公園の区域決定の意図の観点から、傑出した風景に着目しその視点と視対象を一体的に取り込むことを意図した「景観重視型」や、相互の関係は問わずに珍しい地形地質、美しい小池などの興味対象を取り込むことを意図した「要素重視型」、自然保護を重視する「自然保護重視型」、合衆国のパークウェイの思想を導入して区域決定を行った「道路公園型」などに分類した^{37) 38) 39)}。

その他、平成元(1989)年の自然環境保全審議会自然公園部会利用のあり方検討小委員会による「自然公園の利用のあり方について」(報告)⁴⁰⁾では、利用上の性格から自然公園の各地域を、Ⅰ)野生探勝型、Ⅱ)自然探勝型、Ⅲ)風景鑑賞型、Ⅳ)自然地保養型、の4つに分類し、利用類型に対応した公園事業を実施することを提言している。

日本自然保護協会や堀による分類は、自然公園が重視する保全対象を明確にしていることや、自然公園の指定意図を明解に分類していることから、公園管理者にとって何が効果的な施策となりうるかを考える上では多くの示唆を含む。また、自然環境保全審議会自然公園部会利用のあり方検討小委員会の報告のように、利用の実態を考慮することは重要であるが、分類軸をより明確にする必要がある。そこで、本稿が山岳性自然公園に着目することから、より限定的に自然公園を捉え、その利用を分類する。

さて、本章ではまずわが国の登山史を概観したが、それにより、アルピニズムに代表される近代登山の潮流は明らかにそれまでの伝統的登山と質を異にすることが明らかである。しかし、信仰を基盤とした登山形態が少なくなっている現代において、伝統的な登山形態の自然公園利用者と現代の登山形態を有する自然公園利用者に対する心理的影響を量的に比較することは不可能である。そこで、もう一度、日本の登山史に立ち戻ってみたい。

明治 38 (1905) 年の日本山岳会の創立以後の 10 年間に見られた、わが国の登山の黄金期が終わる頃、日本の山に本来相応しい登り方があるのではないかとじっくり思考をめぐらす人たちが現れてきた⁴¹⁾。例えば、大島亮吉はゆったりと気ままに山を楽しむ登山のあることを紹介し、それを静観的登山と呼んで、日本人にもそうした登山のあることを教えた。また、日本の山の山容が西欧のアルプスとは違うことに気づき、日本古来の登山の伝統を生かした静かな登山こそが日本人に向けた登山だと考えたのが、田部重治と木暮理太郎の二人である。彼らは、一刻を争いあえて危険や困難に挑むような競争的な登山の様式に疑問を抱き、自然の美を楽しみながらゆったりと歩く登山こそ、日本人にふさわしい本来の登山ではないかと説いた。奥多摩や秩父山地での山歩き体験などを踏まえて、初登頂などで名声や名誉を得ることではなく、悠々と山を楽しむことのほうが大切だと考えたのである。その結果、田部重治と木暮理太郎の登山は当時の先鋭的な学生達の登山とは一線を画すこととなり、溪流や森林を好んだ彼らの登山は「低山趣味」と揶揄されることもあったとされる。

田部重治と木暮理太郎が掲げた登山と当時の先鋭的な学生達の登山の決定的な差異は何であろうか。前者が面的な登山であるのに対し、後者が点的な登山であるという、空間の利用の仕方にも違いが見られるが、田部重治と木暮理太郎が掲げた登山では、明確な目的地あるいは到達点無く、面的に周遊する登山形態であり、一言で言えば「**時間消費型**」の利用形態である。一方、当時の先鋭的な学生達による登山では、頂上に到達することが唯一無二の目的となり、一点を目指す登山形態であり、言うなれば「**目的達成型**」の利用形態である。そこで、自然公園の利用の類型区分の分析軸として、「時間消費型」と「目的達成型」を両極とする利用形態の軸を設定した。時間消費型の自然公園利用の例としては、山麓を歩いて風景、自然を楽しむトレッキングやハイキングの他、森林浴や散歩、川遊びも該当し、利用の過程で目的が変化しうることも一つの特徴である。反対に、目的達成型の自然公園利用の例としては、頂上を目指す登山の他、スキーやテニスなどのようなスポーツ利用や社寺参拝などがあり、明確な目的を有することが特徴である。さらに、時間消費型と目的達成型の間位置するものとしては、オリエンテーリングや霊場巡礼などが挙げられる。

本稿が利用者数の多寡を問題とすることから、もう一つの自然公園の利用の類型区分の分析軸として、「**利用者数が多いタイプ**」と「**利用者数が少ないタイプ**」を両極とする利用者数の軸を設定した。利用者数が多い自然公園利用の例としては、自然現象や記念すべき日などによって、ある一定の時間、空間に人が集中する利用であり、花見や紅葉狩り、初詣などの利用が該当する。反対に、利用者数が少ない自然公園利用は、特定の時間と空間に人が集まらない利用である。

以上の二つの軸によって、わが国の山岳性の自然公園の利用は①「時間消費型」で「利

「利用者数の多いタイプ」の自然公園利用、②「目的達成型」で「利用者数の多いタイプ」の自然公園利用、③「時間消費型」で「利用者数の少ないタイプ」の自然公園利用、④「目的達成型」で「利用者数の少ないタイプ」の自然公園利用、の四つに類型区分される。本稿が、利用型（利用形態）の異なる自然公園において、多数の利用者の存在が自然公園利用者の期待に及ぼす影響を明らかにすることを目的とすることから、この四つのタイプの利用型すべてが研究対象となる（図 2-5-1）。

図 2-5-1 自然公園の利用の概念的類型区分

		時間消費型	（利用形態）	目的達成型
多い ・ 利用者数 ・ 少ない		タイプ① 「時間消費型」 でかつ 「利用者数の多い」 自然公園利用		タイプ② 「目的達成型」 でかつ 「利用者数の多い」 自然公園利用
	タイプ③ 「時間消費型」 でかつ 「利用者数の少ない」 自然公園利用		タイプ④ 「時間消費型」 でかつ 「利用者数の少ない」 自然公園利用	

第6節 本章のまとめ

本章では、まず、自然公園において主要な利用形態と考えられる登山について、わが国の登山史を概観することによってその質の変容を把握し、近代登山の幕開けによって、アルピニズムに代表されるように単に頂上への到達を目指す登山と、悠々と山を楽しむ日本らしい登山の形態が出現したことを整理した。また、自然公園の利用者数の変遷を概観し、利用者数の変化点によって、自然公園の利用を4期に区分した上で、利用者数の変化とその要因について考察を行った。さらに、自然公園における利用の問題として、第2次利用拡大期から混雑などの利用の問題が検討されるようになり、利用減少期に入ってようやく、原生自然とのふれあいの確保等を意図して、自然公園の利用の問題を解決するための具体的な管理施策が検討され、決定されたことを明らかにした。以上をふまえて、研究対象地を選定するための自然公園の利用を類型区分するための分析軸として、「時間消費型」と「目的達成型」を両極とする利用形態の軸と、「利用者数が多いタイプ」と「利用者数が少ないタイプ」を両極とする利用者数の軸を設定し、その二つの軸によって自然公園を四つに区分し、これらを研究対象とした。

補注および引用・参考文献

- 1) 塚本静雄 (1989) : 自然公園と登山 : 国立公園 478, 10-13
- 2) 村上俊雄 (1956) : 山岳と宗教 : 国立公園 80, 8-13
- 3) 近藤信行 (1989) : 山と人間-日本の登山史のことなど : 国立公園 478, 2-8
- 4) 日本風俗史学会 (1979) : 日本風俗史事典 : 弘文堂, 812pp.
- 5) 小泉武栄 (2001) : 登山の誕生 : 中公新書, 224pp.
- 6) 渡辺善次郎 (1977) : 江戸時代の登山と自然 1 : 国立公園 326, 4-7, 15
- 7) 渡辺善次郎 (1977) : 江戸時代の登山と自然 2 : 国立公園 327, 16-20
- 8) 前掲 2)
- 9) 前掲 5)
- 10) 穂苅貞雄 (1989) : 最近の登山の変遷 : 国立公園 478, 14-16
- 11) 例えば、朝日新聞 (1953) : 4月28日朝刊
- 12) 溝尾良隆他 (1983) : 観光需要の時系列分析 : 日本観光協会
- 13) 例えば、朝日新聞 (1946) : 11月15日朝刊
- 14) 環境庁自然保護局編 (1981) : 自然保護行政のあゆみ : 第一法規出版, 786pp.
- 15) 例えば、朝日新聞 (1951) : 12月21日朝刊
- 16) 朝日新聞 (1954) : 12月12日夕刊

- 17) 朝日新聞 (1950) : 2月3日朝刊
- 18) 朝日新聞 (1963) : 11月21日朝刊
- 19) 朝日新聞 (1963) : 4月7日夕刊
- 20) 朝日新聞 (1964) : 8月31日朝刊
- 21) 朝日新聞 (1966) : 8月17日朝刊
- 22) 朝日新聞 (1973) : 3月26日朝刊
- 23) 朝日新聞 (1974) : 3月28日朝刊
- 24) 環境庁自然保護局 (1974) : 自然公園における収容力に関する研究 (最終報告)
- 25) 朝日新聞 (1975) : 10月6日朝刊
- 26) 朝日新聞 (1976) : 10月28日朝刊
- 27) 朝日新聞 (1983) : 1月19日朝刊
- 28) 朝日新聞 (1986) : 8月26日夕刊
- 29) 自然公園施設研究会編(1993) : 自然公園等施設整備実務必携: 第一法規出版, 392-416
- 30) 朝日新聞 (1989) : 5月25日朝刊
- 31) 中央環境審議会自然環境部会 (1995) : 自然公園のあり方に関する中間答申
- 32) 加藤峰夫 (2003) : 自然公園制度の新たな展開と課題-利用調整地区を例として : 国立公園 618, 8-11
- 33) 昭和 14 (2002) 年改正自然公園法
- 34) 財団法人国立公園協会 (2004) : 自然公園の手引き, p. 53
- 35) 日本自然保護協会 (1985) : 自然保護のあゆみ-尾瀬から天神崎まで、日本自然保護協会三十年史 : 日本自然保護協会, 494pp.
- 36) 財団法人日本自然保護協会・国立公園制度検討小委員会報告書 (2000) : 日本自然保護協会報告書 88「豊かな自然・深いふれあい・パートナーシップ-21世紀の国立公園のあり方を考える」 : 財団法人日本自然保護協会, 128pp.
- 37) 堀繁 (1993) : わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究 (I) - 指定と保護計画 : 東京大学農学部演習林報告 90, 97-182
- 38) 堀繁 (1994) : わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究 (II) - 利用計画と管理 : 東京大学農学部演習林報告 91, 137-209
- 39) 景観デザイン研究会 (1998) : 景観用語事典 : 彰国社, 112-113
- 40) 自然公園施設研究会編(1993) : 自然公園等施設整備実務必携: 第一法規出版, 392-416
- 41) 前掲 5)

第3章 自然公園利用者の意識把握のための手法の検討と構築

第1節 本章の目的と構成

本章の目的は、自然公園における利用者の意識を把握するための手法を検討し構築することである。そこで、第2節では、本研究における期待、満足、不満に対する考え方を整理し、自然公園における利用者の期待の分類の方向性について検討する。また、第3節では、利用類型に応じた研究対象地の選定を行い、自然公園史と近年の利用の概況から研究対象地の概要を把握した上で、調査方法およびアンケート調査票の構成を決定する。第4節では、本章を小括する。

第2節 調査指標の設計のための概念整理

(1) 期待、満足、不満に対する考え方

なぜ自然公園に人が訪れるかという問いに対して明確に答えることは難しい。しかし、公園における実際の利用体験を通して訪れた人が何かしらの満足や不満を抱くという事実は、少なくとも利用者が利用体験以前に期待を持って自然公園に訪れているということの意味する。しかも、その期待は、将来において実現し帰結することが望まれていると言える。従い、期待が高いほど、実現し満たされる可能性は低くなり、期待が低ければ満たされる可能性は高くなる。満足については、既に定義した通りであるが、利用者にとって満足が獲得できるか否かの決定的な要因は、期待の水準と実際の利用体験の質の水準のどちらが上にあるかということであり、満足の高さは、期待の高さに対する相対的な位置関係によって決まると言えよう。即ち、自然公園の利用者がある一つの体験に対して満足と不満のいずれを感じるかは、客観的な絶対的水準によるのではなく、個人の持つ主観的な期待の水準に関連するということである¹⁾。

利用者が持つ期待の水準については、理想的にはこの程度期待したいという(1)理想水準や、実際のところはこの程度期待したいという(2)現実水準、これだけは最低限期待したいという(3)最低水準、の三つがあると考えられ、実際の利用では(2)現実水準によって満足と不満が生じていると考えられる。

一方、自然公園等のレクリエーション地において満足に類する指標を用いる際の問題として、高い満足度となる恒常的傾向や、現状への肯定志向が指摘されており²⁾、満足感に関わるこれらの傾向は本研究を遂行するにあたり留意すべき点である。その意味においても、満足の検討を有効に行うためには、満足そのものの解釈ではなく、満足が

生起する以前の期待の意味を解釈し把握していくことが重要と考える。

(2) 自然公園利用者の期待の分類の方向性

利用者の期待は一樣でないことから、調査を通じ把握される多様な期待を分類する必要がある。既に述べた通り、自然公園が持つ魅力に対して利用者は「期待」を持って、自然公園を訪れる。この期待が満たされれば利用者は「満足」し、その期待が満たされなければ「不満」に感じると考えられる。従い、利用者の期待を推測する方法は、満たされた期待がいかん満足として記述されるか、否定（阻害）された期待がいかん不満として記述されるかを把握することであり、この満足や不満に共通する性質を解釈することである。よって期待の分類は、次節で詳述する予備調査において実際に観測された利用者の満足や不満について解釈することによって行い、既往の知見と照らし合わせることで分類の意味や妥当性についても検討を加えた。

第3節 研究対象地の選定と調査設計

(1) 利用類型に応じた研究対象地の選定

第2章において、利用者数および利用形態の軸によって自然公園の利用を、①「時間消費型」で「利用者数の多いタイプ」の自然公園利用、②「目的達成型」で「利用者数の多いタイプ」の自然公園利用、③「時間消費型」で「利用者数の少ないタイプ」の自然公園利用、④「目的達成型」で「利用者数の少ないタイプ」の自然公園利用、の4つに類型区分した。近年利用者数が多い自然公園としては、富士箱根伊豆国立公園（平成15（2003）年現在：約1億2百万人）や瀬戸内海国立公園（同：約3千9百万人）、上信越高原（同：約2千9百万人）、阿蘇くじゅう国立公園（同：約2千4百万人）、日光国立公園（同：約2千万人）等が挙げられ、これらの国立公園では利用の集中が生じている可能性が高く、利用者数の多いタイプと少ないタイプの両者が見られると考えられ研究対象地の候補となる。さらに、①および③の要件である「時間消費型」の利用が見られる自然公園として、美幌峠（阿寒国立公園）の草原やブナ平、尾瀬ヶ原（ともに日光国立公園）の湿原、吉野山千本桜（吉野熊野国立公園）などの、公園資源が各所に点在する自然公園があり、このうち日光国立公園の尾瀬ヶ原（図3-3-1）を研究対象地とした。また、②および④の要件である「目的達成型」の利用が見られる自然公園として、富士山（富士箱根伊豆国立公園）や浅間山（上信越高原国立公園）、根子岳（阿蘇くじゅう国立公園）、女峰山（日光国立公園）などの独立峰があり、このうち富士箱根伊豆国立公園の富士山（図3-3-2）を研究対象地とした。

(2) 研究対象地の概要

自然公園における利用者意識を把握する効果的な研究手法を構築するためには、研究対象地の成立過程や社会思潮、利用形態の成立背景を理解する必要がある。そこで、時間消費型の利用が見られる自然公園の代表事例とした尾瀬ヶ原と、目的達成型の利用が見られる自然公園の代表事例とした富士山について、自然公園史と利用の概況について整理を行う。

1) 自然公園史

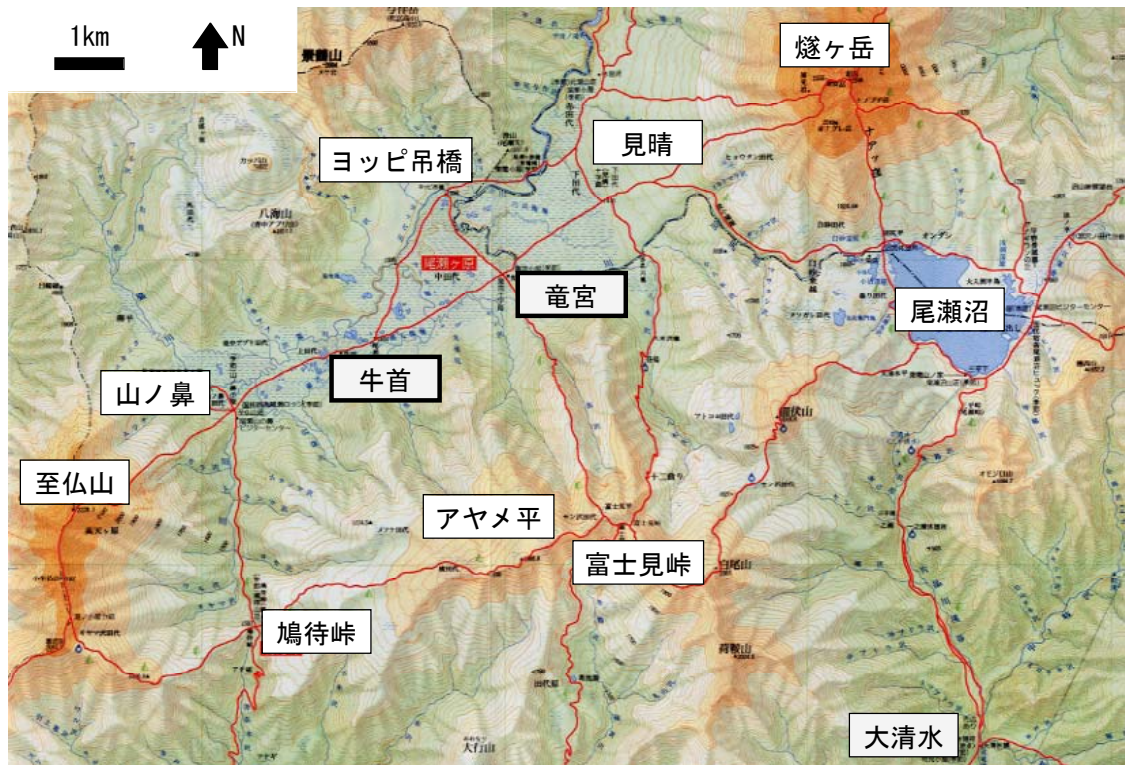
i) 尾瀬ヶ原



日光国立公園内に位置する尾瀬（図 3-3-3）は、その極めて優れた景観や学術上の貴



重さだけでなく、開発と自然保護の軋轢、保護と利用の両立といった、いくつもの困難な課題が大きな社会問題となったことにより、わが国の自然保護のシンボル、あるいは自然保護運動の発祥の地と言われ続けてきた。このことは、日本の自然保護運動において中心的役割を果たしてきた日本自然保護協会（昭和 26（1951）年創立）の前身が、電源開発による破壊から尾瀬を守ることを主な活動とした「尾瀬保存期成同盟」（昭和 24（1949）年結成、昭和 26（1951）年解散）であること³⁾からも明らかである。また、わが国の自然保護運動の展開において、尾瀬の水力発電計画と景勝保護の問題が、黒部川や北上川の水力発電問題と同様にいち早く社会の注意をひき、政治問題にまで発展する機縁を作ったことから明らかである^{4) 5)}。それゆえ、尾瀬の自然保護運動の歴史はわが国の自然公園の中でも長く膨らみがある（表 3-3-1）。



尾瀬保護財団（年不詳）：「尾瀬ウォーキングマップ」に加筆

図 3-3-3 尾瀬全体図

しかし、登山対象としての尾瀬の歴史は驚くほど短い。明治 22（1889）年に平野長蔵によって開山されたことで知られるように、尾瀬と宗教あるいは信仰の関わりは少なく、明治 28（1895）年に初めて雑誌『太陽』において紹介されるまでは社会的な認知度は低かったと考えられる。

尾瀬が広く世間に知られるようになったのは、前述したように、明治 36（1903）年

図 3-3-2 富士山（平成 14 年 7 月 11 日、筆者撮影）

の尾瀬ヶ原ダム計画以後、度重なる電源開発と自然保護の軋轢が報じられたことによる。一方、国立公園としての指定を受けるまでの道のりは早く、明治 45（1912）年の帝国議会において「日光ヲ帝国公園トナス請願」が採択されるなど、わが国の国立公園の中でも尾瀬ヶ原が所在する日光国立公園の重要性は当時から認識されていたと考えられる。そして、昭和 9（1934）年には瀬戸内海、雲仙、霧島に次いで、阿寒や大雪山、中部山岳、阿蘇とともに国立公園に指定された。

戦後、尾瀬保存期成同盟が結成される昭和 24（1949）年には、NHKラジオで「夏の思い出」が放送され、尾瀬の人気は不動のものとなった。また、当時自然公園行政の担当機関であった厚生省も国際観光地として日光、富士箱根、瀬戸内海の国立公園に対して、熱い期待を寄せていることから⁶⁾、第 2 章第 3 節において自然公園利用者数の変

遷を概観した通り、来訪者の増加に裏付けられる国民的人気だけでなく行政としてもその公園的価値を評価していたと考えられる。その後、日光国立公園の利用者数は増加の一途を辿り、昭和 27 (1952) 年に山口営林署によって尾瀬ヶ原に木道の敷設が開始された。しかし、同じ尾瀬でも福島県側は国有地となっていたため林野庁の予算で道路が整備され、貴重な植物の保護が図られていたのに対し、群馬県側は東京電力の私有地であるため道が悪く、植物は踏み荒らされ放題となった⁷⁾。この頃はまだ、尾瀬の自然保護のための管理体制の足並みは揃っていなかったと考えられる。昭和 28 (1953) 年にはわが国で初めて配置された国立公園管理員の 6 名のうち 1 名が日光湯本に配属された。

こうして、尾瀬の自然保護にむけた管理体制が徐々に整う中、尾瀬は昭和 28 (1953) 年に国立公園特別保護地区、昭和 31 (1956) 年に天然記念物、昭和 35 (1960) 年に特別天然記念物に指定され、公園資源の保護のための法的根拠が備わった。この頃から尾瀬ヶ原では、山小屋等の宿泊施設に収容しきれないほどの利用者が訪れるようになる⁸⁾が、このことが自然公園の利用の問題として扱われることはなく、植物が荒らされゴミが放置される事態の方が問題として重要視されていた。事実、尾瀬ヶ原の集団施設地区では多くの自然公園に先駆けて、自然公園美化運動が開始された⁹⁾。

昭和 40 年代から車での観光が一般化し、レジャーブーム等による観光地の宣伝が活発化する中、昭和 40 (1965) 年には群馬、新潟、福島 3 県による尾瀬・奥只見観光促進会議が開催された。これは、地域振興あるいは観光振興を意図したものと考えられるが、尾瀬の湿原の荒廃が社会問題として取り上げられるようになり、同 (1965) 年には文化財保護委員会が踏み荒らされ放題の尾瀬の自然を守るため、保護区の設置と立ち入り禁止措置の検討を始めた¹⁰⁾。また、厚生省国立公園局が特別保護地区内に車道やケーブルを認めないこと、木道の幅を二倍に広げ、往復二道に付け替えることを盛り込んだ、尾瀬を守る計画を発表した¹¹⁾。さらに、翌 (1966) 年には群馬県に「尾瀬の自然を守る保護委員会」が発足し、アヤマ平で裸地化した湿地の回復事業が始まった。

昭和 46 (1971) 年には尾瀬自動車道計画が中止となり、翌昭和 47 (1972) 年には現在既に自然公園利用者によって当然の行為として認知されている、ゴミ持ち帰り運動が始まり、同年、群馬県で「尾瀬憲章」を制定した。さらに、昭和 49 (1974) 年には鳩待峠と沼山峠で、全国の自然公園のモデル地区としてマイカー規制が始まるなど、自然保護のための取り組みが次々と始められるようになった。しかし、実際にはゴミ持ち帰り運動はうまく行かず¹²⁾、ゴミかごを撤去するなどの工夫を経て、運動の効果が現れ始めるのには数年の時間を要した¹³⁾。

昭和の終わり頃から平成にかけては、尾瀬の水質基準が設定され、山小屋においてシャンプーや石鹸の使用が禁止されるなど、湿原や沼に対して配慮した取り組みがなされるようになった¹⁴⁾。また昭和 63 (1988) 年には尾瀬を守る懇話会が「尾瀬は観光客の

入りすぎにより生態系のバランスが崩れてきており、早急に入山規制が必要」と提言し、入山料徴収についても提案した¹⁵⁾。この頃から、尾瀬の自然保護の取り組みは、広域の複数の自治体が協力して行う体制となった。まず、昭和 63 (1988) 年に日光国立公園尾瀬地区保全対策推進協議会(環境庁、群馬県・福島県・新潟県・関係村)が設置され、翌平成元(1989)年から自動センサーによる入山者数調査が開始された。しかし、同(1989)年環境庁が明らかにした、入山者から入園料を徴収し、地区内の排水施設や浄化槽などの整備、管理費に充てる構想に対しては、日本勤労者山岳連盟や関係する自治体などから反対の意見が出され、結局構想は実現されなかった¹⁶⁾。平成 4 (1992) 年には尾瀬沼湖畔の尾瀬沼山荘において、福島・新潟・群馬の 3 県知事による「尾瀬サミット」を開催し、平成 7 (1995) 年には尾瀬保護団が設立されるに至った。

平成 8 (1996) 年には尾瀬の利用者は年間延べ 647,523 人を記録し、過去最高となった。その後、尾瀬保護財団は、平日と休日の宿泊料金の格差や風呂休止日などの山小屋の取り組みと並行して、集中する利用の時間的、空間的分散化を意図した調査研究と管理施策を実施している^{17) 18)}。

以上、尾瀬ヶ原の自然公園史を概観した。その自然保護の取り組みの多くはわが国の自然公園においていち早く導入されたものであり、他の自然公園にとってモデルとなるように環境省(旧環境庁、厚生省)が導入した管理施策も多い。また、尾瀬ヶ原における歴史的な問題として、踏みつけによる植生破壊や廃水処理問題、移入種による生態系の攪乱、過剰利用等が指摘されている¹⁹⁾が、こうしたことが社会問題として注目を浴びるのは、尾瀬ヶ原が国民にとって自然保護活動の象徴的公園であり、公園が持つ資源の価値の高さゆえのものである。さらに、現在の尾瀬ヶ原の利用の特色となっている、二本の木道上を歩き周遊するという利用形態が成立した背景に、当初尾瀬ヶ原の湿性植物の保護のための施設整備があったことが明らかとなった。

表 3-3-1 (1)

表 3-3-1 (2)

表 3-3-1 (3)

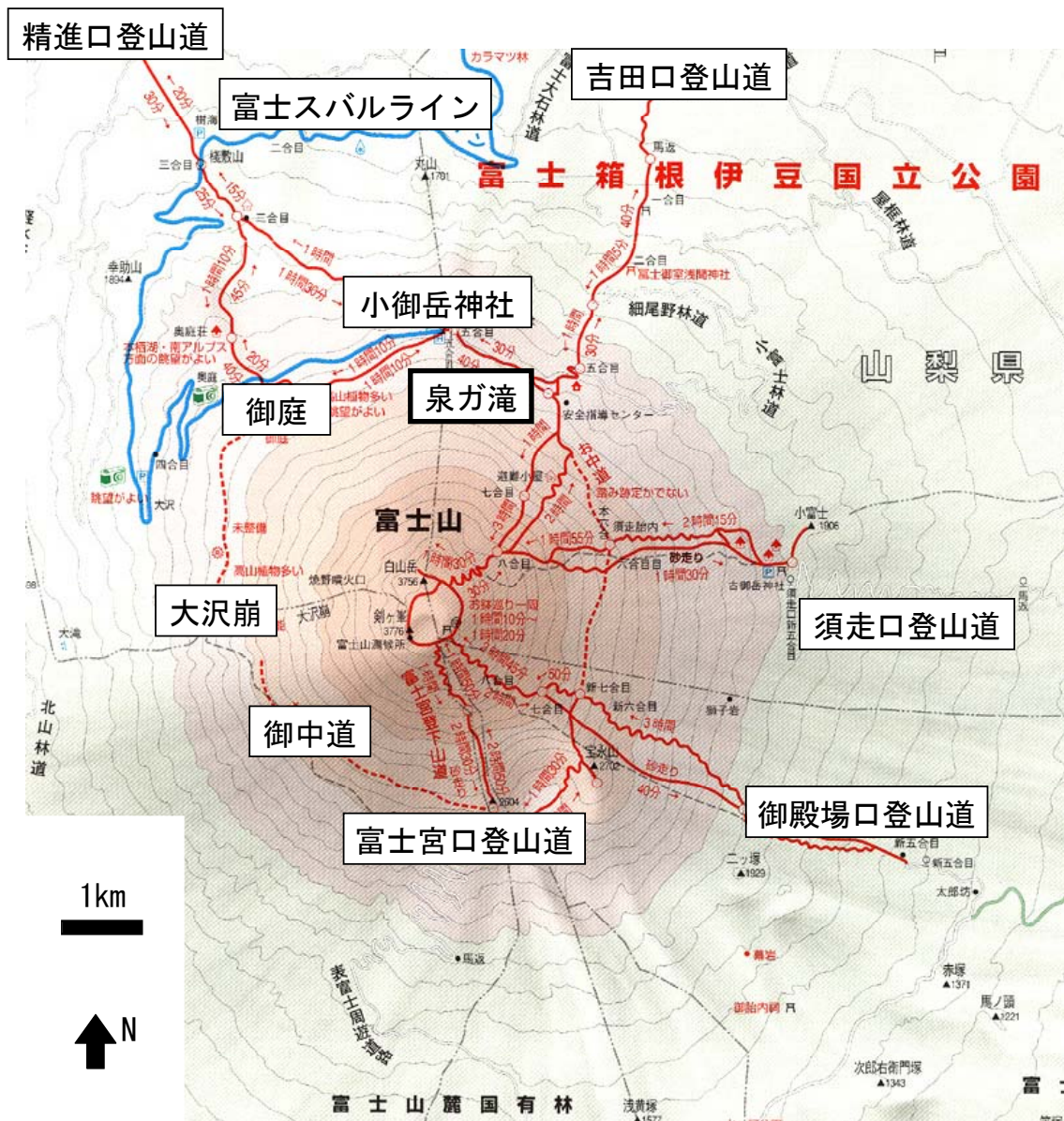
ii) 富士山

富士山（図 3-3-4）は静岡と山梨の両県の境界にそびえる日本一の高山であり、富士火山帯にある典型的な円錐状成層火山の独立峰である。また、その美しさから日本の国土あるいは国体のシンボルとされてきた。登山の対象としての近世以前の歴史が、尾瀬には無いのとは対照的に、富士山は見る対象であり、かつ登る対象でもあり、古くは信仰の対象でもあった。

江戸時代以前から庶民は、先達という半職業的なリーダーに引率されて、富士（富士箱根伊豆国立公園）、立山（中部山岳国立公園）、白山（白山国立公園）、その他各地の秀峰名山に登っていた。富士登拝の講社の類は室町時代以降においてかなりできていたようであるが、戦国時代の永禄年間（1558～1570 年）に富士講の開祖と言われる藤原角行が出てこれを統一した。特に富士講が盛んに富士へ導者（登山者）を送った時代は、おおよそ宝暦（1750 年）頃から明治 33（1900）年頃までとされている^{20) 21)}。現在は富士山と信仰の関わりを見ることは少ないが、昭和 5（1930）年の武田久吉の富士登山の記述²²⁾からは、その当時の深い関わりを把握することができる。武田久吉が歩いたお中道は修行の道であり、富士講信者が聖地奥の院として巡拝した格の高い道であり、富士山信仰では三回以上の登頂経験者のみが通行を許可され、初めての参拝者には閉ざされた道であった。また、小御岳で草鞋（わらじ）を履き替えることが強要され、お中道の途中にある不浄流しの沢ではお祓（はら）いが行われた。さらに、一周を終えて小御岳に戻ってくると大願成就の極印が押され最高の栄誉を与えられるなど、種々の宗教的装置を介して富士山の神格化が図られていた。

さて、尾瀬と同様に、近代以降の富士山について見てみたい（表 3-3-1）。それまで女人禁制が布かれていた富士山において女性の登山が解禁されるのが明治 5（1872）年である。明治初期には外国人やわが国の政府高官あるいは研究者による調査登山などが話題を呼ぶが、信仰登山の対象としての歴史が長いいためか、アルピニズムに代表される近代登山の対象として脚光を浴びることは少なかった²³⁾。

明治 44（1911）年には、山梨県下の御料地全てが下賜され恩賜県有林となり、以後の開発の圧力になからず影響を与えている。また、同じ年、明治 44（1911）年の第二十七回帝国議会に「国設大公園設置ニ関スル建議案」が提出された。これは、富士山を中心として今で言う国立公園を設置しようとするものであり、日本の国立公園の誕生前において富士山が牽引役を果たしたと考えられる。



富士五湖観光連盟（2005）：「富士の国やまなしエリアガイドマップ」に加筆

図 3-3-4 富士山全体図

昭和元（1926）年には、富士山麓電気鉄道株式会社が設立され、富士五湖周辺地域の観光開発において中心的役割を果たすようになるが、実はこの頃はまだ、富士山麓にある富士五湖の知名度ははそれ程でもなく、当時はまだ、富士山および富士山麓は開発の進んだ観光地というイメージもなかったと考えられる。というのも、大正 14（1925）年に読売新聞で行われた避暑地人気投票では、富士五湖は全て等外の結果に終わっているからである。

しかし、昭和 10（1935）年には、富士山頂にケーブルを架設する案が発表されるなど、この頃から戦後にかけて、度々富士山は山頂までの（地下）ケーブル計画に脅かされることとなる。そのような時代背景の中で、日光国立公園などの 8 公園（昭和 9（1934）

年指定)に次いで、昭和 11 (1936) 年に国立公園に指定された。

戦後は、昭和 20 (1945) 年に旧日本軍北富士演習場を米軍が接收し、富士山麓の演習場の問題は幾度となく取り上げられることとなる。昭和 27 (1952) 年には、アメリカ国立公園協会が富士山麓演習地に反対する勧告文を国連事務総長など関係当局へ提出した。また同年、アメリカ・ウィルダネスソサイエティーが同様の趣旨の勧告書を提出した。その一方で、富士山は厚生省が国際観光地として力を入れる自然公園となり²⁴⁾、外貨を獲得しようという観光立国試案が国立公園議員懇話会で審議されるなど²⁵⁾、政府の思惑も絡んで耳目を集める自然公園となっていた。この頃、国内からの来訪者を中心として当時既に毎年 10 万人前後が登山していたと言われる²⁶⁾。

また、富士山の管理の体制が整備され始めるのもこの頃からである。尾瀬と同様に、昭和 28 (1953) 年に、わが国で初めての国立公園管理官 6 名のうち 1 名が河口湖に配属され、昭和 32 (1957) 年には自然公園法が制定された。しかし、昭和 28 (1953) 年から富士山頂の所属問題が起こり、昭和 49 (1974) 年に浅間神社が勝訴するまで争われた²⁷⁾。

昭和 36 (1961) 年には、富士山の利用の形態を決定的に変容させる事業が開始された。それは富士スバルラインの事業であり、昭和 39 (1964) 年の開通以後は、富士登山は五合目を出発点とする形態が主流となった。これを境にして、それまで富士登山が麓から山小屋で二泊する形態から、途中山小屋で一泊あるいは日帰りの登山へと変貌した。

昭和 37 (1962) 年からは、新生活運動協会の「国土を美しくする運動」の展開に合わせて「富士山をきれいにする運動」が始まり、富士山における美化清掃活動が幕を開けるが、ゴミは減るどころか増加傾向を示し、1970 年代に入るとゴミ問題は深刻化した²⁸⁾。また、土産物屋の押し売り同然の態度や山小屋の宿泊の過密が問題とされたのもこの頃である²⁹⁾。

富士山頂の所属問題が決着した昭和 49 (1974) 年には、静岡県自然保護協会が富士山における環境破壊をまとめた、いわゆる「富士山黒書」を作成し世間を驚かせた³⁰⁾。また、同 (1974) 年、富士急行が富士山トンネルケーブル計画を断念し、富士山に対する大規模な開発の圧力は終息した。しかし、山梨県側で登山者数が 20 万人 (昭和 56 年から平成 14 年の間の最高値) を越える昭和 62 (1987) 年頃まで利用者は増大し、ゴミや尿尿の問題だけでなく、富士山麓でのオフロード車の無秩序な走行に対策が講じられるなど、利用者のマナーの問題が浮上した。この間さらに、昭和 56 (1981) 年に砂走り下山道の落石によって 12 人が死亡する事故が発生し、利用の問題の一つとして登山の安全性の確保が検討され、対策が講じられた³¹⁾。

平成に入ると 3 (1991) 年に、富士箱根伊豆国立公園における利用者数が史上最高と

なり、1億1千万人を記録した。平成7（1995）年には、山梨県・静岡県と環境庁の3者で富士山の自然環境の保全と適正利用を協議する「富士箱根伊豆国立公園地域環境保全対策協議会」が発足し、都道府県の枠を越えた広域の連携が始まった。平成9（1997）年に富士山環境保全共同宣言を山梨・静岡両県で行い、翌10（1998）年には富士山を美しい姿のまま引き継ぐことを基本理念とした「富士山憲章」を山梨・静岡両県で制定した。

以上、富士山の自然公園史を概観した。富士山は早くから登山者を受け入れており、戦後間もない頃に既に10万人前後が登山していたことは驚くべきことである。日本最高峰であるがゆえに、尿尿の問題を解決するための排便の持ち帰り運動やトイレの開発など、富士山特有の取り組みを見ることがもできる³²⁾。また、富士山においては登山の安全性が問題とされてきた歴史もある。大半の登山者が五合目を出発地点とし頂上を目指し、現在の富士山の利用形態は、富士スバルラインの開通によって成立した。

2) 研究対象地の利用の概況

利用型（時間消費型、目的達成型）の違う二つの自然公園について、実際の利用の実態を知ることが目的として、利用者数に関わる統計資料を用いて、近年の年間利用者数や空間的な利用の集中、時間的な利用の集中の把握を行った。

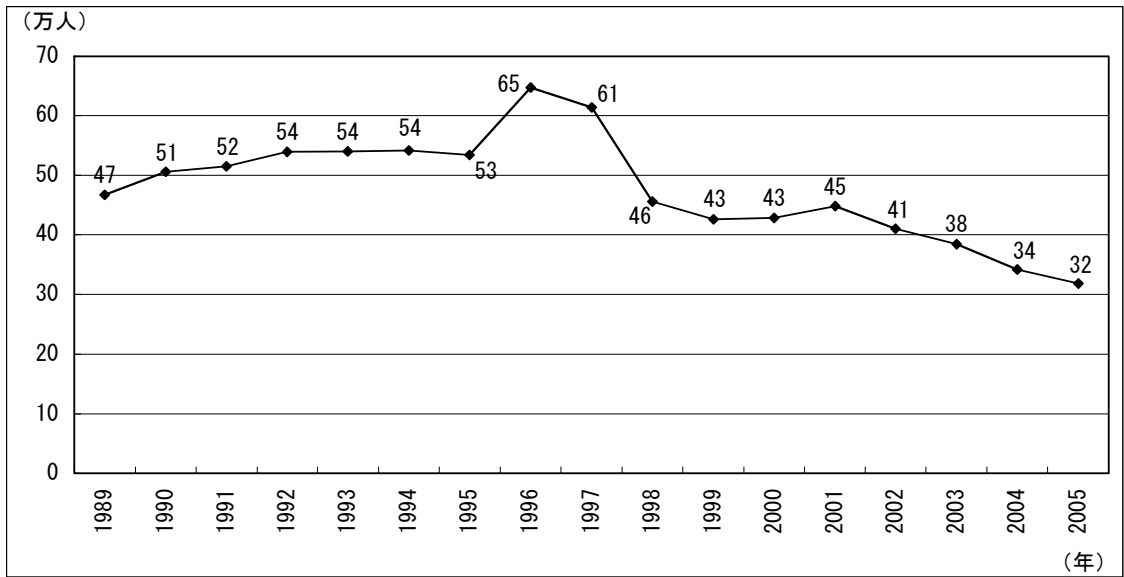
i) 尾瀬ヶ原

ここでは、尾瀬ヶ原だけでなく尾瀬沼も含めた尾瀬全体の利用の動態を、近年の利用者数、空間的な利用の集中、時間的な利用の集中、の3つの観点から見てみたい。なお、以下に示す利用者数は、尾瀬の各入山口に設けられているセンサー式の自動カウンターによって、5月中旬頃から11月初旬にかけて計測されているデータであり、平成元年より公式に発表されているものである³³⁾。センサーによるカウント方法であるため誤差が含まれるが、公表資料のそのままのデータを整理した。

まず、平成元（1989）年から平成15（2003）年までの尾瀬全体の利用者数は図3-3-5の通りである。平成8（1996）年まで増加傾向にあり、特に平成8（1996）年と平成9（1997）年はその前の平成7（1995）年に比べて約10万人増加している。環境省公式発表³⁴⁾によれば、平成8（1996）年は「①ミズバショウ開花期の遅れによる再来訪者の増加、②マスコミ報道による増加」と推測され、平成9（1997）年については「至仏山東面登山道の再開」が主な原因として考えられている。この平成9（1997）年以降は利用者数が減少傾向にある。

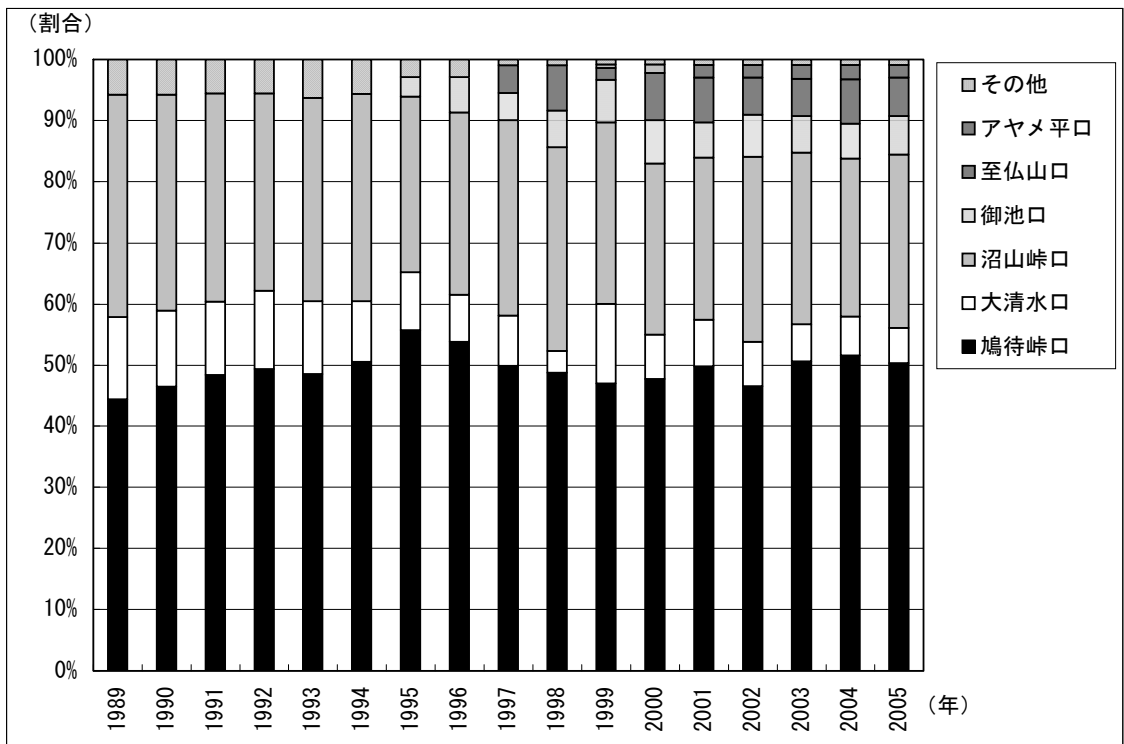
次に、各入山口の利用者数は図3-3-6の通りである。最も利用される入山口は鳩待峠

口であり、尾瀬の利用者の約半数がこの入山口を利用していることが分かる。次いで沼山峠口が多く約3割、大清水口が約1割となっている。また、利用者数が少ないのは御池口、至仏山口、アヤメ平口でそれぞれ数パーセントの利用に留まっている。



注) 環境省関東地方環境事務所日光自然環境事務所：日光国立公園尾瀬地域入山者数調査（平成元年～平成17年）により作成（尾瀬保護財団ホームページ<http://www.oze-fnd.or.jp/>にて公表されており、本表は平成17年12月28日時点の公表資料）

図 3-3-5 年別尾瀬総入山者数



注) 環境省関東地方環境事務所日光自然環境事務所：日光国立公園尾瀬地域入山者数調査（平成元年～平成17年）により作成（尾瀬保護財団ホームページ<http://www.oze-fnd.or.jp/>にて公表されており、本表は平成17年12月28日時点の公表資料）

図 3-3-6 尾瀬における年別の各入山口登山者数割合

さらに、一年間で利用者数が多い上位 10 日を整理したものが表 3-3-2 である³⁵⁾。12 年間の上位 10 日のうち大半が 6 月、7 月、10 月に集中していることや、12 年間の利用者数が多い上位 10 日、120 日のうち約 59% の 71 日が土曜日であることなど、週末にお

表 3-3-2 尾瀬（全体）における利用者が多い上位 10 日

	1994年 平成6年		1995年 平成7年		1996年 平成8年		1997年 平成9年	
	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数
ワースト1	6/11土	22,198	6/10土	22,550	7/20土	19,092	6/14土	20,049
ワースト2	6/ 4土	14,395	6/11日	15,525	6/22土	18,710	7/20日	16,891
ワースト3	6/ 5日	12,552	6/ 3土	14,096	7/27土	13,837	6/ 7土	15,839
ワースト4	10/ 9日	12,183	7/22土	11,675	6/15土	12,762	10/10祝	14,169
ワースト5	6/12日	11,516	7/29土	10,304	6/23日	11,947	6/ 8日	12,753
ワースト6	7/23土	11,236	6/17土	9,898	6/16日	11,776	10/11土	12,331
ワースト7	7/24日	10,897	6/24土	9,748	7/13土	11,400	7/19土	10,671
ワースト8	7/ 9土	9,234	5/27土	9,433	6/ 8土	11,216	6/15日	10,411
ワースト9	7/17日	8,296	7/ 8土	8,938	10/10木	10,855	6/ 1日	10,235
ワースト10	6/18土	7,716	10/10火	8,597	10/12土	10,500	7/21月	9,568
合計	—	120,223	—	120,764	—	132,095	—	132,917
年間利用者数	—	542,058	—	534,196	—	647,523	—	614,317
割合	—	22.18%	—	22.61%	—	20.40%	—	21.64%

	1998年 平成10年		1999年 平成11年		2000年 平成12年		2001年 平成13年	
	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数
ワースト1	7/19日	13,799	6/12土	11,883	6/10土	11,750	6/9土	12,415
ワースト2	10/10土	10,976	6/5土	11,257	10/8日	10,891	7/20金	11,702
ワースト3	6/13土	10,687	10/10日	10,733	7/22土	9,491	7/21土	11,098
ワースト4	7/11土	10,222	5/29土	8,867	7/20木	8,719	10/7日	10,024
ワースト5	6/6土	9,438	6/6日	8,560	10/7土	8,673	7/14土	9,598
ワースト6	7/18土	8,513	10/9土	8,170	6/17土	7,955	10/6土	9,113
ワースト7	6/7日	7,748	7/24土	7,848	6/4日	7,861	6/3日	8,657
ワースト8	10/3土	7,465	6/4金	6,572	7/23日	7,478	6/2土	8,465
ワースト9	5/23土	7,261	5/30日	6,129	7/29土	7,431	6/10日	7,529
ワースト10	5/31日	6,879	7/10土	6,066	6/11日	7,253	7/22日	7,234
合計	—	92,988	—	86,085	—	87,502	—	95,835
年間利用者数	—	455,409	—	425,807	—	428,446	—	448,041
割合	—	20.42%	—	20.22%	—	20.42%	—	21.39%

	2002年 平成14年		2003年 平成15年		2004年 平成16年		2005年 平成17年	
	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数
ワースト1	7/20土	10,607	6/7土	11,833	7/24土	5,511	7/17日	10,432
ワースト2	6/ 8土	10,255	7/20日	10,266	10/2土	4,652	7/23土	7,309
ワースト3	6/ 1土	9,320	6/8日	9,529	7/25日	4,018	10/9日	7,044
ワースト4	7/13土	8,917	6/14土	7,312	9/19日	3,557	7/16土	6,595
ワースト5	6/ 2日	8,687	10/11土	7,053	10/10日	3,119	6/4土	5,809
ワースト6	10/13日	8,535	7/19土	6,468	8/1日	3,109	6/11土	5,796
ワースト7	5/25土	7,914	10/4土	6,032	10/16土	3,075	7/24日	5,771
ワースト8	10/12土	7,859	10/12日	5,823	10/11月	2,988	6/5日	5,658
ワースト9	7/21日	6,915	7/26土	5,545	7/31土	2,906	7/18月	5,063
ワースト10	10/ 5土	6,851	6/21土	5,070	8/7土	2,875	10/8土	5,057
合計	—	85,860	—	74,931	—	35,810	—	64,534
年間利用者数	—	409,942	—	384,251	—	341,558	—	317,847
割合	—	20.94%	—	19.50%	—	10.48%	—	20.30%

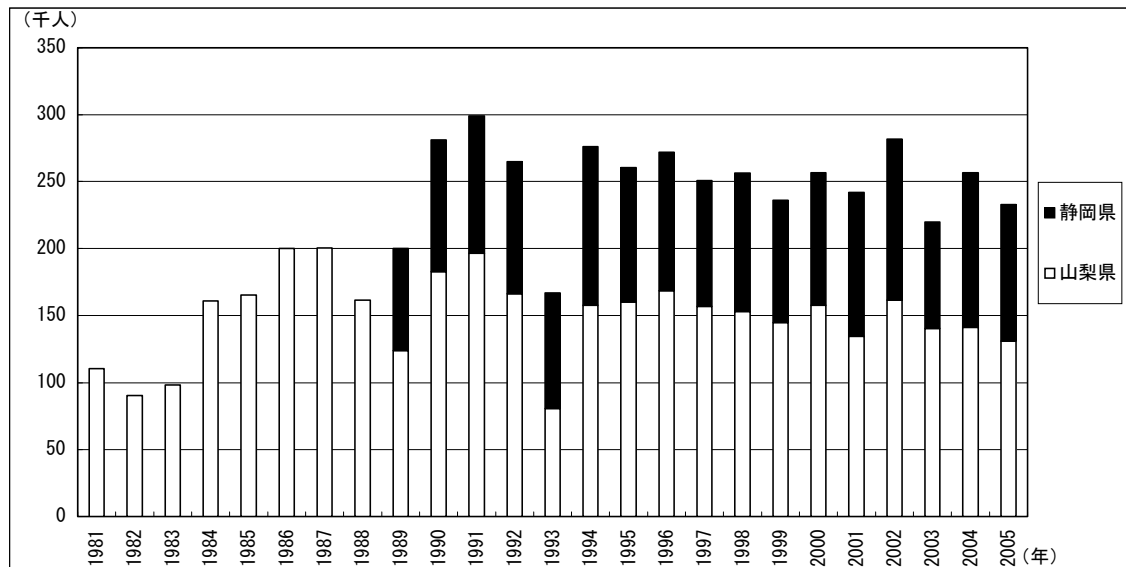
(出典：尾瀬保護財団ホームページ (<http://www.oze-fnd.or.jp/>)：「入山者数の推移－混雑日上位10日」)

表 3-3-3 尾瀬（全体）における利用者集中日（1994～2005年）

	5月	6月	7月	8月	9月	10月
上旬 (1-10日)	0	26	3	2	0	18
中旬 (11-20日)	0	15	18	0	1	8
下旬 (21-31日)	6	4	19	0	0	0

いて利用者が多いことが分かる。月による偏りが見られたことから、より詳細に把握するために月を上旬、中旬、下旬に区分して整理した（表 3-3-3）。その結果、混雑する時期は6月上旬から中旬、7月中旬から下旬、10月上旬、の三期であり、一般的に言われるミズバショウ、ニッコウキスゲ、紅葉の時期に一致する³⁶⁾。従い、尾瀬が混雑する時期は概ね、(1)ミズバショウ期（6月上旬～中旬）、(2)ニッコウキスゲ期（7月中旬～下旬）、(3)紅葉期（10月上旬）と言えよう。

なお、尾瀬における利用者数の変動要因については、既に田村らによって詳細な研究報告³⁷⁾が為されており、平成元（1989）年から平成15（2003）年までの15年間に、尾瀬地区全体の土日利用が他の曜日に分散化されたことや、福島県側で混雑口（沼山峠口）から非混雑口（御池口）への利用分散化が促進され、群馬県側では利用分散化が促



注) 山梨県については富士吉田市富士山課資料(1981-2005)「富士山登山者調べ」(富士山安全指導センター)、静岡県については静岡県生活・文化部観光交流室資料(1989-2005)「富士山への登山者の状況」により作成

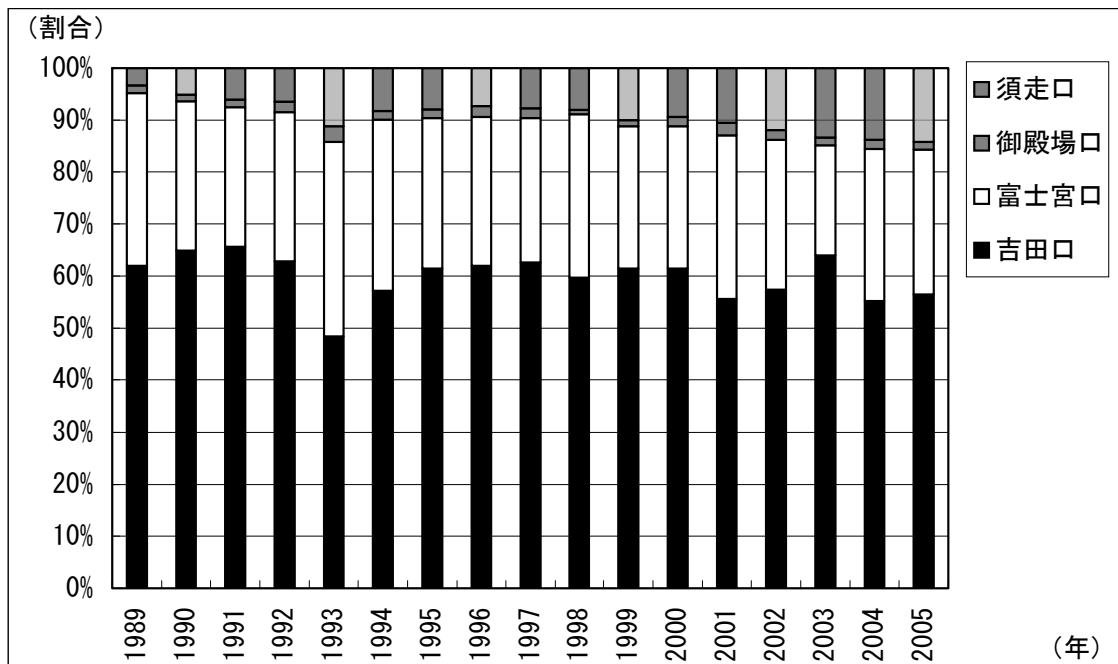
図 3-3-7 富士山登山者数の推移

進されていない現状について指摘されている。

ii) 富士山

昭和 11 (1936) 年に指定された富士箱根伊豆国立公園に所在する富士山は、山開きの 7 月 1 日から山じまいの 8 月 26 日の期間を中心に、毎年多くの登山客と団体登山客を受け入れている。また、それら多くの登山客を受け入れる登山口は五つあり、山梨県側で精進口登山道、吉田口登山道の二つ、静岡県側で富士宮口登山道、御殿場口登山道、須走口登山道の三つがある。そこで、どのような時間と場所において富士山頂までの利用者が多いかを見てみたい。富士山登山者については、環境省が八合目に赤外線カウンターを設置して通過人数を記録しているが、登山者数の推移を把握するにはまだ実績が少ない。従い、山梨県については昭和 56 (1981) 年から平成 17 (2005) 年の富士吉田市富士山課資料「富士山登山者調べ」によって把握し、静岡県については静岡県生活・文化部観光交流室資料「富士山への登山者の状況 (1989-2005)」より把握を行った。なお、前者は六合目に位置する富士山安全指導センターの通過者数であり、一部悪天候や体調不良等で引き返す登山者が含まれるものの、大半が山頂に達すると考えて差し支えない。後者は関係する自治体の資料をもとに推計されたものである (図 3-3-7)。

まず、富士山頂までの利用者の全体数を平成元 (1989) 年以降で見ると、平成 3 (1991) 年に約 30 万人を記録した後は 25 万人前後で推移しており、その平成 3 (1991) 年以降は減少傾向にあることが分かる。特に、利用者の多い山梨県側について詳細に見てみると、昭和 57 (1982) 年から昭和 58 (1983) 年にかけて利用者が少ないが、これは台風、



注) 山梨県については富士吉田市富士山課資料(1981-2005)「富士山登山者調べ」(富士山安全指導センター)、静岡県については静岡県生活・文化部観光交流室資料(1989-2005)「富士山への登山者の状況」により作成
 注) 精進口登山道を利用する登山者は御中道で吉田口登山道で合流するため、「吉田口」登山者数に含まれる

図 3-3-8 富士山登山者の入山口別割合

大雨などの天候不順によるものであり³⁸⁾、翌(1984)年の新聞報道³⁹⁾でも「2年間の不振を返上」した理由として好天に恵まれたことを挙げている。その後、登山者は増加し、昭和61(1986)年には、好天やかいじ国体に合わせた地元市町村の観光客誘致の取り組みが功を奏し⁴⁰⁾、過去25年間で最多の約20万人を記録した。しかし、その後は、記録的残雪の影響⁴¹⁾(1989年)、富士山有料道路の影響、残雪による登山道規制、週末の悪天候(1993年)の影響⁴²⁾により、平成元(1989)年と平成5(1993)年に大幅に登山者が減少した。平成3(1991)年以降、大きくは、山梨県からの登山者は減少傾向にあり、近年は15万人を切るようになってきている。

次に、各入山口別の登山者の割合を見ると(図3-3-8)、吉田口が最も多く約6割を占めている。次いで、富士宮口が約3割、須走口が1割弱、御殿場口が数パーセントとなっている。これにより、富士山登山者は吉田口を主に利用していることが分かる。

表 3-3-4 富士山吉田口登山道における登山者が多い上位 10 日

	1994年 平成6年		1995年 平成7年		1996年 平成8年		1997年 平成9年	
	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数
ワースト1	7/30土	9,425	7/29土	11,454	7/27土	9,635	8/2土	12,456
ワースト2	8/6土	8,793	8/5土	8,118	8/10土	7,929	7/19土	11,300
ワースト3	7/23土	7,604	8/12土	6,593	8/16金	7,061	7/20日祝	9,417
ワースト4	8/13土	5,944	8/13日	6,228	8/17土	6,649	8/23土	8,281
ワースト5	8/5金	5,518	8/4金	6,089	8/24土	6,184	8/1金	6,909
ワースト6	8/14日	4,937	7/28金	5,894	7/26金	6,097	8/9土	6,225
ワースト7	7/31日	4,643	8/19土	5,552	7/20土祝	6,048	8/15金	5,134
ワースト8	8/7日	4,479	7/30日	5,448	8/2金	5,262	8/3日	5,118
ワースト9	8/15月	4,273	7/22土	5,088	8/11日	5,182	8/10日	4,722
ワースト10	7/29金	4,207	8/26土	4,895	8/3土	5,118	8/8金	4,530
合計	—	59,823	—	65,359	—	65,165	—	74,092
7・8月利用者数	—	157,617	—	159,950	—	168,547	—	156,844
割合	—	37.95%	—	40.86%	—	38.66%	—	47.24%

	1998年 平成10年		1999年 平成11年		2000年 平成12年		2001年 平成13年	
	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数
ワースト1	8/1土	9,220	7/31土	9,375	8/5土	11,236	7/20金祝	8,723
ワースト2	7/18土	8,587	7/24土	7,732	7/29土	8,471	8/4土	6,886
ワースト3	8/22土	7,881	8/21土	6,955	7/22土	7,182	7/28土	6,470
ワースト4	8/8土	7,877	8/7土	6,536	8/26土	6,974	8/25土	5,392
ワースト5	7/25土	7,185	7/30金	5,926	8/12土	5,656	7/21土	5,217
ワースト6	7/19日	5,929	8/1日	5,181	8/4金	5,519	7/14土	4,575
ワースト7	7/31金	4,587	7/17土	4,994	8/19土	5,514	8/12日	4,560
ワースト8	8/2日	4,498	8/13金	4,329	8/14月	5,280	8/11土	4,238
ワースト9	8/14金	4,410	8/6金	4,260	8/6日	4,624	8/13月	4,211
ワースト10	8/7金	4,387	7/10土	4,110	7/28金	4,416	8/3金	3,887
合計	—	64,561	—	59,398	—	64,872	—	54,159
7・8月利用者数	—	152,955	—	144,827	—	157,682	—	134,529
割合	—	42.21%	—	41.01%	—	41.14%	—	40.26%

	2002年 平成14年		2003年 平成15年		2004年 平成16年		2005年 平成17年	
	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数	月日・曜日	人数
ワースト1	7/20土祝	9,319	8/2土	9,763	7/17土	7,478	8/6土	7,455
ワースト2	8/3土	8,870	8/23土	9,295	8/21土	7,159	7/30土	7,027
ワースト3	7/27土	8,760	7/19土	6,793	7/24土	6,516	7/16土	6,497
ワースト4	8/10土	8,068	7/26土	6,147	7/31土	6,317	8/20土	6,185
ワースト5	7/26金	6,946	7/25金	5,747	8/7土	6,205	7/22金	5,812
ワースト6	8/24土	5,706	7/20日	5,574	7/18日	5,306	7/23土	5,378
ワースト7	7/13土	5,210	8/3日	5,126	8/14土	4,972	8/13土	4,980
ワースト8	8/2金	4,781	8/10日	5,081	8/6金	4,597	7/17日	3,992
ワースト9	8/11日	4,485	8/1金	4,420	8/13金	4,207	8/14日	3,801
ワースト10	8/9金	4,362	8/11月	3,573	8/12木	4,019	8/7日	3,486
合計	—	66,507	—	61,519	—	56,776	—	54,613
7・8月利用者数	—	161,493	—	140,552	—	141,509	—	131,200
割合	—	41.18%	—	43.77%	—	40.12%	—	41.63%

注) 富士吉田市富士山課資料(1981-2005)「富士山登山者調べ」(富士山安全指導センター)により作成
 注) 人数は富士山安全指導センターの通過者数

表 3-3-5 富士山における登山者集中日(1994~2005年)

	7月	8月
上旬(1-10日)	1	38
中旬(11-20日)	16	26
下旬(21-31日)	29	10

注) 富士吉田市富士山課資料(1981-2005)「富士山登山者調べ」(富士山安全指導センター)により作成
 注) 富士山吉田口登山道における登山者が多い上位10日を、各時期に区分して整理したもの

さらに、どの時期に富士山頂までの利用者が集中するかを知るために、尾瀬と同様、過去12年間の7月1日から8月26日までの富士登山者の多い上位10日を整理したものが表3-3-4である。富士山の場合は尾瀬とは違い、登山期間が約2ヶ月間に限定されていることから、季節特有に見られる花や自然現象との関連を見出せない。しかし、尾瀬と同様に週末の利用が多く、特に土曜日の登山者数が12年間の上位10日、120日のうち64日(53%)を占めている。これら利用者が集中する日を上旬、中旬、下旬に区分すると(表3-3-5)、8月上旬が最も多いことが分かる。

(3) 調査方法およびアンケート調査票の構成

公園利用者の心理を把握する手法としては、行動の質やパターンの解析のようにできるだけ客観的なアプローチを目指す方法、アンケートやヒアリング等によって直接利用者の心理を聞き出す方法、描画や心理テストによってより深層にある心理の把握を行っていかうとする方法、などがあると考えられる。本稿で主題とする混雑および満足に関わる利用者心理の把握には、計量的な測定が可能であり、利用者心理に直接的に働きかけた上で回答を導き出すアンケート調査が最適であると判断し採用した。

また、本研究の目的である、①混雑および満足に関わる利用者心理の概念整理、②利用者数の多寡が「自然公園利用者の期待」に及ぼすマイナスの影響の解析、を企図し二つの調査を行った。一つは、二つの研究対象地における利用者の期待が何によって構成され、体験的な利用によってどのような期待が充足されたのか、あるいはどのような期待が充足されずに不満とされたのか、を明らかにすることであり、これを利用者が持つ期待の分類とその構成要素の抽出に主眼を置く予備調査として位置づけた。二つ目は、利用者の期待がどのように充足され、満足や混雑意識にどのように結びついたかを明らかにすることであり、これを自然公園利用者の意識構造の解明に主眼を置く本調査として位置づけた。

既に研究対象地は、利用類型区分に応じて、①および③の要件である「時間消費型」の利用の典型事例として尾瀬ヶ原を、②および④の要件である「目的達成型」の利用の典型事例として富士山を選出したが、①および②の要件である「利用者数の多い」自然公園利用と、③および④の要件である「利用者数の少ない」自然公園利用についても検討する必要がある。そこで、本研究が着目する「利用者数の多寡」の影響を捉えるために、二つの自然公園において、利用者が多いと予想される日と少ない日の両方において調査することを計画した。

1) 調査日および調査地点

i) 尾瀬ヶ原



尾瀬の利用の概況でみたとおり、尾瀬の利用者が集中する時期は、(1)ミズバショウ



期 (6月上旬～中旬)、(2)ニッコウキスゲ期 (7月中旬～下旬)、(3)紅葉期 (10月上旬) である。また、特に利用者が集中するのは土曜日あるいは連休の初日と中日であり、週末、連休ともに最終日はそれほど混雑しないという特性がある。つまり、前後が祝日でない週末であれば、土曜日は混雑が予想でき、日曜日は混雑していないことが予想される。これらの情報と、尾瀬保護財団から得た開花予想などの現地情報を考慮して、(1)ミズバショウ期の平成13(2001)年6月9日(土)・10日(日)に第1回予備調査を、(2)ニッコウキスゲ期の同年7月21日(土)・22日(日)に第2回予備調査を、(3)紅葉期の同年10月7日(日)・8日(月祝)に本調査を行った。従い、予備調査と本調査ともに調査初日は混雑日、2日目は閑散日となることが予想された。

一方、対象地の一つとした尾瀬ヶ原には、点在する池塘や湿原、只見川源流部などがあり、美しい自然景観を呈し見どころとなる場所は季節により異なるとも考えられる。また、山の鼻や見晴にはビジターセンターや山小屋が集積し、利用施設の存在そのものが利用者を集めており、さらには、木道の途中に設置された観察あるいは休憩のテラスが利用者を滞留させている。これまで微地形や木道の区間ごとの利用者数について把握されたことはない⁴³⁾ことから、実際の現地の様子から、尾瀬ヶ原の代表的景観である湿原に囲まれた立地にあり利用者が集中していた牛首分岐と竜宮十字路の二地点を最適であると判断し、両地点に設けられている休憩テラスにおいて調査を実施した（図3-3-9 および図3-3-10）。

図3-3-9 牛首分岐地点の混雑の様子（平成14年6月8日、筆者撮影）

図3-3-10 ミズバシヨウの観賞のため混雑する様子
（平成14年6月9日、筆者撮影）



図 3-3-11 富士山泉ガ滝付近登山道分岐地点（平成 15 年 8 月 3 日、筆者撮影）



図 3-3-12 富士山吉田口登山道の混雑（平成 15 年 8 月 23 日、筆者撮影）

ii) 富士山

富士山の利用の概況でみたとおり、利用者が集中する時期は山開きの 7 月 1 日から山じまいの 8 月 26 日までの週末土曜日であり、特に 8 月上旬の週末土曜日の混雑が予想された。また、富士山の場合は利用者の多くが前日に登山し翌日に下山する行程をとると思われることから、富士山の利用者の体験を利用者数と関連づけて捉えるためには、前日の登山者数と翌日の被験者の回答を対応させて検討する必要がある。そこで、まず、平成 15 (2003) 年 7 月 12 日 (土) に予備調査を行い、富士山利用者の満足要素と不満要素の抽出を行った。その上で、同年 7 月 21 日 (月曜日・祝日) から 8 月 28 日 (木曜日) の期間に、利用の集中を予想した週末の日曜日 4 日間、利用者が集中しないと予想した平日 4 日間、計 8 日間アンケート調査を行った⁴⁴⁾。

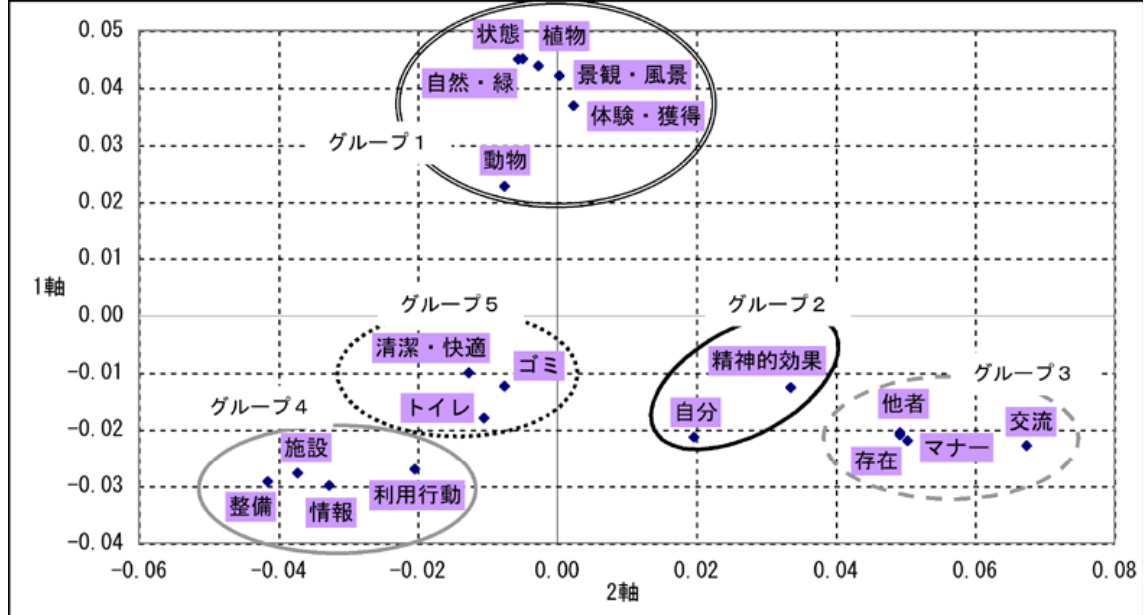
調査地点については、過去 17 年間の利用動態において空間的な利用の集中が見られる吉田口登山道において行うこととした。また、利用者の登山は頂上に到達した後に 5 合目まで下りると、自家用車あるいはシャトルバスによって富士山を下山する行程が一般的であることから、現地における詳細な検討を経て、富士山登頂者へのアンケート調査を実施する地点として、富士山五合目泉ガ滝付近の登山道分岐地点を選定した（図 3-3-11 および図 3-3-12）。

2) アンケート調査票の構成

i) 尾瀬ヶ原

尾瀬ヶ原における利用者の心理のうち、体験的な利用によって期待が充足され満足として顕在化する意識は何か、期待が充足されず不満として顕在化する意識は何か、を把握するため、ミズバショウ期の平成 13 (2001) 年 6 月 9 日 (土)・10 日 (日) に第 1 回予備調査を、ニッコウキスゲ期の 7 月 21 日 (土)・22 日 (日) に第 2 回予備調査を行った。特に予備調査が、利用者が持つ期待の分類とその構成要素の抽出に主眼を置くということは即ち、利用者の期待を意味する具体的で現実的な言葉を收拾し精選することが調査の目的となる。従い、第 1 回の予備調査では原則として回答欄を自由に記述できるものとし、「尾瀬に対する印象」(自由回答) や「尾瀬で満足したこと」(自由回答)、「尾瀬で不満だったこと」(自由回答) の質問項目を設け、尾瀬ヶ原の利用者に回答を求めた。

以上の方法によって 134 人から得られた自由回答の記述内容について、まず理解しにくい記述や曖昧で抽象的な記述を排除した上で、二つ以上の意味を含む多義的な記述を分割しそれぞれ独立した記述として扱った。以上の手順を経て得られる 497 の満足と不満を名詞と形容詞、動詞に区別して把握し、数量化Ⅲ類分析によって 5 つのグループを得た（図 3-3-13）。1 軸は「自然性」(寄与率：11.5%)、2 軸は「対人関係性」(寄与率：10.4%) を表すものと考えられる。グループ 1 は動植物を含めた自然が良い状態にあること、その状態を体験するという期待であり、①「公園資源の享受」に対する期待と考えられた。グループ 2 は自分への精神的効果について述べるものであり、その具体的な記述内容を考え合わせて②「野趣性・独居性の保持」に対する期待と解釈された。グループ 3 は他者のマナーや存在、交流について記述するものであり③「適切な対人関係の構築」に対する期待と考えられた。グループ 4 は情報や施設の整備について述べるものであると同時に、そうした情報や施設を利用したいという期待が含まれることから④「情報や施設の円滑な利用」に対する期待と解釈された。グループ 5 はゴミが無く、トイレが清潔であってほしいというものであり、施設だけでなく公園の野外の空間に対しても持たれている期待であることから⑤「清潔・快適な空間の利用」に対する期待と



考えられた。

以上のようにして把握された尾瀬ヶ原利用者の期待の5つのグループをもとにして、ミズバショウ期の尾瀬ヶ原利用者 134 人の満足度を5つの期待に関連する要素として整

図 3-3-13 尾瀬ヶ原における利用者の期待

理すると表 3-3-6 のようになり 15 の要素を抽出した。これを見ると、①「公園資源の享受」に関わる満足要素が大半を占めており、特に、利用者が美しい風景を見たいという期待が充足された（50 件）ことや、見たいと思っていた植物を見ることができたこと（50 件）に満足していることが分かる。その他、自然がよく守られていた（17 件）ことが満足として挙げられるなど、自然資源の保全の取り組みそのものについても満足の構成要素となっていることが分かる。また、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、人の少なさに関わる満足要素や、やすらぎが得られたことに対する満足要素、よい休息ができたことに対する満足要素が把握された。さらに、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では、利用者マナーの満足要素やすれ違いの挨拶が満足要素として抽出された。④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では、木道や施設の整備状況を満足の要素として把握した。最後に、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、尾瀬ヶ原におけるゴミの少なさや、きれいなトイレが利用できたことが要素となっていた。

表 3-3-6 尾瀬ヶ原利用者に対する第 1 回予備調査の自由回答に見られる満足要素

内容	尾瀬に対する印象	満足したこと	計
①「公園資源の享受」に対する満足要素			
美しい風景に満足した	13	37	50
見たいと思っていた植物が見られた	9	41	50
自然や緑が多かった	14	5	19
自然がよく守られていた	13	4	17
見たいと思っていた動物が見られた	0	5	5
山歩きを楽しめた	3	0	3
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素			
人が少なくて、よかった	4	3	7
やすらぐことができた	3	0	3
よい休息ができた	0	2	2
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素			
利用者のマナーが良くて、気持ちよかった	0	4	4
すれ違いの挨拶で、気持ちよかった	0	1	1
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素			
木道がよくできていた	3	3	6
施設がよく整備されていた	1	3	4
⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素			
ゴミが少なかったのは、よかった	7	6	13
トイレがきれいだった	2	4	6

注) 複数回答可、有効回答数=134

表 3-3-7 尾瀬ヶ原利用者に対する第 1 回予備調査の自由回答に見られる不満要素

内容	尾瀬に対する印象	満足したこと	計
①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素			
目当てにしていた植物が少なかった	9	1	10
植生が変化し、植物の減少が見られた	1	2	3
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素			
人が多すぎた	11	33	44
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素			
利用者のマナーが悪かった	0	9	9
ツアー団体の数が多すぎた	0	3	3
挨拶を返してくれない人がいた	1	1	2
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素			
木道が歩きにくかった	0	10	10
登山道が歩きにくかった	0	6	6
トイレが少なかった	0	3	3
橋が狭くて危険だった	0	2	2
観察テラスが少なかった	0	2	2
トイレの待ち時間が長かった	0	2	2
木道沿いの休憩所や待避所が少なかった	0	1	1
説明板や標識の数が少なかった	0	1	1
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素			
ゴミが落ちていた	0	8	8
施設が整備されすぎていた	1	3	4
嫌な虫がいた	0	1	1
トイレが汚れていた	0	1	1

注) 複数回答可、有効回答数=134

一方、不満要素については表 3-3-7 のようになった。②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素が多く、人が多すぎたこと（44 件）は全ての不満要素の中で最も多く挙げられた。次いで、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素が多く、木道や登山道の歩きにくさ（10, 6 件）が回答された。その他、①「公園資源の享

受」に対する不満要素として、期待していた植物があまり見られなかったこと（10件）が多く挙げられ、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、利用者マナーに対する不満が要素となっていた。その一方で、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素として、「施設が整備されすぎていた」（4件）が回答され、施設の過剰整備が不満の構成要素となっていることが明らかとなった。

第2回予備調査の結果については、第1回予備調査で得られた満足の構成要素が妥当であるかの確認と、本調査に必要な要素の把握を意図して検討を行った。この調査では、第1回予備調査で用いた質問方法を変更し⁴⁵⁾、「良かったこと」および「嫌だったこと」を挙げてもらうこととし、この記述内容から、利用者の「満足」に関わる要素と「不満」に関わる要素を抽出した（表3-3-8、表3-3-9）。その結果、ニッコウキスゲ期の尾瀬ヶ原利用者84人の「満足」から、紅葉期の本調査の実施に際し必要な「満足」要素として新たに6要素を抽出した。まず、①「公園資源の享受」に対する満足要素として「よい写真を撮ることができた」が把握された。また、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素として、「一緒に来た友と語らうことができた」や「出会った人の親切な対応に接することができた」が抽出された。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素として、「説明板や標識がよくできていた」や「登山道がよくできていた」、「説明板や標識の数が十分だった」が把握され、計6つの要素を追加した。

一方、「不満」の要素では、季節性を考慮し、①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素として新たに「思ったほど紅葉がきれいでなかった」を追加した。また、②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素として、「騒々しく感じた」と「落ち着かなかった」の2つの要素を新たに追加した。さらに、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素として、「ゆっくり歩くことができなかった」や「長い人の列が出来て追い越しができなかった」、「ツアー団体のマナーが悪かった」の要素を見出した。その他、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素として、「撮影場所が少なかった」や「植物の名前が分からなかった」、「ガイドマップや季節の花のガイドがなかった」、「テントを張れる場所が少なかった」、「説明版や標識の内容が分かりにくかった」を、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素として「嫌な臭いがした」を見出し、合わせて12項目を追加した。

以上の2回の予備調査の結果を踏まえて、本調査の質問項目を、①利用者属性、②満足要素、③不満要素、④満足（評価点）、⑤混雑意識（評価点）の大きく5つによって構成した。特に、満足要素と不満要素については、本調査では、期待の大きさや満足（評価点）との関連性をより詳細に把握することを意図した。

① 利用者属性

- ・ 「年齢」（実年齢）

表 3-3-8 本調査において質問項目とした「満足」要素

満足要素	第1回予備調査の結果から項目化したもの	第2回予備調査の結果から項目化したもの	季節性を考慮し項目化したもの
①「公園資源の享受」に対する満足要素			
A 1 自然や緑が多かった	○		
A 2 見たいと思っていた動物が見られた	○		
A 7 見たいと思っていた植物が見られた	○		
A10 美しい風景に満足した	○		
A12 自然がよく守られていた	○		
A16 山歩きを楽しめた	○		
A19 よい写真を撮ることができた		○	
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素			
A 5 人が少なく、よかった	○		
A13 やすらぐことができた	○		
A21 よい休息ができた	○		
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素			
A 6 利用者のマナーが良くて、気持ちがよかった	○		
A 8 一緒に来た友と語らうことができた		○	
A 9 すれ違いの挨拶で、気持ちがよかった	○		
A11 出会った人の親切な対応に接することができた		○	
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素			
A 4 説明板や標識がよくできていた		○	
A14 登山道がよくできていた		○	
A15 説明板や標識の数が十分だった		○	
A18 木道がよくできていた	○		
A20 施設がよく整備されていた	○		
⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素			
A 3 トイレがきれいだった	○		
A17 ゴミが少なかったのは、よかった	○		
項目数の合計	15	6	0

注) 要素に付した番号は本調査のアンケート調査票において実際に使用した順番である

表 3-3-9 本調査において質問項目とした「不満」要素

不満要素	第1回予備調査の結果から項目化したもの	第2回予備調査の結果から項目化したもの	季節性を考慮し項目化したもの
①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素			
B 2 植生が変化し、植物の減少が見られた	○		
B17 目当てにしていた植物が少なかった	○		
B20 思ったほど紅葉がきれいではなかった			○
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素			
B 8 騒々しく感じた		○	
B16 人が多すぎた	○		
B30 落ち着かなかった		○	
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素			
B 6 ゆっくり歩けなかった		○	
B 9 ツアー団体の数が多すぎた	○		
B11 利用者のマナーが悪かった	○		
B23 挨拶を返してくれない人がいた	○		
B24 長い人の列が出来て追い越しができなかった		○	
B26 ツアー団体のマナーが悪かった		○	
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素			
B 1 木道が歩きにくかった	○		
B 3 トイレが少なかった	○		
B 4 木道沿いの休憩所や待避所が少なかった	○		
B 5 橋が狭くて危険だった	○		
B10 観察テラスが少なかった	○		
B13 トイレの待ち時間が長かった	○		
B14 説明板や標識の数が少なかった	○		
B15 登山道が歩きにくかった	○		
B19 撮影場所が少なかった		○	
B22 植物の名前が分からなかった		○	
B25 ガイドマップや季節の花のガイドがなかった		○	
B27 テントを張れる場所が少なかった		○	
B29 説明板や標識の内容が分かりにくかった		○	
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素			
B 7 施設が整備されすぎていた	○		
B12 ゴミが落ちていた	○		
B18 嫌な臭いがした		○	
B21 嫌な虫がいた	○		
B28 トイレが汚れていた	○		
項目数の合計	18	11	1

注) 要素に付した番号は本調査のアンケート調査票において実際に使用した順番である

・ 「性」(男-女)

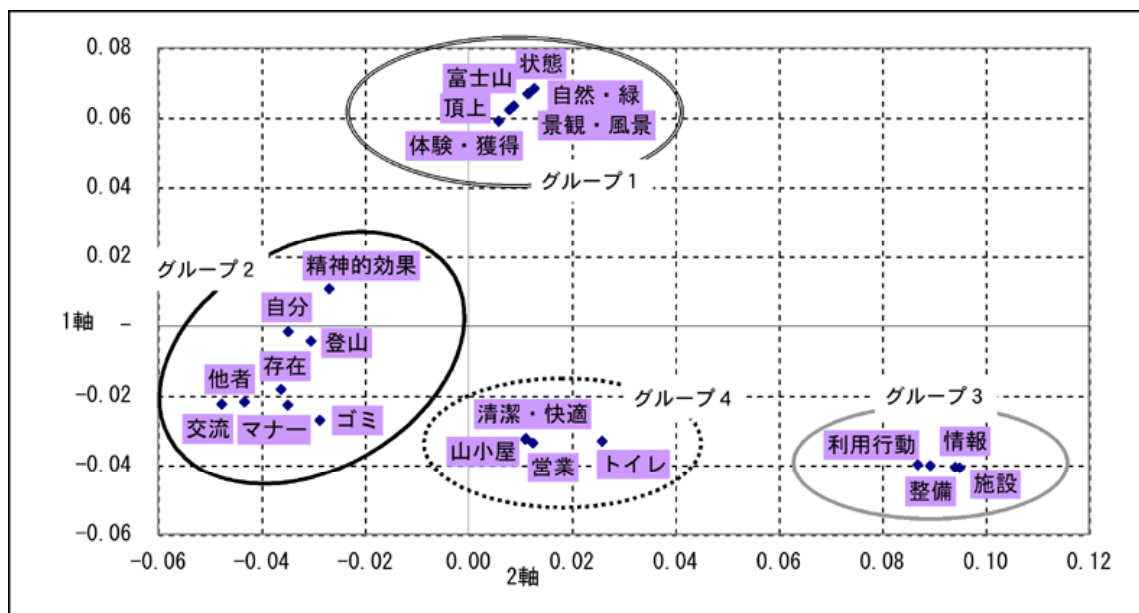
- ・ 「住所」(都道府県, 市町村)
 - ・ 「利用回数」(初めて, 2-3 回目, 4-9 回目, 10-19 回目, 20 回以上)
 - ・ 「グループ人数」(1 人, 2 人, 3 人以上)
 - ・ 「交通手段」(マイカー, 公共交通, ツアーバス, その他)
 - ・ 「利用日数」(日帰り, 1 泊, 2 泊以上)
- ② 満足要素(利用者が満足したこと) 21 項目(2 段階尺度; 満足した-満足しなかった)
- ③ 不満要素(利用者が不満に思ったこと) 30 項目(2 段階尺度; 不満に思った-不満に思わなかった)
- ④ 満足(評価点)(11 段階尺度; 10 点-0 点)
- ⑤ 混雑意識(評価点)(11 段階尺度; 10 点-0 点)

ii) 富士山

利用者が持つ期待の分類とその構成要素の抽出に主眼を置いて、平成 15 (2003) 年 7 月 12 日(土)に予備調査を行った。尾瀬ヶ原において行った予備調査と同様に、予備調査のアンケート調査票の質問項目は自由に記述できるものとし、「富士山で満足したこと」(自由回答)および「富士山で不満だったこと」(自由回答)を富士山の登頂者に回答を求めた。

以上の方法によって 90 人から得られた自由回答の記述内容について、まず理解しにくい記述や曖昧で抽象的な記述を排除した上で、二つ以上の意味を含む多義的な記述を分割しそれぞれ独立した記述として扱った。以上の手順を経て得られる 294 の満足と不満を名詞と形容詞、動詞に区別して把握し、数量化Ⅲ類分析によって 4 つのグループを得た(図 3-3-14)。尾瀬ヶ原と同様、1 軸は「自然性」(寄与率: 9.7%)、2 軸は「対人関係性」(寄与率: 9.4%)を表すものと考えられる。グループについて見てみると、グループ 1 は富士山の頂上における体験の獲得だけでなく、自然や景観、風景の状態に対する期待も含まれ、①「公園資源の享受」に対する期待と解釈された。また、グループ 2 は自分への精神的効果だけでなく他者の存在やマナー、他者との交流も含まれることから、②「他者と自分との適切な関係の構築」に対する期待と考えられた。グループ 3 は情報や施設の整備だけでなく、利用できることが期待に含まれており、④「情報や施設の円滑な利用」に対する期待と解釈された。グループ 4 は山小屋やトイレが清潔、快適であることであり、⑤「清潔・快適な空間の利用」に対する期待と考えられる。

尾瀬ヶ原の利用者の期待の分類結果と比較すると、①「公園資源の享受」に対する期待、④「情報や施設の円滑な利用」に対する期待、⑤「清潔・快適な空間の利用」に対する期待、の 3 つの期待ではグループに含まれる名詞、形容詞、動詞もほぼ同一であ



り、概ね同じ意味内容が含まれる期待と考えることができる。一方、富士山では②'「他

図 3-3-14 富士山における利用者の期待

者と自分との適切な関係の構築」に対する期待というように1つに括られた期待であるが、尾瀬ヶ原では②「野趣性・独居性の保持」、③「適切な対人関係の構築」に対する期待と2つに区分されており、尾瀬ヶ原に比べて富士山ではこの②と③が意識的に区別されない可能性が考えられた。ここでは、富士山の②'の期待を2つに分割することで尾瀬ヶ原の期待の分類と同一になること、分割したそれぞれの期待が単独で意味を成し期待の全体像として整合性が崩れないこと、比較分析していく上で有効との判断から、より分類が細分化される尾瀬ヶ原の結果を採用し、富士山でも5つの期待に分類した。

表 3-3-10 および表 3-3-11 は予備調査によって得られた満足要素と不満要素を5つの期待別に整理したものである。①「公園資源の享受」に対する満足要素では、「日本一高い山を征服した」や「登山途中の風景を楽しむことができた」など12の要素を抽出した。また、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、予備調査によって把握されたものはわずか一つであり、「人が少なくてよかった」のみである。③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では、「気持ちのよい挨拶を交わすことができた」や「ゴミの持ち帰りが守られていた」など8つの要素を把握した。④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では、「登山道が整備されていた」など5つの要素を項目とした。⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、「トイレがきれいだった」と「ゴミが少なかった」の2つの要素となった。

表 3-3-10 富士山利用者に対する予備調査の自由回答に見られる満足要素

満足要素	人
①「公園資源の享受」に対する満足要素	
日本一高い山を征服した	35
登山途中の風景を楽しむことが出来た	14
富士山の自然に触れることができた	6
空気がきれいだった	5
富士山頂上からの風景を楽しむことが出来た	5
御来光を仰ぐことが出来た	2
登りごたえがあった	2
富士山の雄大さを実感することができた	2
足腰がきたえられた	1
長年の夢がかなった	1
自然がよく守られていた	1
ガイドの案内により富士山を楽しめた	1
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素	
人が少なくよかった	1
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素	
気持ちの良い挨拶を交わすことができた	39
ゴミの持ち帰りが守られていた	11
登山者のまわりの人への気づかいがあった	7
トイレチップがきちんと支払われていた	3
同行した家族や友人と語らうことができた	2
喫煙マナーがよかった	1
山小屋の対応が親切だった	1
登山道のすれ違いのマナーが守られていた	1
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素	
登山道がよく整備されていた	7
トイレがよく整備されていた	1
施設がよく整備されていた	1
説明板や標識の内容がよくできていた	1
説明板や標識の数が十分だった	1
⑤「清潔・快適な空間の利用」に対する満足要素	
トイレがきれいだった	7
ゴミが少なかった	2

(有効回答数=90)

また、不満要素については、①「公園資源の享受」に対する不満要素として、「ガイドの解説がよくなかった」を、②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素として「人が多すぎた」および「騒々しく感じた」の2つの要素を抽出した。③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、「挨拶を返してくれない人がいた」や「登山に対する準備が不足している人がいた」など14の要素が把握された。④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素では、「休憩場所が少なかった」や「説明板や標識の内容が分かりにくかった」などの7つの要素を項目とした。⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素では、「ゴミが捨てられていた」など6つの要素となった。

以上、予備調査の結果から、①「公園資源の享受」の期待に関わる要素として12の満足要素と1つの不満要素、②「野趣性・独居性」の期待に関わる要素として1つの満足要素と2つの不満要素、③「適切な対人関係」の期待に関わる要素として8つの満足要素と14の不満要素、④「円滑に利用できる情報・施設」の期待に関わる要素として5つの満足要素と7つの不満要素、⑤「清潔・快適な空間」の期待に関わる要素として2つの満足要素と6つの不満要素を、それぞれ本調査で用いる質問項目とした。

表 3-3-11 富士山利用者に対する予備調査の自由回答に見られる不満要素

満足要素	人
①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素	8
ガイドの解説がよくなかった	1
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素	3
人が多すぎた	3
騒々しく感じた	2
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素	8
挨拶を返してくれない人がいた	8
登山に対する準備が不足している人がいた	3
登山道のすれ違いのマナーが守られていなかった	3
登山道をふさいでいる団体利用者がいた	2
休憩場所を占拠する団体利用者がいた	1
長い人の列が出来て追い越しができなかった	1
喫煙マナーの悪い人がいた	1
ゴミを持ち帰らない人がいた	1
団体利用者のおしゃべりがうるさかった	1
登山道からはずれる人がいた	1
歩行ペースを弱い人に合わせない人がいた	1
団体利用者のリーダーが団体を管理できないでいた	1
団体利用者の団体規模が大きすぎた	1
トイレチップを払わない人がいた	1
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素	9
休憩場所が少なかった	9
説明板や標識の内容が分かりにくかった	7
登山道が整備されていなかった	6
説明板や標識の数が少なかった	4
トイレチップの使いみちが示されていなかった	4
トイレが少なかった	2
トイレの待ち時間が長かった	1
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素	27
ゴミが捨てられていた	27
トイレが汚かった	3
トイレが臭かった	2
山小屋の営業看板があった	3
施設が整備されすぎていた	1
山小屋が多すぎた	1

(有効回答数=90)

一方、本調査の目的は利用者の混雑や満足に関わる心理を量的に把握し、その意識の構造を解明することである。そこで、上述の予備調査の結果を踏まえて、本調査のアンケート調査票の構成は以下の通りとした。なお、本調査は尾瀬ヶ原における利用者意識との比較検討が目的の一つに含まれることから、その内容は原則的に尾瀬と同様である。

① 利用者属性

- ・ 「年齢」(実年齢)
- ・ 「性」(男-女)
- ・ 「住所」(都道府県, 市町村)
- ・ 「利用回数」(初めて, 2-3回目, 4-9回目, 10-19回目, 20回以上)
- ・ 「グループ人数」(1人, 2人, 3人以上)
- ・ 「交通手段」(マイカー, 公共交通, ツアーバス, その他)
- ・ 「利用日数」(日帰り, 1泊, 2泊以上)

② 満足要素(利用者が満足したこと) 28項目(2段階尺度; 満足した-満足しなかつ

た)

- ③ 不満要素（利用者が不満に思ったこと）30 項目（2 段階尺度；不満に思った-不満に思わなかった）
- ④ 満足（評価点）（11 段階尺度；10 点-0 点）
- ⑤ 混雑意識（評価点）（11 段階尺度；10 点-0 点）

第4節 本章のまとめ

本章では、まず、調査指標の設計のための概念整理を行い、利用者が満足するか否かは期待の高さに対する利用体験の質の高さの相対的な位置関係によって決まることや、実際の自然公園利用では利用者が現実水準によって満足と不満を判断していることなど、期待、満足、不満に対する本研究の考え方を示した。また、利用者の期待の分類の方向性についても検討を加えた。

次に、研究対象地の選定と調査設計を行った。その結果、第2章で四つに類型区分された自然公園の利用のうち、「時間消費型」の利用が見られる自然公園の典型事例として尾瀬ヶ原（日光国立公園）を、「目的達成型」の利用が見られる自然公園の典型事例として富士山（富士箱根伊豆国立公園）を選定し、研究対象地とした。

さらに、自然公園としての研究対象地の歴史を概観し、現在の利用の成立背景を把握した。また、尾瀬の利用の概況から、時間的な利用の集中が、(1)ミズバショウ期（6月上旬～中旬）、(2)ニッコウキスゲ期（7月中旬～下旬）、(3)紅葉期（10月上旬）の特に、土曜日あるいは連休の初日と中日において生じていることや、鳩待峠口からの利用者の入山が多く空間的な利用の集中が生じていることを把握した。一方、富士山の利用概況から、時間的な利用の集中が、山開きの7月1日から山じまいの8月26日の期間の週末、特に土曜日に生じていること、空間的には吉田口において利用の集中が見られることを把握した。

以上のような利用の状況を踏まえた上で、四つの類型区分のうち「利用者数の多いタイプ」と「利用者数の少ないタイプ」の自然公園利用の検討を意図して、調査日（混雑日、閑散日）と調査地点を決定した。また、予備調査によって得られた結果の検討から、自然公園における利用者の期待を、①公園資源の享受、②野趣性・独居性の保持、③適切な対人関係の構築、④情報や施設の円滑な利用、⑤清潔・快適な空間の利用、の5つに分類し、これをもとにアンケート調査票を構成し、本調査に用いた。

補注および引用・参考文献

- 1) 山下俊郎他（1969）：情緒・欲求・動機：金子書房，310pp.
- 2) 例えば、小林昭裕（2004）：自然公園での利用体験の質を把握するための概念及び手法上の問題点に関する一考察：ランドスケープ研究 67(5)，591-596
- 3) 日本自然保護協会（1985）：自然保護のあゆみ-尾瀬から天神崎まで、日本自然保護協会三十年史：日本自然保護協会，494pp.
- 4) 田村剛（1954）：自然保護運動の展開：国立公園 61，2-6

- 5) 小寺駿吉 (1954) : 日本に於ける自然保護運動 : 国立公園 61, 7-10
- 6) 朝日新聞 (1950) : 8月10日朝刊
- 7) 朝日新聞 (1957) : 6月9日朝刊
- 8) 朝日新聞 (1958) : 6月8日夕刊
- 9) 朝日新聞 (1963) : 4月7日夕刊
- 10) 朝日新聞 (1965) : 8月5日朝刊
- 11) 朝日新聞 (1965) : 12月18日朝刊
- 12) 朝日新聞 (1975) : 6月16日朝刊
- 13) 朝日新聞 (1979) : 8月27日朝刊
- 14) 朝日新聞 (1983) : 8月20日夕刊
- 15) 朝日新聞 (1988) : 5月31日朝刊
- 16) 例えば、朝日新聞 (1989) : 7月15日朝刊
- 17) 尾瀬保護財団 (2005) : 利用体験から見た尾瀬の収容力に関する調査総合報告書-特に尾瀬ヶ原を中心として
- 18) 尾瀬保護財団ホームページ (2005. 1. 4) : <http://www.oze-fnd.or.jp/>
- 19) 中島慶二 (1998) : 尾瀬問題と国立公園管理 : 国立公園 562, 8-11
- 20) 岩科小一郎 (1953) : 富士講の登山-日本登山史の一頁 : 国立公園 44, 22-23
- 21) 村上俊雄 (1956) : 山岳と宗教 : 国立公園 80, 8-13
- 22) 串田孫一他編 (1997) : 日本の名山 13 富士山 : 博品社, 106-115
- 23) 例えば、小泉武栄 (2001) : 登山の誕生 : 中公新書, 224pp.
- 24) 朝日新聞 (1950) : 1月13日朝刊
- 25) 朝日新聞 (1951) : 11月23日朝刊
- 26) 朝日新聞 (1949) : 9月9日朝刊
- 27) 時の法令編 (1974) : 富士山八合目以上の譲与問題で浅間神社側の勝訴確定 : 時の法令 857, 51-56
- 28) 佐山浩・西田正憲 (2001) : 富士山における戦後の美化清掃活動の変遷 : ランドスケープ研究 64(5), 485-488
- 29) 朝日新聞 (1970) : 8月1日朝刊
- 30) 朝日新聞 (1974) : 5月2日朝刊
- 31) 朝日新聞 (1985) : 7月23日朝刊
- 32) 朝日新聞 (1997) : 7月11日夕刊
- 33) 環境省関東地方環境事務所日光自然環境事務所 (1989-2005) : 日光国立公園尾瀬地域入山者数調査 その他、尾瀬保護財団ホームページ <http://www.oze-fnd.or.jp/>にて公表されている。因みに本稿で扱ったデータは平成 17 (2005) 年 12 月 28 日時点の尾

瀬保護財団ホームページにおける公表資料。その他尾瀬保護財団の各種報告書にも掲載されている。

34) 環境省関東地方環境事務所日光自然環境事務所（1989-2005）：日光国立公園尾瀬地域入山者数調査

35) 前掲 18)

36) 例えば、尾瀬保護財団（2002）：尾瀬自然観察ガイド：山と溪谷社，127pp.

37) 田村裕希・青木陽二（2005）：日光国立公園尾瀬地区における利用者数変動要因分析：ランドスケープ研究 68(5)，723-726

38) 例えば、山梨日日新聞（1982）：8月2日朝刊

39) 山梨日日新聞（1984）：8月26日朝刊

40) 山梨日日新聞（1986）：8月23日朝刊

41) 山梨日日新聞（1989）：8月15日朝刊

42) 山梨日日新聞（1993）：8月26日朝刊

43) 調査の企画段階では詳細な調査報告は無かったが、同（2001）年7月21日の午前5時から午後4時に実施された尾瀬保護財団の調査により、尾瀬ヶ原の利用構造が明らかにされた。その結果、鳩待峠-山の鼻区間の利用者が最も多く両方向で7,842人、次いで山の鼻-牛首分岐区間が7,062人、さらに牛首分岐-竜宮十字路区間が4,203人となり第3位となっている。例えば、田園都市研究所（2002）：尾瀬における適正収容力に関する調査報告書，226pp.を参照されたい。

44) 8月27日から8月28日は山じまいをした後の期間であるが、例年1千人前後の利用者があり、確実に利用者が集中しないことが期待できることから調査日とした。

45) 本調査は環境省が財団法人尾瀬保護財団に委託して実施している国立公園利用適正化推進事業の一環として実施したものであり、どの場所においてどのような満足や不満が生起するのか、満足や不満の場所性を明からかにすることも調査の目的として設定されている。この結果については、田園都市研究所（2002）：尾瀬における適正収容力に関する調査報告書，226pp.を参照されたい。

第4章 二つの自然公園における利用者の意識構造

第1節 本章の目的と構成

本章の目的は、時間消費型の利用が見られる自然公園の代表事例であり、研究対象地として選定した日光国立公園の尾瀬ヶ原と、目的達成型の利用が見られる自然公園の代表事例であり、もう一つの研究対象地として選定した富士山について、利用者の意識構造を明らかにすることである。そこで第2節および第3節では、二つの自然公園の利用者の属性について把握を行い、利用者の満足要素と不満要素を明らかにする。また、利用者属性と満足および不満の要素との関係性について把握した上で、利用者数の多寡と個々の満足、不満の要素の関係性を明らかにする。最後に、第4節では、本章を小括する。

第2節 尾瀬ヶ原における利用者の意識構造

(1) 利用者属性

10月7日(日)および10月8日(月祝)に行った面接式のアンケート調査によって247人から回答を得た。利用者の属性は表4-2-1のようになり、女性が過半数であること、50代が半数近くを占めていること、関東圏からの来訪者が多く約8割を占めていることが分かる。また、利用回数は初めての人が3割強、グループ人数では3人以上を構成する割合が最も高かった。さらに、交通手段はマイカー率が約7割を占め、滞在日数は日帰りの来訪者が約半数を占めた。調査2日間の尾瀬入山者数12,963人に対する全回答者数247のサンプル率は1.9%であった。

尾瀬ヶ原の利用者の属性を詳細に把握するために、調査日当日の利用者数および満足(評価点)、混雑意識(評価点)の指標を加えて、利用者属性間についてスピアマン(Spearman)の順位相関の分析を行った(表4-2-2)。その結果、利用者の年齢と利用回数、グループ人数と利用日数の間に正の相関が見られ、年齢の高い人は尾瀬の利用が多いことや、グループが大きくなると利用日数が多くなることが明らかとなった。また、利用回数と満足(評価点)において負の相関、利用日数と満足(評価点)において正の相関が見られ、利用回数が多い人ほど満足が低く、利用日数が多い人は満足が高いことが示された。さらに、利用者数と混雑意識において正の相関、年齢および満足と混雑意識において負の相関があり、利用者数の多い日に利用者が混雑を意識していることや、年齢が高い人や満足が高い人ほど混雑を意識していないことが明らか

表 4-2-1 尾瀬ヶ原における利用者の属性

属性		人	割合
性	男	113	46%
	女	134	54%
年齢	10代	2	1%
	20代	31	13%
	30代	26	11%
	40代	42	17%
	50代	109	44%
	60代	32	13%
	70代	4	2%
	無回答	1	0.4%
住所	北海道	0	0%
	東北	4	2%
	関東	198	80%
	北陸・甲信越	23	9%
	東海	7	3%
	近畿	11	4%
	中国	3	1%
	四国	0	0%
	九州	1	0.4%
	利用回数	初めて	82
2-3回目		69	28%
4-9回目		58	23%
10-19回目		22	9%
20回以上		16	6%
グループ人数		1人	11
	2人	117	47%
	3人以上	119	48%
交通手段	マイカー	169	68%
	公共交通	21	9%
	ツアーバス	54	22%
	その他	3	1%
利用日数	1日（日帰り）	122	49%
	2日（1泊）	106	43%
	3日（2泊）以上	19	8%
合計		247	100%

表 4-2-2 尾瀬ヶ原における利用者数および利用者属性間の相関

	利用者数	年齢	利用回数	グループ人数	利用日数	満足	混雑意識
利用者数	—	-0.007	-0.068	0.003	-0.077	-0.084	0.219
年齢		—	0.326	-0.062	0.018	0.032	-0.192
利用回数		**	—	-0.120	-0.009	-0.133	0.028
グループ人数				—	0.323	0.010	0.094
利用日数				**	—	0.154	0.007
満足			*		*	—	-0.280
混雑意識	**	**				**	—

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$, 相関係数は Spearman の順位相関係数による

- ①利用者数 : 1) 4,009人 (10月8日) 2) 8,954人 (10月7日)
- ②年齢 : 1) 10代 2) 20代 3) 30代 4) 40代 5) 50代 6) 60代 7) 70代
- ③利用回数 : 1) 初めて 2) 2~3回 3) 4~9回 4) 10~19回 5) 20回以上
- ④グループ人数 : 1) 1人 2) 2人 3) 3人以上
- ⑤利用日数 : 1) 1日 (日帰り) 2) 2日 3) 3日以上
- ⑥満足評価 : 1~11) 0~10点
- ⑦混雑意識 : 1~11) 0~10点

となった。

なお、尾瀬ヶ原において利用者の属性を把握した調査事例としては、昭和 59（1984）年の紅葉期と同 60（1985）年のミズバショウ期に環境庁（現環境省）が実施した調査がある¹⁾。この調査では、昭和 59（1984）年と同 60（1985）年にそれぞれ 330 人、333 人から回答を得ている。これによると、20 代の利用者の割合が最も高く、昭和 59（1984）年には 34%、同 60（1985）年には 27%である。また、利用回数についても、初めての利用者の割合が最も高く両年で 34%、60%を占めている。

これらのことから、昭和 59（1984）年の紅葉期と同 60（1985）年のミズバショウ期と比較すれば、現在の利用者は年齢が高く、なおかつ複数回以上尾瀬を利用するいわゆるリピーターの割合が高くなっていることが特徴といえる。

（2）満足要素と不満要素

尾瀬ヶ原における利用者の満足要素（表 4-2-3）を見ると、まず、①「公園資源の享受」に対する満足要素が多数回答されていることが分かる。特に、「美しい風景に満足した」（全体で第 1 位；A10；227 人）や「自然や緑が多かった」（全体で第 2 位；A1；211 人）が多く挙げられ、これらは全体でも上位に位置することから、尾瀬の優れた景観や自然を堪能できたことが利用者にとって満足の要素となっていると言える。次いで、「自然がよく守られていた」（全体で第 3 位；A12；204 人）が位置し、利用者が自然を保全する取り組みそのものを期待し、評価していることが分かる。さらに、全体の第 4 位と第 5 位には「ゴミが少なかったのは、よかった」（A17；198 人）、「トイレがきれいだった」（A3；184 人）が挙げられ、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素が上位に位置する。これらは、それぞれ利用者の約 7 割から 8 割がそう思うと回答していることから、尾瀬ヶ原という空間と付帯する施設がきれいに使用されていることが評価され、こうした空間の清潔さや快適さが一つの評価軸になっていると考えられる。その一方で、①「公園資源の享受」に対する満足要素の中でも、「見たいと思っていた動物が見られた」（全体で第 28 位；A2；14 人）や、③「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素の「人が少なくてよかった」（第 27 位；A5；62 人）、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素の「出会った人の親切な対応に接することができた」（第 26 位；A11；74 人）は、利用者の満足要素として少なく把握された。これらの回答の少ない満足要素（A2, A11）について、不満要素における類似の要素を見てみると、動植物あるいは挨拶などの対人関係に関わりのある不満要素は少なく、もともと動植物や対人関係における親切は、あまり期待されていないと見てとることができる。反対に、人の多さ（A5）は不満要素として多く回答されていることから、利用者は人の少なさを期待し

表 4-2-3 尾瀬ヶ原利用者の満足要素

No. 満足要素	人	割合
①「公園資源の享受」に対する満足要素		
A10 美しい風景に満足した	227	92%
A 1 自然や緑が多かった	211	85%
A12 自然がよく守られていた	204	83%
A16 山歩きを楽しめた	171	69%
A19 よい写真を撮ることができた	118	48%
A 7 見たいと思っていた植物が見られた	62	25%
A 2 見たいと思っていた動物が見られた	14	6%
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素		
A13 やすらぐことができた	170	69%
A21 よい休息ができた	142	57%
A 5 人が少なく、よかった	33	13%
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素		
A 9 すれ違いの挨拶で、気持ちがよかった	142	57%
A 6 利用者のマナーが良くて、気持ちがよかった	119	48%
A 8 一緒に来た友と語らうことができた	102	41%
A11 出会った人の親切な対応に接することができた	74	30%
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素		
A18 木道がよくできていた	159	64%
A14 登山道がよくできていた	149	60%
A20 施設がよく整備されていた	136	55%
A 4 説明板や標識がよくできていた	128	52%
A15 説明板や標識の数が十分だった	101	41%
⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素		
A17 ゴミが少なかったのは、よかった	198	80%
A 3 トイレがきれいだった	184	74%
合計=2,844件（1人あたり=11.5件）		
注）有効回答数=247		
注）要素に付した番号はアンケート調査票の掲載順位		

ていたにもかかわらず、実現されなかったと考えられる。

不満要素（表 4-2-4）では、1人あたりに挙げられる件数がアメニティ要素の 11.5 件と比較して、3.3 件と少なく分散する傾向が見られた。また、上位には、②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素の「人が多すぎた」（全体で第 1 位；B16；87 人）が位置し、次いで、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素の「植物の名前が分からなかった」（全体で第 2 位；B22；70 人）が多く挙げられた。その他、全体で第 3 位には、③「適切な対人関係」の欠如に関わる「ツアー団体の数が多すぎた」（B9；67 人）が、第 4 位には①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素である「思ったほど紅葉がきれいではなかった」（B20；53 人）が、第 5 位には④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に関する「橋が狭くて危険だった」（B5；52 人）の不満要素が位置し、不満要素の 5 分類のそれぞれの最上位が全体でも上位を占めた。⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素は、回答数が少なく、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待は概ね満たされたと考えられる。

以上、尾瀬ヶ原の利用者に見られた満足要素から、尾瀬ヶ原の利用者の期待うち、特

表 4-2-4 尾瀬ヶ原利用者の不満要素

No. 不満要素	人	割合
①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素		
B20 思ったほど紅葉がきれいではなかった	53	21%
B 2 植生が変化し、植物の減少が見られた	20	8%
B17 目当てにしていた植物が少なかった	20	8%
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素		
B16 人が多すぎた	87	35%
B 8 騒々しく感じた	46	19%
B30 落ち着かなかった	4	2%
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素		
B 9 ツアー団体の数が多すぎた	67	27%
B24 長い人の列が出来て追い越しができなかった	45	18%
B 6 ゆっくり歩くことができなかった	41	17%
B23 挨拶を返してくれない人がいた	16	6%
B11 利用者のマナーが悪かった	12	5%
B26 ツアー団体のマナーが悪かった	12	5%
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素		
B22 植物の名前が分からなかった	70	28%
B 5 橋が狭くて危険だった	52	21%
B 4 木道沿いの休憩所や待避所が少なかった	37	15%
B 3 トイレが少なかった	32	13%
B10 観察テラスが少なかった	32	13%
B 1 木道が歩きにくかった	28	11%
B25 ガイドマップや季節の花のガイドがなかった	23	9%
B15 登山道が歩きにくかった	22	9%
B13 トイレの待ち時間が長かった	21	9%
B19 撮影場所が少なかった	18	7%
B14 説明板や標識の数が少なかった	14	6%
B27 テントを張れる場所が少なかった	5	2%
B29 説明版や標識の内容が分かりにくかった	3	1%
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素		
B 7 施設が整備されすぎていた	17	7%
B12 ゴミが落ちていた	13	5%
B28 トイレが汚れていた	7	3%
B21 嫌な虫がいた	4	2%
B18 嫌な臭いがした	3	1%
合計=824件（1人当たり=3.3件）		

注) 有効回答数=247

注) 要素に付した番号はアンケート調査票の掲載順位

に①公園資源の享受に対する期待が充足され、満足となっていた。また、不満要素から、予想を超える利用者数によって②「野趣性・独居性」が欠如し、植物の名前のように自然に関わる情報を獲得せず④情報や施設の円滑な利用に対する期待が阻害され、不満として顕在化していた。その他、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待は概ね満たされていた。

(3) 利用者属性と満足および不満の要素との関係性

表 4-2-5 利用者属性と満足要素との関係性

		①公園資源の享受							②野趣性・独居性		
		A 1	A 2	A 7	A10	A12	A16	A19	A 5	A13	A21
性	男	-					-			--	
	女	+					+			++	
年齢	10代										
	20代			-							
	30代										
	40代										
	50代			+							
	60代										
	70代										
利用回数	初めて			--	+						
	2~3回										
	4~9回		+								
	10~19回					-		-			
	20回~										
グループ人数	1人				-						
	2人										
	3人以上				+						
交通手段	マイカー									--	
	公共交通										
	ツアーバス					+					+
	その他					-					
利用日数	1日(日帰り)										
	2日(1泊)	+			+						
	3日(2泊)以上				-						

		③適切な対人関係				④円滑に利用できる情報・施設					⑤清潔・快適な空間の利用	
		A 6	A 8	A 9	A11	A 4	A14	A15	A18	A20	A 3	A17
性	男		-							+		
	女		+							-		
年齢	10代											
	20代					-		-	--	--	-	-
	30代											
	40代											
	50代				+	+	++		++		+	
	60代											+
	70代							+				
利用回数	初めて					--						
	2~3回											
	4~9回					++	+		+			
	10~19回	-										
	20回~			-						+		
グループ人数	1人		--									
	2人		--			+						
	3人以上		++									
交通手段	マイカー		--	-				--				
	公共交通										--	-
	ツアーバス	+	++	+				++			+	
	その他											
利用日数	1日(日帰り)		--									
	2日(1泊)		++	+	+							
	3日(2泊)以上	-	+						--			

注) カイ2乗検定 (Fisher's exact test) とクロス集計の分布の検討により表を作成

++および-- : $p < .01$, +および- : $p < .05$

(有効回答数=246)

++および+: 正の相関, --および-: 負の相関

どのような属性の利用者がどのようなことに満足し、不満を持ったのか、その関係性を明らかにするために、利用者属性別の回答数の多少について分析を行った。表 4-2-5 と表 4-2-6 はそれぞれ、クロス集計の分布とカイ 2 乗の検定結果を見ることによって、

有意に関係が認められるものとそうでないものを把握し、有意な関係を正と負に区別して整理した表である。この表によって、各属性の利用者が特有に持つ満足要素と不満要素が分かる。

まず、満足要素については、各属性と①「公園資源の享受」に対する満足要素との関係性はほとんど見出せない。唯一、初めての利用者において、「見たいと思っていた植物が見られた」(A7)の要素が有意に少なく($p < .01$)回答されるが、これは初めての利用者が尾瀬に関わる情報を事前に持っていたか否かに関連があると思われる。①「公園資源の享受」に対する満足要素は、前述の分析結果において量的には多く回答されていることを考えると、尾瀬ヶ原における各属性の利用者は同程度に公園資源の享受を期待して訪れていると言える。

②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、女性において「やすらぐことができた」(A13)が多く($p < .01$)回答され、男性や公共交通の利用者において同要素が少なく($p < .01$)回答された。これは、女性が日常生活を離れて非日常の活動の場として自然公園を訪れる際に、やすらぎを期待している一方で、男性や交通手段が公共交通の利用者は自然公園の訪問自体にそのような精神的効果を期待していないといえる。

③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では、グループ人数や交通手段、利用日数の各属性と「一緒に来た友と語らうことができた」(A8)との有意($p < .01$)な関係が把握され、3人のグループを構成する利用者やツアーバス利用者、1泊2日の利用日数の利用者においては、「一緒に来た友と語らうこと」が満足要素となり、その他の属性の利用者では同要素が満足となっていなかった。これは、グループの人数が大きくなるとグループ内での交流が自然公園において期待する活動の一つとなり、尾瀬ヶ原における滞在時間が長くなると、時間消費の中で交流が期待する活動として位置づけられるものと考えられる。

④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では、各属性と満足要素の間でいくつかの関係が把握された。まず、年齢が50代の利用者では、「登山道がよくできていた」(A14)や「木道がよくできていた」(A18)が多く($p < .01$)回答されるのに対し、20代の年齢の利用者では、「木道がよくできていた」(A18)や「施設がよく整備されていた」(A20)が少なく($p < .01$)回答された。一般的には、20代よりも50代の利用者の方が、相対的に、安全性を含めた利用の円滑性を重視すると考えられる。そこで、各属性と不満要素の関係性(表 4-2-6)を参照すると、20代が多く回答する木道(B1)や施設に関わる不満要素(B5, B4, B3, B10, B15, B19, B14, B27, B29)が無いことから、やはり20代の利用者は情報や施設に対する期待が少ないと言える。また、利用回数別では、初めての利用者において「説明板や標識がよくできていた」(A4)の回答が少なく(p

<.01)、4~9 回目の利用者において同要素が多く回答された。これについても同様の理由により、初めての利用者は情報提供の役割を持った施設に対する期待がもともと少ないと言える。さらに、交通手段別では、ツアーバスの利用者において「説明板や標識の数が十分だった」(A15)が多く ($p < .01$) 回答され、マイカー利用者において同要素が少なく回答された。もともとマイカー利用者が情報提供施設に対する期待が少なく、ツアーバス利用者にとっては期待以上だったことから満足要素として顕在化したと考えられる。

⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、20 代の年齢の利用者や公共交通の利用者において「トイレがきれいだった」(A3)が少なく ($p < .01$) 回答され、不満要素との比較から、これらの属性の利用者が公園施設であるトイレの清潔性をそれほど期待していないことを表していると考えられる。

一方、各属性と不満要素の関係性においても、各属性と①「公園資源の享受」に対する不満要素との関係性はほとんど見られず、利用者が同程度に公園資源に対して期待を持ち、期待が充足されなかったことが分かる。唯一、初めての利用者において、「思ったほど紅葉がきれいではなかった」(B20)が少なく ($p < .01$) 回答された。これは、初めての利用者が尾瀬の自然の状況を評価する基準を持たない、言い換えれば、自然公園の資源を享受するという期待がもともと少ないことに起因すると考えられる。

②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素では、初めての利用者において「騒々しく感じた」(B8)が少なく回答され、2~3 回目の利用者において同要素が多く ($p < .01$) 回答された。これは、①「公園資源の享受」に対する不満要素と同様に、尾瀬の混雑状況について初めての利用者が評価基準を持たず、2~3 回目の利用者ではこれまでの訪問の経験からこのような判断ができたことを表していると考えられる。しかし、より多くの経験を持つ 4 回以上の利用者では、「騒々しく感じた」と回答が少なくなることも多くなることもなく、これまでの経験の多さゆえか一種の慣れのような現象が生じていることが示唆された。一方、交通手段別では、マイカー利用者が「人が多すぎた」(B16)を多く ($p < .01$) 回答したのに対し、ツアーバス利用者が同要素を少なく ($p < .01$) 回答した。これは、満足要素を見ても「人が少なくてよかった」(A5)が多くも少なくも回答されないことから、ツアーバス利用者にとっては、自然公園に対する期待の中に「人の少なさ」が位置づけられていないということの意味する。また、ツアーバス利用者にとって、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素の中で交流が位置づけられていたことにも関連すると考えられる。

③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、利用回数が 10~19 回目の利用者で「利用者のマナー」が多く ($p < .01$) 回答され、20 回以上の利用者で「ツアー団体のマナーが悪かった」(B26)が多く ($p < .01$) 回答された。これは、尾瀬ヶ原にお

ける利用経験から利用者や団体利用者に対し求めるマナーが一種の期待として醸成されることを表している。また、グループ人数が 2 人の利用者において、「ツアー団体

表 4-2-6 利用者属性と不満要素との関係性

		①公園資源の享受			②野趣性・独居性			③適切な対人関係					
		B 2	B17	B20	B 8	B16	B30	B 6	B 9	B11	B23	B24	B26
性	男					+							
	女					-							
年齢	10代												
	20代												
	30代												
	40代												
	50代												
	60代	+											
利用回数	初めて			---	---	-		+					
	2~3回				++								
	4~9回										+		
	10~19回			+						++			
	20回~												++
グループ人数	1人												
	2人									-			--
	3人以上	+								+			+
交通手段	マイカー					++							
	公共交通												
	ツアーバス					--				--			
	その他												
利用日数	1日(日帰り)						+	+					
	2日(1泊)												
	3日(2泊)以上	+								++			

		④円滑に利用できる情報・施設														
		B 1	B 3	B 4	B 5	B10	B13	B14	B15	B19	B22	B25	B27	B29		
性	男												--	-		
	女												++	+		
年齢	10代				++											
	20代															
	30代														++	
	40代															
	50代			+		+										
	60代		+									-				
利用回数	初めて				++											
	2~3回															
	4~9回	-							-							
	10~19回															
	20回~															
グループ人数	1人															
	2人									-					-	
	3人以上									+					+	
交通手段	マイカー														--	
	公共交通														++	
	ツアーバス											+				
	その他														++	
利用日数	1日(日帰り)	--													-	
	2日(1泊)	++														
	3日(2泊)以上					-										

(有効回答数=246)

		⑤清潔・快適な空間の利用				
		B 7	B12	B18	B21	B28
性	男	++				
	女	--				
年齢	10代					
	20代					
	30代				+	
	40代					
	50代	+				
	60代					
利用回数	初めて					
	2~3回					
	4~9回					
	10~19回					
	20回~					
グループ人数	1人					
	2人					
	3人以上					
交通手段	マイカー					
	公共交通					
	ツアーバス		+			
	その他				++	
利用日数	1日(日帰り)					
	2日(1泊)					
	3日(2泊)以上					

注) カイ2乗検定 (Fisher's exact test) とクロス集計の分布の検討により表を作成

++および-- : $p < .01$
 +および- : $p < .05$

++および+ : 正の相関
 --および- : 負の相関

のマナーが悪かった」(B26)の不満要素が、ツアーバス利用者において「ツアー団体の数が多すぎた」(B9)が、少なく ($p < .01$) 回答され、これらの属性の利用者では団体利用者との対人関係において、期待が阻害されることはなかったと考えられる。さらに、利用日数が2泊3日以上の利用者において「利用者のマナーが悪かった」(B11)が多く ($p < .01$) 回答された。2泊3日以上の利用者は満足要素においても「利用者のマナーが良くて、気持ちがよかった」(A6)をやや少なく ($p < .05$) 回答しており、良好な対人関係の構築を期待していたにもかかわらず、満たされなかったことを表している。

④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素では、年齢が10代の利用者と利用回数が初めての利用者において「橋が狭くて危険だった」(B5)が多く ($p < .01$) 回答された。尾瀬ヶ原における利用者数と利用者属性間の関係性(表 4-2-2)で把握したように、年齢と利用回数には相関(0.323, $p < .01$)があり、「橋の狭さ」は10代の利用者や初めての利用者のように尾瀬ヶ原の経験が少ない利用者層で充足されない期待といえる。また、利用日数別では、日帰り(1日)の利用者において「木道が歩きにくかった」(B1)が少なく ($p < .01$) 回答され、1泊2日の利用者において同要素が多く ($p < .01$) 回答された。これは、1泊2日の利用者の方が日帰りの利用者に比べて、滞在時間が長く、歩いた木道の距離も長いと考えられることから、尾瀬ヶ原に敷設された木道区間のうち歩きにくい区間を意識したものと考えられる。しかし、2泊3日以上の利用者ではこのような傾向は見られなかった。

⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素では、男性において「施設が整備されすぎていた」(B7)が多く ($p < .01$) 回答され、女性において同要素が少なく ($p < .01$) 回答された。これについては、男性の方がより施設整備に対する期待として適度なあり方を意識していると考えられる。

以上、利用者属性と満足要素および不満要素の関係性を把握した。尾瀬ヶ原の利用者は初めての利用者を除いて、①「公園資源の享受」に対する期待が同程度であることが示された。また、②「野趣性・独居性」に対する期待については、性別や利用回数、交通手段によって差異があること、③「適切な対人関係」に対する期待は、利用回数やグループ人数、交通手段、利用日数によって差異があることが分かった。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待は、年齢や利用回数、交通手段、利用日数によって違いがあること、⑤「清潔・快適な空間」に対する期待では、性別や年齢、交通手段によって差異があることが明らかとなった。

(4) 利用者数の多寡と満足および不満の要素の関係性

表 4-2-7 混雑日および閑散日における尾瀬ヶ原利用者の満足要素

No. 満足要素	混雑日 (10月7日) 回答者=174人	閑散日 (10月8日) 回答者=72人	χ^2 検定
①「公園資源の享受」に対する満足要素			
A 1 自然や緑が多かった	145	65	
A 2 見たいと思っていた動物が見られた	11	3	
A 7 見たいと思っていた植物が見られた	39	22	
A10 美しい風景に満足した	159	67	
A12 自然がよく守られていた	142	61	
A16 山歩きを楽しめた	119	51	
A19 よい写真を撮ることができた	71	46	**
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素			
A 5 人が少なく、よかった	16	16	**
A13 やすらぐことができた	115	54	
A21 よい休息ができた	93	48	
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素			
A 6 利用者のマナーが良く、気持ちよかった	80	38	
A 8 一緒に来た友と語ることができた	68	34	
A 9 すれ違いの挨拶で、気持ちよかった	90	51	**
A11 出会った人の親切な対応に接することができた	45	28	*
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素			
A 4 説明板や標識が良く出来ていた	81	46	*
A14 登山道がよくできていた	96	52	*
A15 説明板や標識の数が十分だった	63	37	*
A18 木道がよくできていた	114	44	
A20 施設がよく整備されていた	87	48	*
⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素			
A 3 トイレがきれいだった	127	56	
A17 ゴミが少なかったのは、よかった	135	62	
注) **: $p < .01$, * : $p < .05$ (カイ2乗検定 Fisher's exact test) (有効回答数=246)			
2001年10月7日および10月8日の利用者数はそれぞれ8,954人と4,009人			

尾瀬の利用の概況の把握によって利用者が多くなることが予想された平成 13 (2001) 年 10 月 7 日 (日曜日) の尾瀬ヶ原の利用者数は 8,954 人、比較的利用者が少なくなることが予想された同年 10 月 8 日 (月曜日・祝日) の利用者数は 4,009 人²⁾ と、予想通りであったことから、両日の尾瀬ヶ原利用者の満足要素と不満要素について分析を行った。表 4-2-7 および表 4-2-8 はそれぞれ、混雑日および閑散日における尾瀬ヶ原利用者の満足要素と不満要素の一覧であり、カイ 2 乗検定 (Fisher's exact test) によって有意と判断されたものには、*によって明示した。

まず、満足要素については、混雑日 (10 月 7 日) において、①「公園資源の享受」に対する満足要素のうち、「よい写真を撮ることができた」(A19) が少なく ($p < .01$) 回答されることが分かる。この要素は、①「公園資源の享受」に分類される要素の中で、よい写真を撮るという行動を通して公園資源の享受を目指す、より現実的で具体的な行動が想定されている点で、同分類の他の要素とは違う内容のものといえる。この要素は、こうした具体的な仮想行動に関連する期待が、多数の利用者の存在によって阻害されたものと理解できる。また、回答数として多く把握された「自然や緑」(A1) や「美しい風景」(A10)、「自然がよく守られていた」(A12) ことに対する満足要素は、混雑日に多くも少なくも回答されなかった。

表 4-2-8 混雑日および閑散日における尾瀬ヶ原利用者の不満要素

No. 不満要素	混雑日 (10月7日) 回答者=174人	閑散日 (10月8日) 回答者=72人	χ^2 検定
①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素			
B 2 植生が変化し、植物の減少が見られた	15	5	
B17 目当てにしていた植物が少なかった	16	4	
B20 思ったほど紅葉がきれいではなかった	34	19	
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素			
B 8 騒々しく感じた	37	9	
B16 人が多すぎた	68	19	
B30 落ち着かなかった	4	0	
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素			
B 6 ゆっくり歩くことができなかった	35	6	*
B 9 ツアー団体の数が多すぎた	52	15	
B11 利用者のマナーが悪かった	7	5	
B23 挨拶を返してくれない人がいた	10	6	
B24 長い人の列が出来て追い越しができなかった	33	12	
B26 ツアー団体のマナーが悪かった	9	3	
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素			
B 1 木道が歩きにくかった	18	10	
B 3 トイレが少なかった	25	6	
B 4 木道沿いの休憩所や待避所が少なかった	29	8	
B 5 橋が狭くて危険だった	42	10	
B10 観察テラスが少なかった	29	3	**
B13 トイレの待ち時間が長かった	17	4	
B14 説明板や標識の数が少なかった	12	2	
B15 登山道が歩きにくかった	16	6	
B19 撮影場所が少なかった	14	4	
B22 植物の名前が分からなかった	50	20	
B25 ガイドマップや季節の花のガイドがなかった	20	3	
B27 テントを張れる場所が少なかった	2	3	
B29 説明版や標識の内容が分かりにくかった	1	2	
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素			
B 7 施設が整備されすぎていた	8	9	*
B12 ゴミが落ちていた	8	5	
B18 嫌な臭いがした	2	1	
B21 嫌な虫がいた	1	3	(*)
B28 トイレが汚れていた	4	3	

注) **: $p < .01$, *: $p < .05$ (カイ2乗検定 Fisher's exact test) (有効回答数=246)
2001年10月7日および10月8日の利用者数はそれぞれ8,954人と4,009人

②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素の中では、「人が少なくてよかった」(A5)が混雑日において少なく ($p < .01$) 回答され、混雑日においては、利用者が持つ利用者の少なさに対する期待が満たされなかったと考えられる。

③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では、「すれ違いの挨拶で、気持ちがよかった」(A9)と、「出会った人の親切な対応に接することができた」(A11)が混雑日において少なく (それぞれ $p < .01$, $p < .05$) 回答された。このことは、多数の利用者の存在によって軋轢が生じて、挨拶や親切などの対人関係におけるマナーが低下することによると考えられる。

④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では、多くの要素が混雑日に少なく ($p < .05$) 回答されることが明らかとなった。説明板や標識に関わる満足要素 (A4, A15) や登山道 (A14) や施設 (A20) に関わる要素である。これらの要素が混雑日に少なく回答されることは、混雑日においてこれらの期待がより強く阻害され不満とな

ったか、混雑日において利用体験前の期待の水準が上昇したにもかかわらず満たされなかったかのどちらかである。そこで、混雑日において不満要素（表 4-2-8）についても参照してみると、特に積極的に不満と認識されたとは言い難く、むしろ、混雑日の状況に応じて、期待が増加したにもかかわらず満たされなかったと考えるのが妥当と考えられる。

⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、混雑日に少なく回答される要素や多く回答される要素は無かった。これについても不満要素（表 4-2-8）を参照すると、トイレ（B28）やゴミ（B12）に関わる不満要素の増減は無く、期待の大きさが変化しなかったか、期待の大きさの変化と実際の利用状況の評価が並行的に変化したかは不明である。

一方、不満要素については、混雑日（10月7日）において、①「公園資源の享受」に対する不満要素の中で減少するものは見られなかった。これらの要素について同様に満足要素（表 4-2-7）を見てみると、植物や自然に対する満足要素（A1, A2, A7, A10, A12）は混雑日において、少なく回答されるものや多く回答されるものは見あたらない。このことから、①「公園資源の享受」に対する期待の大きさは混雑日と閑散日において変化しないか、両日において期待の大きさと実際の満足と不満の評価が並行的に変化したか、のいずれかであると考えられる。

②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素においても、混雑日において有意に多く回答される要素や少なく回答される要素は無かった。同様に、満足要素（表 4-2-7）を見てみると、「人が少なくてよかった」（A5）は混雑日に少なく（ $p < .01$ ）回答されるのに対し、「人が多すぎた」（B8）は混雑日に多くも少なくも回答されない。これらのことから、多数の利用者の存在によって人の少なさに対する期待は阻害されたが、人が多すぎて不満という意識は特に生成されなかった可能性がある。このことは、利用者が予想される利用状況に合わせて人の多さに対する期待の大きさを変化させている可能性を示唆すると考えられる。

③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、「ゆっくり歩くことができなかった」（B6）が混雑日に多く回答された。この要素はゆっくりと歩きたいという利用者の期待としての仮想行動と関わりがあると考えられ、実際の利用体験において期待する行動が実現しなかったことによって、混雑日に回答が多くなったと理解できる。

④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素では、混雑日に「観察テラスが少なかった」（B10）が多く（ $p < .01$ ）回答された。満足要素においては同様の要素として「施設がよく整備されていた」（A20）の満足要素があり、これについても混雑日に少なく回答されることから、この要素は多数の利用者の存在によって阻害された期待と考えることができる。

⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素では、混雑日において「施設が整備されすぎていた」(B7)が少なく ($p < .05$) 回答された。これは、「利用者数が少ないのに施設が整備されすぎている」という利用者心理であり、利用者数と施設整備の水準の均衡が崩れることによって、特に閑散日において意識されるものと考えられる。また、空間の快適性に対する期待の変化は考えにくいことから、混雑日において空間の快適性の不満が減少する理由としては、多数の利用者の存在によって、施設や虫に対する意識が他へ分散された可能性を考えることができる。

以上、混雑日および閑散日における尾瀬ヶ原利用者の満足要素と不満要素から、利用者数の多寡が尾瀬ヶ原利用者の個々の期待に及ぼす影響を把握した。結果から、多数の利用者の存在は、①「公園資源の享受」に対する期待の中でも仮想行動に類する期待に影響を及ぼすことや、利用状況に合わせて②「野趣性・独居性」に対する期待のうち、利用者数に関わる期待(予想)の大きさを変化させている可能性があることが明らかとなった。また、多数の利用者の存在は、良好な対人関係(③「適切な対人関係」)を阻害することや、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待については、混雑日においてその期待が増加したにもかかわらず満たされなかったことが考えられた。さらに、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する期待では、多数の利用者の存在によって意識が他へ分散され、不満として顕在化しない可能性のあることが明らかとなった。

第3節 富士山における利用者の意識構造

(1) 利用者属性

表 4-3-1 に示すように、7月21日から8月28日までの計8日間に行った面接式のアンケート調査によって、470人の利用者（登頂後の下山者）から回答を得た。これら下山者の多くが前日に登山を開始したと考えられることから、利用者意識に影響を与えるものとして、前日の登山者数が重要な指標となる。そこで、調査日と前日の登山者数と照合した結果、7月21日（月・祝）、7月27日（日）、8月3日（日）の3調査日の前日において予想した通り、登山者が多かった。この3調査日の前日は、平成15（2003）年の登山者が多い上位10日（表 3-3-4）においても、それぞれ第6位、第4位、第1位に位置しており、この3調査日を混雑日として位置づけた。また、利用の集中が生じないことを予想した8月26日（火）、8月27日（水）、8月28日（木）の3調査日の前日は、例年通り登山者が少なく、閑散日として位置づけた。一方、当初混雑日と予想した8月10日（日）については、前日に台風が通過し利用者が少なかったことから、混雑日とせず、なおかつ閑散日としても位置づけなかった。さらに、8月26日（火）についても、例年以上の利用者を記録し、その利用者数の多さが8調査日の中で中間に位置することから、閑散日あるいは混雑日として位置づけなかった。

富士山の利用者属性（表 4-3-2）は、男性が6割強を占め、20代の年齢層が約半数、誘致圏はほぼ全国を網羅し、特に関東からの利用者が7割を占めた。また、利用回数ではアンケート調査回答時の富士山の利用（登頂）を初めてとした被験者が約7割、被験者が属するグループ人数は3人以上が6割強、交通手段はマイカーが最も多く4割強、利用日数は1泊2日が8割強と大半を占めた。

表 4-3-1 調査実施日と概況

日	曜日	回答者数	計	前日登山者数	(順位)	サンプル率	備考
7.12	土	(90)	(90)	(1,395)	—	(6.5%)	予備調査
7.21	月祝	72	178	5,574	(3)	1.3%	混雑日
7.27	日	20		6,147	(2)	0.3%	混雑日、悪天候により途中中止
8.03	日	86		9,763	(1)	0.9%	混雑日
8.10	日	28	109	1,080	(8)	2.6%	前日に台風が通過
8.25	月	81		2,864	(4)	2.8%	例年以上の人出を記録
8.26	火	57		1,819	(5)	3.1%	閑散日
8.27	水	38	183	1,244	(6)	3.1%	閑散日
8.28	木	88		1,109	(7)	7.9%	閑散日
計		470	470	29,600	—	1.6%	

注) 前日登山者数は富士吉田市富士山課資料「富士山登山者調べ」（2003年）による

表 4-3-2 富士山における利用者の属性

属性		人	割合
性	男	305	65%
	女	165	35%
年齢	10代	20	4%
	20代	233	50%
	30代	79	17%
	40代	44	9%
	50代	52	11%
	60代	37	8%
	70代	5	1%
住所	北海道	1	0.2%
	東北	4	1%
	関東	331	70%
	北陸・甲信越	36	8%
	東海	27	6%
	近畿	51	11%
	中国	5	1%
	四国	7	1%
	九州	8	2%
利用回数 (富士登頂回数)	初めて	328	70%
	2-3回目	93	20%
	4-9回目	28	6%
	10-19回目	10	2%
	20回以上	11	2%
グループ 人数	1人	24	5%
	2人	143	30%
	3人以上	300	64%
	無回答	3	1%
交通手段	マイカー	208	44%
	公共交通	102	22%
	ツアーバス	139	30%
	自転車	2	0.4%
	徒歩	1	0.2%
	その他	18	4%
利用日数	1日(日帰り)	69	15%
	2日(1泊)	387	82%
	3日(2泊)以上	14	3%
合計		470	100%

また、富士山における利用者の属性を詳細に把握するため、調査日当日の利用状況を表す利用者数（前日の登山者数）や、満足（評価点）および混雑意識（評価点）の指標を加えて、利用者属性間についてスピアマン（Spearman）の順位相関の分析を行った（表 4-3-3）。その結果、年齢と利用者数、利用回数、利用日数との間に正の相関が見られ、年齢が高い人ほど平日ではなく混雑日となる週末に富士山を利用し、その利用が2回目以上、登山の行程が2日以上となり、利用日数が多くなることが示された。また、グループ人数と利用日数に負の相関があることから、グループ人数が多い登山者で短い利用日数となっていることが明らかとなった。一方、満足や混雑意識など総合評価に関わる質問項目との関連については、利用者数と混雑意識の相関係数が正の相関を示したことから、混雑日において富士山の利用者の混雑意識が高くなっていることが明らかとなった。また、利用回数と満足の関係において負の相関があることから、利用回数の多い人は満足が低くなるということが示唆された。さらに、年齢と混雑意識の関係において正

表 4-3-3 富士山における利用者数および利用者属性間の相関

	利用者数	年齢	利用回数	グループ人数	利用日数	満足	混雑意識
利用者数	—	0.295	0.118	-0.039	0.003	0.028	0.439
年齢	**	—	0.242	0.008	0.156	0.011	0.157
利用回数	*	**	—	-0.007	-0.012	-0.145	-0.025
グループ人数				—	-0.143	-0.038	0.047
利用日数		**		**	—	0.039	-0.039
満足			**			—	-0.024
混雑意識	**	**					—

** : p < 0.01, * : p < 0.05, 相関係数は Spearman の順位相関係数による

利用者数は利用者がアンケートに回答した調査日の前日登山者数

①利用者数： 1) 1,080人 2) 1,109人 3) 1,244人 4) 1,819人

5) 2,864人 6) 5,574人 7) 6,174人 8) 9,763人

②年齢： 1) 10代 2) 20代 3) 30代 4) 40代 5) 50代 6) 60代 7) 70代

③利用回数： 1) 初めて 2) 2~3回 3) 4~9回 4) 10~19回 5) 20回以上

④グループ人数： 1) 1人 2) 2人 3) 3人以上

⑤利用日数： 1) 1日 (日帰り) 2) 2日 3) 3日以上

⑥満足評価： 1~11) 0~10点

⑦混雑意識： 1~11) 0~10点

の相関が見られることから、年齢の高い人ほど混雑意識が高くなることが明らかとなった。その他、混雑意識は負の意識と考えることが一般的であるが、富士山では混雑意識と満足の相関が見られないことが明らかとなった。

(2) 満足要素と不満要素

富士山の利用者が持つ満足要素と不満要素はどのようなものであるのかを把握するために、それぞれの要素について量的な把握を行った。表 4-3-4 と表 4-3-5 はそれぞれ、要素別の富士山における利用者の満足と不満の回答数である。

①「公園資源の享受」に対する満足要素では、第 1 位に「富士山の雄大さを実感することができた」(a14 ; 339 人)、第 2 位に「登りごたえがあった」(a19 ; 330 人)、第 3 位に「日本一高い山を征服した」(a25 ; 303 人)、第 4 位に「空気がきれいだった」(a1 ; 280 人)、第 5 位に「富士山の自然に触れることができた」(a17 ; 255 人) が挙げられ、自然を含めた富士山の空間的スケールの大きさに対する体験的満足が上位に位置した。これらは、満足要素全体で見ても上位に位置していることから、富士山の利用者にとって多くを占める期待であり登山という体験を通して満たされたものと考えられる。

②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、「人が少なくてよかった」(a24 ; 47 人) を回答した利用者は最も少なく、調査を行った 8 日の中で、期待が満たされなかったことが分かる。不満要素 (表 4-3-5) を見ると、「人が多すぎた」(b17) は多く回答されていることから、人がどの程度利用しているかという利用状況については、ある程度の期待を持っているものの、期待は満たされず、多くの利用者にとっては満足として顕在化しなかった要素と考えることができる。

③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素の中では、「同行した家族や友人と語

表 4-3-4 富士山利用者の満足要素

らうことができた」(a23 ; 200 人)が多く、自然公園における活動の中で交流が重要な

No.	満足要素	人	割合
①「公園資源の享受」に対する満足要素			
a14	富士山の雄大さを実感することができた	339	72%
a19	登りごたえがあった	330	70%
a25	日本一高い山を征服した	303	64%
a 1	空気がきれいだった	280	60%
a17	富士山の自然に触れることができた	255	54%
a13	足腰がきたえられた	233	50%
a 9	登山途中の風景を楽しむことができた	231	49%
a 2	御来光を仰ぐことができた	227	48%
a26	富士山頂上からの風景を楽しむことができた	180	38%
a10	長年の夢がかなった	162	34%
a 4	自然がよく守られていた	108	23%
a 6	ガイドの案内により富士山を楽しめた	82	17%
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素			
a24	人が少なくてよかった	47	10%
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素			
a23	同行した家族や友人と語ることができた	200	43%
a20	ゴミの持ち帰りが守られていた	172	37%
a11	気持ちのよい挨拶を交わすことができた	160	34%
a21	山小屋の対応が親切だった	142	30%
a27	トイレチップがきちんと支払われていた	125	27%
a18	登山者のまわりの人への気づかいがあった	125	27%
a16	喫煙マナーがよかった	123	26%
a28	登山道のすれ違いのマナーが守られていた	117	25%
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素			
a 7	登山道がよく整備されていた	140	30%
a 8	説明板や標識の内容が良くできていた	84	18%
a12	トイレがよく整備されていた	65	14%
a15	施設がよく整備されていた	53	11%
a22	説明板や標識の数が十分だった	53	11%
⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素			
a 5	ゴミが少なかった	185	39%
a 3	トイレがきれいだった	54	11%
合計=4,575件 (1人当たり=9.7件)			

注) 有効回答数=470

要素に付した番号はアンケート調査票の掲載順位

要素となっていた。

④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素の中では、「登山道がよく整備されていた」(a7 ; 140 人)の回答がやや多いものの、他の要素については、「施設がよく整備されていた」(a15 ; 53 人)や「説明板や標識の数が十分だった」(a22 ; 53 人)、「トイレがよく整備されていた」(a12 ; 65 人)など、満足要素として回答した利用者は少なく、情報提供の役割を持つものを含め施設に対する期待が少ない、あるいは施設に対する期待が満たされなかったと考えることができる。これについては、不満要素(表 4-3-5)について見ると施設に対する期待が満たされず不満となったことを示す要素は見あらず、もともと富士山利用者が情報や施設の円滑な利用に対して期待をしていな

表 4-3-5 富士山利用者の不満要素

No. 不満要素	人	割合
①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素		
b16 ガイドの解説がよくなかった	4	1%
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素		
b17 人が多すぎた	185	39%
b14 騒々しく感じた	59	13%
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素		
b 5 長い人の列ができて追い越しができなかった	150	32%
b26 登山に対する準備が不足している人がいた	82	17%
b11 団体利用者の団体規模が大きすぎた	78	17%
b28 ゴミを持ち帰らない人がいた	72	15%
b15 トイレチップを払わない人がいた	64	14%
b24 登山道をふさいでいる団体利用者がいた	60	13%
b22 喫煙マナーの悪い人がいた	58	12%
b 2 休憩場所を占拠する団体利用者がいた	57	12%
b 7 登山道からはずれる人がいた	46	10%
b18 団体利用者のおしゃべりがうるさかった	43	9%
b20 歩行ペースを弱い人に合わせない人がいた	42	9%
b10 挨拶を返してくれない人がいた	34	7%
b30 登山道のすれ違いのマナーが守られていなかった	24	5%
b29 団体利用者のリーダーが団体を管理できないでいた	21	4%
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素		
b 8 説明板や標識の数が少なかった	120	26%
b 6 トイレが少なかった	102	22%
b19 トイレの待ち時間が長かった	84	18%
b13 休憩場所が少なかった	80	17%
b 3 登山道が整備されていなかった	70	15%
b25 トイレチップの使いみちが示されていなかった	64	14%
b27 説明板や標識の内容がわかりにくかった	60	13%
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素		
b12 トイレが臭かった	292	62%
b 1 トイレが汚かった	228	49%
b 4 ゴミが捨てられていた	181	39%
b 9 山小屋が多すぎた	29	6%
b21 山小屋の営業看板があった	19	4%
b23 施設が整備されすぎていた	7	1%
合計=2,415件（1人あたり=5.1件）		

注) 有効回答数=470

要素に付した番号はアンケート調査票の掲載順位

いといえる。

⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、「ゴミが少なかった」(a5 ; 185人の回答がやや多いのに対し、「トイレがきれいだった」(a3 ; 54人)の回答が少なく、満足要素の中でも4番目に少ない回答となっている。このことは、富士山利用者がトイレの清潔さを期待していなかったか、あるいはトイレの清潔さを期待していたが満たされず不満要素となった、のいずれかである。この要素の場合は、不満要素を見ると、トイレの清潔さの欠如に対する不満要素が上位に位置していることから、富士山利用者のトイレの清潔さに対する期待は決して小さいとは言えず、その期待が満たされなかったために、満足要素としての回答が少なかったと考えられる。

一方、①「公園資源の享受」に対する不満要素では、「ガイドの解説がよくなかった」

(b16) は少なく回答される。これは、利用者の多くがガイドを伴わずに富士山を登頂していることから、ガイドの不満要素と満足要素 (a6) がともに少なく回答されると考えられる。また、そのうち大半の利用者がガイドを通して公園資源を享受でき、一部の利用者がガイドを介して公園資源を享受できなかったと考えられる。

②「野趣性・独居性」の保持に対する不満要素では、「人が多すぎた」(b17 ; 185 人) が多く回答された。この要素は不満要素の全体の中でも上位 (3 位) を占めていることから、富士山利用者の多くがより少ない利用状況を想定し、期待として持っていたにもかかわらず、実際のフィールドにおいては実現されなかった要素と考えられる。

③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、「長い人の列ができて追い越しができなかった」(b5 ; 150 人) の回答が多い。この要素は、追い越すという仮想行動を伴う不満要素であり、同分類の他の要素に比べて対照的な内容となっている。また、「休憩場所を占拠する団体利用者がいた」(b2 ; 57 人) も同様に休憩という仮想行動を伴う不満要素である。「長い人の列」(b5) の方が多く回答されることは、登山という富士山の利用形態においては、面的に団体利用者が空間を占拠することよりも、登山道において長い人の列が存在することが対人関係に関わる期待を阻害する要因と考えられる。

④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素では、「説明板や標識の数が少なかった」(b8 ; 120 人) の回答や、「トイレが少なかった」(b6 ; 102 人) が、同分類の要素の中では上位に位置するものの、それ程多くない。これらの要素については、同様の満足要素 (a22, a12) について見ると、やはり多く回答されていないことから、これらの要素に関わりのある期待はもともと多くはないと見ることができる。

⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、「トイレが臭かった」(b12 ; 292 人) や「トイレが汚かった」(b1 ; 228 人) が位置し、不満要素の全体の中で 1 位、2 位を占めている。このことは、富士山の利用者がトイレの清潔性や快適性を期待していたにもかかわらず、満たされず、不満となったと考えられる。

以上から、富士山利用者の満足要素は、その多くが①「公園資源の享受」に対する期待の充足によって生じ、実際の利用体験を通し富士山のスケールや自然が満足となっていた。また、②「野趣性・独居性」に対する期待は、調査日 8 日間ではそれほど充足されず、③「適切な対人関係」に対する期待では、交流が重要な満足要素となっていた。しかし、③適切な対人関係の構築に対する期待のうち、利用者が持つ仮想行動に伴う期待が阻害された場合には不満となっていた。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待はもともと少なく、⑤「清潔・快適な空間」に対する期待では、トイレの清潔性や快適性が期待されていたにもかかわらず、満たされなかったことが明らかとなった。

(3) 利用者属性と満足および不満の要素の関係性

どの属性の利用者がどのようなことに満足し、不満を持ったのか、その関係性を明らかにするために、利用者属性と満足および不満の関係について分析を行った。表 4-3-6 と表 4-3-7 はそれぞれ、クロス集計の分布とカイ 2 乗の検定結果を見ることによって、有意に関係が認められるものとそうでないものを、正と負の相関に区別して整理した表である。この表によって、各カテゴリーの中でそれぞれの属性の利用者が持つ相対的な意識の量を把握することができる。

まず、①「公園資源の享受」に対する満足要素では、女性において「ガイドの案内によって富士山を楽しめた」(a6) を多く ($p < .01$) 回答した。この要素については、利用回数が初めての利用者や交通手段がツアーバスの利用者においても多く ($p < .01$) 回答されることから、こうした属性の利用者にとってはガイドの案内を通して富士山の公園資源を享受できることが満足となっていると考えられる。また、「御来光を仰ぐことができた」(a2) については、10 代や 20 代の年齢の利用者において少なく ($p < .01$) 回答され、50 代の利用者において多く ($p < .01$) 回答された。このことは、10 代や 20 代の年齢の利用者がもともと御来光を仰ぐという自然体験活動そのものを期待していなかったか、あるいは期待していたにもかかわらず満たされなかったか、のいずれかであるが、これについては本分析の結果のみでは判断できず、天候による影響についても否定はできない。さらに、50 代の利用者において「長年の夢がかなった」(a10) や「足腰がきたえられた」(a13) が多く ($p < .01$) 回答されるのに対し、30 代の利用者において少なく ($p < .05$) 回答されることから、こうした要素は 50 代の利用者にとって長年の期待であり富士登山によって満たされた期待と考えられる。その他、初めての利用者において、「登りごたえがあった」(a19) や「日本一高い山を征服した」(a25) が多く ($p < .01$) 回答され、実際の登山が初めての利用者の期待の水準を上回るものだったと言える。

②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、男性において「人が少なくてよかった」(a24) が少なく ($p < .01$) 回答されるに対し、女性においては多く ($p < .01$) 回答される。この要素については、不満要素(表 4-3-7)においても同様の要素(b14)があることから見てみると、「人が多すぎた」(b17)を女性が少なく ($p < .01$) 回答し、男性が多く ($p < .01$) 回答している。このことから、男性の方が利用者数や実際の利用状況に対する期待の水準が高く、女性との相対的な関係において、より野趣性・独居性に対する期待が大きいと考えられる。

③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では、女性において「山小屋の対応が

親切だった」(a21)や「トイレチップがきちんと支払われていた」(a27)が多く ($p < .01$) 回答されるのに対し、男性においてそれらの回答が少なかった ($p < .01$)。このことは女性において、親切な対応への期待や利用者のマナーに対する期待が満たさ

表 4-3-6 利用者属性と満足要素との関係性

		①公園資源の享受											
		a 1	a 2	a 4	a 6	a 9	a10	a13	a14	a17	a19	a25	a26
性	男	-			--								
	女	+			++								
年齢	10代		--					+					-
	20代	-	--	-					-		-		
	30代						--	-				-	
	40代	+	+										
	50代		++	+	+		+	+	+	+	+		++
	60代						++	++	+				
	70代												
利用回数	初めて			+	++		++				++	++	
	2~3回			-	--		--	-				--	
	4~9回				-		--						
	10~19回								-		-	-	
	20回~						-				--		
グループ人数	1人											--	
	2人												
	3人以上										+		
交通手段	マイカー				--							+	
	公共交通				--						-	-	
	ツアーバス			+	++								
	その他				-								
利用日数	1日(日帰り)	-			--				--				
	2日(1泊)				++								
	3日(2泊)以上							+					

		②野趣性・独居性	③適切な対人関係							
		a24	a11	a16	a18	a20	a21	a23	a27	a28
性	男	--					--	--		
	女	++					++		++	
年齢	10代	+			+					
	20代		++	--	--	--	-		--	
	30代		-	-		--				-
	40代								++	
	50代			++		+	++			
	60代			++		++	+	++	++	
	70代									
利用回数	初めて		++							
	2~3回		--							
	4~9回									
	10~19回							-		
	20回~									
グループ人数	1人							--		
	2人		-							
	3人以上		+					+		
交通手段	マイカー		++							
	公共交通		--	--				--		
	ツアーバス				+				+	
	その他									
利用日数	1日(日帰り)		++	-			-		--	
	2日(1泊)		--						+	
	3日(2泊)以上						++	+		

		④円滑に利用できる情報・施設					⑤清潔・快適な空間の利用	
		a 7	a 8	a12	a15	a22	a 3	a 5
性	男					+		-
	女					-		+
年齢	10代							
	20代	--	--	--	--		--	--
	30代							
	40代	++			+			
	50代	++		+		++	++	++
	60代	++	++	++	++	++	++	++
	70代				+		+	
利用回数	初めて	--					-	
	2~3回							
	4~9回	++					++	
	10~19回							
	20回~							-
グループ人数	1人					+		
	2人							
	3人以上							
交通手段	マイカー							
	公共交通							
	ツアーバス			++				
	その他							
利用日数	1日(日帰り)			-			-	
	2日(1泊)							
	3日(2泊)以上					++	+	

注)
カイ2乗検定 (Fisher's exact test) とクロス集計の分布の検討により表を作成

++および--: p < .01
+および-: p < .05

++および+: 正の相関
--および-: 負の相関

(有効回答数=467)

れたことを意味する。また、年齢が 20 代の利用者や利用回数が初めての利用者、交通手段が公共交通の利用者、利用日数が 1 日（日帰り）の利用者において「気持ちのよい挨拶を交わすことができた」（a11）が多く（ $p < .01$ ）回答され、富士山における利用経験が少ない利用者にとってはこうした対人関係の構築が満足となっていることが分かる。さらに、適切な対人関係に類する他の多くの満足要素で、20 代の年齢を中心とする若年層よりも 50 代や 60 代の年齢の利用者層において多く（ $p < .01$ ）回答された。その満足要素とは「喫煙マナー」（a16）や「ゴミの持ち帰りのマナー」（a20）、「山小屋の対応」（a21）、「同行した家族や友人との語らい」（a23）、「トイレチップの支払に関するマナー」（a27）である。富士山における利用者数と利用者属性間の相関（表 4-3-3）で見たように、年齢が高い人ほど富士山の利用回数が多くなる傾向があり、50 代や 60 代の利用者はこれまでの経験から富士山の利用のマナーは良かったと判断したと考えられる³⁾。

④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素のすべてで、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素と同様に、年齢が 20 代の年齢の利用者よりも 30～50 代の利用者において多く（ $p < .01$ ）回答された。それは、「登山道」（a7）や「説明板・標識」（a8, a22）、「トイレ」（a12）、「施設」（a15）である。一方、不満要素（表 4-3-7）についても見てみると 20 代の年齢が多く回答する要素は一つとして無いことから、もともと 20 代利用者は 30～50 代の利用者よりも情報や施設に対する期待が少ないと考えられる。また、利用回数が 4～9 回目の利用者において「登山道がよく整備されていた」（a7）が多く（ $p < .01$ ）回答され、初めての利用者においては少なく（ $p < .01$ ）回答された。これは、初めての利用者にとっては、富士山の登山道の整備状況は期待を下回ったということである。その他、交通手段がツアーバスの利用者において「トイレがよく整備されていた」（a12）が、利用日数が 2 泊 3 日以上の利用者において「説明板や標識の数が十分だった」（a22）が多く（ $p < .01$ ）回答された。

⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、③、④の満足要素と同様に、20 代の利用者と比較して、50 代と 60 代の年齢の利用者が「ゴミが少なかった」（a5）や「トイレがきれいだった」（a3）を多く（ $p < .01$ ）回答しており、これは③と同様の理由により、それまでの富士山における登山経験から形成された空間の清潔性や快適性に対する期待水準を富士山の空間の現状が上回ったことを表すと考えられる。

一方、①「公園資源の享受」に対する不満要素では、年齢が 70 代の利用者で「ガイドの解説がよくなかった」を多く（ $p < .01$ ）回答した。これは、本来公園資源の享受を助ける役割を持つはずのガイドによって阻害された期待が不満として顕れたと理解できる。

②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素では、男性や 50 代の利用者において

表 4-3-7 利用者属性と不満要素との関係性

		①公園資源の享受 b16	②野趣性・独居性 b14 b17	
性	男		++	
	女		--	
年齢	10代	+		
	20代		--	--
	30代			
	40代			+
	50代		++	+
	60代			
利用回数	初めて		-	
	2~3回		+	
	4~9回			
	10~19回			
	20回~			
グループ人数	1人			
	2人			
	3人以上			
交通手段	マイカー			
	公共交通			
	ツアーバス			
	その他			
利用日数	1日(日帰り)			
	2日(1泊)			
	3日(2泊)以上			

注)
カイ2乗検定 (Fisher's exact test) とクロス集計の分布の検討により表を作成

++および-- : p < .01, +および- : p < .05

++および+ : 正の相関, --および- : 負の相関

(有効回答数=467)

注) カイ2乗検定 (Fisher's exact test) とクロス集計の分布の検討により表を作成

		③適切な対人関係													
		b 2	b 5	b 7	b10	b11	b15	b18	b20	b22	b24	b26	b28	b29	b30
性	男	+				++					+	+			
	女	-				--					-	-			
年齢	10代														
	20代				-		-					--			
	30代								-	++					
	40代						++	+							+
	50代											++	+		
	60代					++									
利用回数	70代				++				+			+			
	初めて	-		-		--					--				
	2~3回					++		+			++				
	4~9回												+		+
	10~19回														
グループ人数	20回~	+					++				+				
	1人														
	2人									+					
交通手段	3人以上									--					
	マイカー	+				++		++						+	
	公共交通														
	ツアーバス	--				--		--							--
利用日数	その他				+										+
	1日(日帰り)														
	2日(1泊)														
3日(2泊)以上				++	+										

		④円滑に利用できる情報・施設						⑤清潔・快適な空間の利用						
		b 3	b 6	b 8	b13	b19	b25	b27	b 1	b 4	b 9	b12	b21	b23
性	男										+			
	女										-			
年齢	10代													
	20代	++	--		--	--			+					-
	30代	--		--					--	+				
	40代		+	+			++	+						
	50代					+					+			
	60代				++	+					-	+		
利用回数	70代												++	
	初めて	+					++		++		--	++		
	2~3回								--					
	4~9回								--			-		
	10~19回		+											+
グループ人数	20回~													
	1人	-												
	2人			+										
交通手段	3人以上													
	マイカー	+						-						
	公共交通							-						
	ツアーバス	-				++	++							
利用日数	その他													
	1日(日帰り)								++	+		+		
	2日(1泊)								--	--		-		
3日(2泊)以上														

「騒々しく感じた」(b14)が多く($p < .01$)回答され、これらの属性の利用者で落ちて登山したいという期待が満たされなかったと考えられる。特に男性については、満足要素においても触れた通り、利用者数や実際の利用状況に対する期待の水準が高く、女性との相対的な関係においてより野趣性・独居性に対する期待が大きいと考えられる。

③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、男性や2~3回目の利用者、マイカー利用者において「団体利用者の団体規模が大きすぎた」(b11)が多く($p < .01$)回答された。これらの属性の利用者にとっては、団体の規模自体が、期待を充足する可否かの評価軸となると考えられる。また、富士山の利用者の中で約半数を占める20代の利用者比べて、30~60代の利用者において挨拶(b10)やトイレチップのマナー(b15)、喫煙マナー(b22)、登山に対する準備不足(b26)の不満要素が多く($p < .01$)回答された。これらの要素については、満足要素の同様の項目においても20代の利用者において回答が少なく($p < .01$)、20代の利用者では適切な対人関係に対する期待がもともと少ないと考えられる。また、利用回数が初めての利用者において「挨拶を返してくれない人がいた」(b10)や「登山道をふさいでいる団体利用者がいた」(b24)が少なく($p < .01$)回答され、2~3回目の利用者において同様の要素が多く($p < .01$)回答された。これは、利用回数が増えると実際の利用状況に対する期待の現実的な水準が形成されるものとも考えられる。しかし、4回目以上の利用者において多く回答されることがないことから、経験豊かな利用者が現実の利用状況に合わせて期待の水準を低下させている可能性が示唆される。さらに、2人の利用者において喫煙マナー(b22)が多く($p < .05$)回答されるのに対し、3人以上で喫煙マナーが少なく($p < .01$)回答された。その他、マイカー利用者において「団体利用者の団体規模」(b11)や「団体利用者のおしゃべり」(b18)が多く($p < .01$)回答されるのに対し、ツアーバス利用者において同要素が少なく($p < .01$)回答された。これはマイカーを利用して富士山を訪れる比較的小さいグループの利用者の期待が大きいグループによって阻害されることを表すと考えられる。

④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素では、年齢が20代の利用者において「登山道が整備されていなかった」(b3)が多く($p < .01$)回答され、30代の利用者においては同要素が少なく($p < .01$)回答された。これは20代の利用者にとっては、富士山の登山道の整備状況に対する期待を実際が下回っていたことを示す。また反対に、他の年齢層に比べて、20代や30代の年齢の利用者において「トイレ」(b6, b19)や「説明板や標識」(b8)、「休憩場所」(b13)、「トイレの待ち時間」(b19)が少なく回答された。これらは、満足要素でも触れたとおり、20代や30代の利用者で多く回答されることも少なく回答されることもないことから、やはり20代や30代の利用者は情報や施設に対する期待が少ないと言える。また、利用回数が初めての利用者

において「トイレチップの使いみちが示されていないかった」(b25)が多く($p < .01$)回答され、初めての利用者が富士山を利用した際に、情報を得たいという期待が満たされなかったと考えられる。さらに、交通手段がツアーバスの利用者において、「トイレの待ち時間が長かった」(b19)や「トイレチップの使いみちが示されていないかった」(b25)が多く($p < .01$)回答された。ツアーバスの利用者は同乗した乗客とほぼ同様の登山行程をとると考えられることから、トイレの施設が自らが所属する団体の利用によって一時混雑し、円滑に利用できなかったことが不満となったと推測できる。

⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素では、年齢が20代の利用者や利用回数が初めての利用者、利用日数が1日(日帰り)の利用者において「トイレが汚かった」(b1)が多く($p < .01$)回答された。これらの属性の利用者は相対的に富士山に滞在する時間が短く、富士山における経験も相対的に少ないと考えられる。こうした経験の少ない利用者の富士山のトイレに対する期待は、他の利用者層に比較して大きく、実際のトイレの清潔性はその期待を下回ったと考えられる。また、類似する要素として、「トイレが臭かった」(b12)が多く($p < .01$)回答された。さらに、初めての利用者において「山小屋が多すぎた」(b9)が少なく($p < .01$)回答され、70代の利用者において「山小屋の営業看板があった」(b21)が多く($p < .01$)回答された。

以上、富士山の利用者属性と満足要素および不満要素の関係性を把握し、年齢や利用回数の属性において、満足と不満の回答の傾向に顕著な差異が見られた。①「公園資源の享受」に対する期待に関わる要素では、50代や60代の高い年齢層において多く回答される満足要素や不満要素が見られた。また、②「野趣性・独居性」に対する期待は男性の方が大きく、③「適切な対人関係」に対する期待水準は20代の利用者で小さかった。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待は、20代の年齢の利用者で小さく、⑤「清潔・快適な空間」に対する期待については、富士山における経験が相対的に少ない利用者で全般的に期待が小さく、唯一、トイレの清潔性に対する期待が高いこと、などが明らかとなった。

(4) 利用者数の多寡と満足および不満の要素の関係性

利用者数の多寡が利用者の個々の期待に対してどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするため、利用の集中が見られた7月21日(月・祝)、7月27日(日)、8月3日(日)の3調査日と、利用の集中が見られなかった8月26日(火)、8月27日(水)、8月28日(木)の3調査日とで、利用者が回答する満足要素と不満要素の回答数の差異について分析を行った。表4-3-8および表4-3-9はそれぞれ混雑日と閑散日における各要素の回答数であり、カイ2乗検定(Fisher's exact test)によって有意に

表 4-3-8 混雑日および閑散日における富士山利用者の満足要素

No. 満足要素	混雑日	閑散日	x ² 検定
	(7月21, 27日, 8月3日) 回答者=178	(8月26, 27, 28日) 回答者=183	
①「公園資源の享受」に対する満足要素			
a 1 空気がきれいだった	114	104	
a 2 御来光を仰ぐことができた	79	49	**
a 4 自然がよく守られていた	45	39	
a 6 ガイドの案内により富士山を楽しめた	40	35	
a 9 登山途中の風景を楽しむことができた	74	86	
a10 長年の夢がかなった	64	53	
a13 足腰がきたえられた	83	87	
a14 富士山の雄大さを実感することができた	119	130	
a17 富士山の自然に触れることができた	90	103	
a19 登りごたえがあった	128	132	
a25 日本一高い山を征服した	104	128	*
a26 富士山頂上からの風景を楽しむことができた	60	47	
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素			
a24 人が少なくよかった	5	31	**
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素			
a11 気持ちのよい挨拶を交わすことができた	47	86	**
a16 喫煙マナーがよかった	43	45	
a18 登山者のまわりの人への気づかいがあった	43	54	
a20 ゴミの持ち帰りが守られていた	64	60	
a21 山小屋の対応が親切だった	54	50	
a23 同行した家族や友人と語らうことができた	62	80	
a27 トイレチップがきちんと支払われていた	48	42	
a28 登山道のすれ違いのマナーが守られていた	31	58	*
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素			
a 7 登山道がよく整備されていた	70	39	**
a 8 説明板や標識の内容が良くできていた	37	26	
a12 トイレがよく整備されていた	24	25	
a15 施設がよく整備されていた	21	14	
a22 説明板や標識の数が十分だった	23	16	
⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素			
a 3 トイレがきれいだった	20	16	
a 5 ゴミが少なかった	74	70	

注) **: p < .01, *: p < .05 (カイ2乗検定 Fisher's exact test) (有効回答数=361)
7月21, 27日, 8月3, 26, 27, 28日の利用者数はそれぞれ、5574, 6147, 9763, 1819, 1244, 1109人

差があると判断されたものには、*を付した。

その結果、①「公園資源の享受」に対する満足要素のうち、「御来光を仰ぐことができた」(a2)が閑散日において少なく(p < .01)回答された。このことは、利用者数の多寡による影響や、利用者属性との関連、利用者が実際に頂上に到達した時刻の天候との関わりが考えられる。富士吉田市富士山課資料「富士山登山者調べ」(2003年)によると、調査日当日の六合目の天候は、混雑日3日間で順にそれぞれ、曇・霧、霧、晴・曇であり、閑散日3日間で順にそれぞれ曇、雨・曇、霧・晴となっており、この資料が頂上にも当てはまるとすれば、午前中に頂上が晴れたのは混雑日のわずか1日のみである。また、利用者属性間の関係性から年齢と利用者数には相関(表 4-3-3; 相関係数=0.295)があり、若年層は利用者数の少ない閑散日に利用する傾向があるが、利用者属性と満足要素の関係性(表 4-3-6)から、これらの利用者は有意に御来光の満足要素が少ない。しかし、閑散日において御来光を見る人が少なくなる理由を利用者が少ない利用状況や属性に求めるのは難しい。従い、混雑日におけるこの満足要素の増加は天候による影響であり利用者数の多寡による影響ではないと考えられた。一方、「日本一高い山を征服した」(a25)は混雑日において少なく(p < .01)回答され、これは多数の利

表 4-3-9 混雑日および閑散日における富士山利用者の不満要素

No. 不満要素	混雑日	閑散日	χ ² 検定
	(7月21, 27日, 8月3日) 回答者=178	(8月26, 27, 28日) 回答者=183	
①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素			
b16 ガイドの解説がよくなかった	2	1	
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素			
b14 騒々しく感じた	37	13	**
b17 人が多すぎた	113	26	**
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素			
b 2 休憩場所を占拠する団体利用者がいた	24	23	
b 5 長い人の列ができて追い越しができなかった	71	40	**
b 7 登山道からはずれる人がいた	20	15	
b10 挨拶を返してくれない人がいた	12	13	
b11 団体利用者の団体規模が大きすぎた	40	24	*
b15 トイレチップを払わない人がいた	28	20	
b18 団体利用者のおしゃべりがうるさかった	23	10	*
b20 歩行ペースを弱い人に合わせない人がいた	19	11	
b22 喫煙マナーの悪い人がいた	30	17	*
b24 登山道をふさいでいる団体利用者がいた	27	13	
b26 登山に対する準備が不足している人がいた	31	26	
b28 ゴミを持ち帰らない人がいた	31	23	
b29 団体利用者のリーダーが団体を管理できないでいた	12	3	*
b30 登山道のすれ違いのマナーが守られていなかった	16	4	**
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素			
b 3 登山道が整備されていなかった	10	39	**
b 6 トイレが少なかった	54	31	*
b 8 説明板や標識の数が少なかった	48	42	
b13 休憩場所が少なかった	35	29	
b19 トイレの待ち時間が長かった	65	11	**
b25 トイレチップの使いみちが示されていなかった	31	19	*
b27 説明板や標識の内容がわかりにくかった	20	27	
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素			
b 1 トイレが汚かった	91	89	
b 4 ゴミが捨てられていた	65	67	
b 9 山小屋が多すぎた	11	11	
b12 トイレが臭かった	112	111	
b21 山小屋の営業看板があった	10	4	
b23 施設が整備されすぎていた	2	4	

注) ** : p < .01, * : p < .05 (カイ2乗検定 Fisher's exact test) (有効回答数=361)
7月21, 27日, 8月3, 26, 27, 28日の利用者者数はそれぞれ、5574, 6147, 9763, 1819, 1244, 1109人

用者数の存在によって「公園資源の享受」に対する期待が阻害されたものと考えられる。

②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、「人が少なくよかった」(a24)が混雑日において少なく (p < .01) 回答された。人の少なさに関わるこの満足要素は利用者数との関連が深い指標と考えられ、多数の利用者数の存在によって「野趣性・独居性」に対する期待が阻害されたと考えられる。

③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では、「気持ちのよい挨拶を交わすことができた」(a11) や「登山道のすれ違いのマナーが守られていた」(a28) の要素が混雑日において少なく (p < .01) 回答された。登山道のすれ違いのマナーは、富士山の登山において利用者が持つ具体的な仮想行動と関わりがあり、多数の利用者のすれ違いにおいてマナーが低下したことにより、閑散日においては充足される期待が混雑日では充足されなかったと考えられる。

④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では、「登山道がよく整備されていた」が混雑日において多く (それぞれ p < .01, p < .05) 回答され、混雑日においてなぜ増加するのかその理由を見出せない。満足の特性については既に、高い満足度と

なる恒常的傾向や、現状への肯定指向のあること⁴⁾が言われていることから、富士山における利用体験の肯定志向が可能性として指摘できる。

⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、混雑日あるいは閑散日に多く回答される要素は無かった。

一方、①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素においても、混雑日あるいは閑散日に多く回答される要素は無かった。

②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素では、混雑日において「騒々しく感じた」(b14)や「人が多すぎた」(b17)が多く($p < .01$)回答された。これらのことから、富士山利用者が持つ「野趣性・独居性」に対する期待が、多数の利用者の存在によって阻害されたといえる。

③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、混雑日において「長い人の列ができて追い越しができなかった」(b5)や「登山道のすれ違いのマナーが守られていなかった」(b30)などの実際のフィールドにおける仮想行動と関わりのある要素が多く($p < .01$)回答された。これらは、適切な対人関係の中で追い越しやすれ違い、登山道の通過を行いたいという、利用者自身が持つ仮想行動に関わる期待が含まれており、こうした期待が多数の利用者の存在によって阻害されたものとみることができる。その他、「団体利用者の団体規模」(b11)や「団体利用者のおしゃべり」(b18)、「喫煙マナーの悪さ」(b22)、「団体利用者のリーダーの管理能力の不足」(b29)は、仮想行動を伴わない要素であるが、混雑日において多く($p < .05$)回答された。これらについても、多数の利用者の存在によって阻害された期待と考えられる。

④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素では、「トイレが少なかった」(b8)や「トイレの待ち時間が長かった」(b19)、「トイレチップの使いみちが示されていないなかった」(b25)が混雑日に多く($p < .01$ あるいは $p < .05$)回答された。トイレの利用は人間の生理に関わる要素であり、混雑した状況下にあつて、利用の円滑性が阻害されると意識される不満といえる。一方、「登山道が整備されていなかった」(b3)は混雑日において少なく回答され、この要素がなぜ混雑日において減少するのかは明確な理由を見出せない。混雑日において登山道の満足要素が多く回答された(a7)ように、可能性として富士山における利用体験の肯定志向を指摘できる。

⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素では、混雑日あるいは閑散日に多く回答される要素は無かった。

以上、利用者数の多寡と満足および不満要素の関係性を把握し、多数の利用者数によって、利用者の多くの期待が阻害されていた。特に、③適切な対人関係の構築に対する期待や、④情報や施設の円滑な利用に対する期待の中でも、利用者が持つ仮想行動に関わる期待が阻害されていた。一方、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待については、

利用者数の多寡との関係性は見られなかった。

第4節 本章のまとめ

(1) 尾瀬ヶ原における利用者の属性と意識構造

尾瀬ヶ原における利用者の属性と意識構造として以下のようなことを整理し、明らかにした。

- ・ 利用者の属性は、女性が過半数であること、50代が半数近くを占めていること、関東圏からの来訪者が多いことを示した。また、利用回数は初めての人が3割強、グループ人数では3人以上を構成する割合が最も高かった。さらに、交通手段はマイカー率が約7割を占め、滞在日数は日帰りの来訪者が約半数を占めた。
- ・ 利用者の属性および当日の利用者数、満足（評価点）、混雑意識（評価点）の関係性から、利用者の年齢と利用回数、グループ人数と利用日数の間に正の相関があること、年齢の高い人は尾瀬の利用回数が多いこと、グループが大きくなると利用日数が多くなることが明らかとなった。また、利用回数と満足（評価点）において負の相関、利用日数と満足（評価点）において正の相関が見られた。さらに、利用者数と混雑意識において正の相関、年齢および満足と混雑意識において負の相関が認められた。
- ・ 尾瀬ヶ原の利用者に見られた満足要素から、尾瀬ヶ原の利用者の期待うち、特に①公園資源の享受に対する期待が充足され、満足となっていた。また、不満要素から、予想を超える利用者数によって②「野趣性・独居性」が欠如し、植物の名前のように自然に関わる情報を獲得せず④情報や施設の円滑な利用に対する期待が阻害され、不満として顕在化していた。その他、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待は概ね満たされていた。
- ・ 利用者属性と満足要素および不満要素の関係性から、初めての利用者を除いて、①「公園資源の享受」に対する期待は同程度であることが示された。また、②「野趣性・独居性」に対する期待については、性別や利用回数、交通手段によって差異があること、③「適切な対人関係」に対する期待は、利用回数やグループ人数、交通手段、利用日数によって差異があることが分かった。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待は、年齢や利用回数、交通手段、利用日数によって違いがあること、⑤「清潔・快適な空間」に対する期待では、性別や年齢、交通手段によって差異があることが明らかとなった。
- ・ 利用者数の多寡と満足要素の関係性から、多数の利用者の存在は、①「公園資源の享受」に対する期待の中でも仮想行動に類する期待に影響を及ぼすことや、利用状況に合わせて②「野趣性・独居性」に対する期待のうち、利用者数に関わる期待（予想）の大きさを変化させている可能性があることが明らかとなった。また、多数の利用者の存

在は、良好な対人関係（③「適切な対人関係」）を阻害することや、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待については、混雑日においてその期待が増加したにもかかわらず満たされなかったと考えられる。さらに、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する期待では、多数の利用者の存在によって意識が他へ分散され、不満として顕在化しない可能性のあることが明らかとなった。

（２）富士山における利用者の属性と意識構造

富士山における利用者の属性と意識構造として以下のようなことを整理し、明らかにした。

- ・ 利用者の属性は、男性が6割強を占め、20代の年齢層が約半数、誘致圏はほぼ全国を網羅し、特に関東からの利用者が7割を占めた。また、初めての利用者が約7割、グループ人数は3人以上が6割強、交通手段はマイカーが最も多く4割強、利用日程は1泊2日が8割強であった。

- ・ 利用者の属性および当日の利用者数、満足（評価点）、混雑意識（評価点）の関係性から、年齢と利用者数、利用回数、利用日数との間に正の相関、グループ人数と利用日数に負の相関、利用者数と混雑意識の間に正の相関、利用回数と満足の間には負の相関、年齢と混雑意識の間で正の相関が見られた。

- ・ 富士山利用者の満足要素および不満要素から、富士山利用者の満足要素は、その多くが①「公園資源の享受」に対する期待の充足によって生じ、実際の利用体験を通し富士山のスケールや自然が満足となっていた。また、②「野趣性・独居性」に対する期待は、調査日8日間ではそれほど充足されず、③「適切な対人関係」に対する期待では、交流が重要な満足要素となっていた。しかし、③適切な対人関係の構築に対する期待のうち、利用者が持つ仮想行動に伴う期待が阻害された場合には不満となっていた。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待はもともと少なく、⑤「清潔・快適な空間」に対する期待では、トイレの清潔性や快適性が期待されていたにもかかわらず、満たされなかったことが明らかとなった。

- ・ 利用者属性と満足および不満の要素との関係性から、年齢や利用回数の属性において、満足と不満の回答の傾向に顕著な差異が見られた。①「公園資源の享受」に対する期待に関わる要素では、50代や60代の高い年齢層において多く回答される満足要素や不満要素が見られた。また、②「野趣性・独居性」に対する期待は男性の方が大きく、③「適切な対人関係」に対する期待水準は20代の利用者で小さかった。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する期待は、20代の年齢の利用者で小さく、⑤「清潔・快適な空間」に対する期待については、富士山における経験が相対的に少ない利用

者で全般的に期待が小さく、唯一、トイレの清潔性に対する期待が高いこと、などが明らかとなった。

・ 利用者数の多寡と満足および不満の要素の関係性から、多数の利用者数によって、利用者の多くの期待が阻害されていた。特に、③適切な対人関係の構築に対する期待や、④情報や施設の円滑な利用に対する期待の中でも、利用者が持つ仮想行動に関わる期待が阻害されていた。一方、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待については、利用者数の多寡との関係性は見られなかった。

補注および引用・参考文献

- 1) 環境庁自然保護局 (1986) : 湿原等特定自然地域保全方策検討調査報告書, 175pp.
- 2) 尾瀬保護財団 (2001) が管理するセンサー式の自動カウンターによって把握された利用者数による
- 3) 小倉厚他 (2001) : 深田クラブに聞く日本百名山の今-登山者のモラル周知と山岳環境の整備を : 岳人 649, 85-90 によると、深田クラブでは日本百名山の自然環境に関する調査報告を行い、富士山のゴミの状況は良くなったという報告を行っている。
- 4) 小林昭裕 (2004) : 自然公園での利用体験の質を把握するための概念及び手法上の問題点に関する一考察 : ランドスケープ研究 67(5), 591-596

第5章 利用者数の多寡が利用者に及ぼす負の影響

第1節 本章の目的と構成

本章の目的は、自然公園における利用者数の多寡が利用者に及ぼす負の影響を明らかにすることである。そこで、第2節においては、負の影響を捉えるための前提として、二つの自然公園利用者の意識の共通性と差異性の把握を行う。また、第3節では、第4章および本章第2節で把握した利用者の意識構造を参照しつつ、利用者数の多寡が及ぼす負の影響の一側面として、利用者の期待への影響を把握する。さらに、第4節および第5節においては、他の側面としての混雑意識と混雑不快感の生起を把握する。第6節では、得られた知見をもとにして、思索的検討によって、多数の利用者数による期待阻害の概念的整理を行う。第7節では、利用者の期待を充足するための管理施策を整理した上で、本研究で取り上げた二つの自然公園において、利用者数が利用者の心理に与える負の影響を取り除くために有効と考えられる管理施策を検討する。最後に、第8節において、第5章を小括する。

第2節 二つの自然公園の利用および利用者意識の共通性と差異性

(1) 自然公園としての尾瀬ヶ原と富士山

時間消費型の利用の自然公園として取り上げた尾瀬ヶ原と、目的達成型の利用の自然公園として取り上げた富士山は、利用形態の軸によって対極をなす自然公園として分類しており、その位置づけが違う。その一方で、現在の利用のされ方やわが国の自然公園における重要性、過去から現在までの歴史的な問題の中に共通性や差異性を見出すことができる。

まず、現在の利用のされ方としては、利用する空間が限定的ということである。尾瀬ヶ原では木道という限定されたルートを歩き、富士山においても登山道という限定されたルートを歩くということである。これらは、それぞれの自然公園において生じた自然保護の必要性や、信仰登山の対象にはじまる歴史から、必然的に作り出された利用の形態である。

また、自然公園史から両公園をみた場合に共通する事実も多い。明治44(1911)年の第二十七回帝国議会に「国設大公園設置ニ関スル建議案」が提出され、富士山を中心とした国立公園構想が立ち上がった(大井道夫(1986):視点-富士箱根伊豆国立公園五十周年にあたって:国立公園438, p.5)その翌年には、同じく帝国議会において「日

光ヲ国立公園トナス請願」が採択され、両国立公園には早くから国立公園構想が立案されたことである。また、実際に国立公園に指定されたのは、尾瀬ヶ原が昭和 9（1934）年であり、富士山が昭和 11（1936）年であり、わが国の自然公園の中でも初期に指定された国立公園といえる。戦後は、厚生省が国際観光地と力を入れる自然公園として再出発し、初めての国立公園管理員 6 名のうち 2 名が日光湯本と河口湖に配属されるなど、昭和初期の自然公園行政にとっても両国立公園の重要性は高かったと考えられる。

さらに、歴史的な問題として尾瀬ではアヤマ平などの踏みつけによる植生破壊が問題となり、富士山ではゴミや尿尿の問題が白い川と称されるなど、これらは社会問題として扱われてきた。尾瀬と富士山で生じた問題が社会問題に発展するということは、二つの自然公園がそれだけ国民に認知され、植生が破壊されたことに対する不満やゴミやトイレに対する不満もまた社会的に認知されたことの証左である。現在の尾瀬ヶ原と富士山における利用は、両公園ともに 1990 年代に入ってから漸減傾向にあり、尾瀬では年間約 30 万人が利用し、富士山で年間約 25 万人が頂上へ到達している。両公園ともに週末あるいは連休の初日あるいは中日に利用の集中が見られ、時間的な利用の集中の様には類似する点がある。また、両公園ともに、鳩待峠口や吉田口などの登山口で利用の集中が見られ、利用の空間的集中も見られる。その他、木道が総延長 13.4km 敷設された尾瀬ヶ原の公園空間に、多い時で一日に約 1 万人が入山することや、吉田口（五合目）から富士山頂上までの 15.4km の登山道を一日に 1 万人近い登山者が登るという利用の集中は空間的スケールを考慮しても、類似した利用状況と言える。

反対に、現在の利用のされ方で異なる点は、尾瀬ヶ原が 5 月から 10 月までの約半年間に利用者を受け入れるのに対し、富士山では 7 月と 8 月の 2 ヶ月間であり、富士山の方が利用期間が短いということである。

また、自然公園としての歴史では、尾瀬ヶ原はわが国の自然保護発祥の地でありながら、登山対象としての歴史は浅く、一方の富士山は長い歴史の中で信仰の山としてだけでなく、実際に信仰登山を行う対象として位置づけられてきた。このように、登山対象としての自然公園の観点からは二つの自然公園には差異が見られる。さらに、国立公園の区域決定の意図には大きな違いがあり、尾瀬の盆地内部は、場の景観としての展望風景の保護を意図して区域決定され、富士山は、視対象としての展望風景の保護を意図して区域決定されている^{1) 2)}。つまり、富士山の場合は区域決定の際に登山という利用行為が想定されていない点が大きく異なる。

これまでに浮上した問題では、社会に与えた影響など問題の社会性や重要性には共通性が見出せるが、尾瀬ヶ原では湿原の保護を基調として問題が取り沙汰されてきたのに対し、富士山では、ゴミや尿尿など利用によって生じる問題が、山体や動植物の保護のように自然保護と関係づけられることは少なかったように思われる。

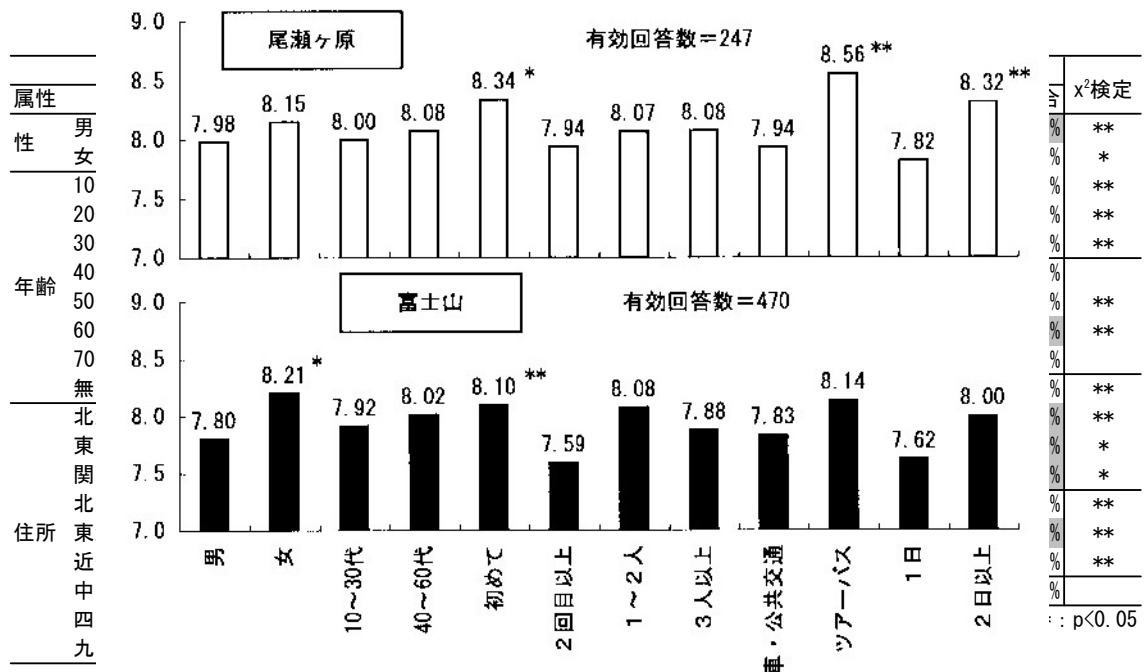


図 5-2-1 尾瀬ヶ原、富士山における満足評価点

(2) 利用者属性

尾瀬ヶ原の利用者属性（表 5-2-1）は、富士山と比較して、女性の割合が高く、年齢が 40 代から 60 代を中心とする利用者である。一方の富士山は男性の割合が高く、10 代から 30 代を中心とする利用者層である。また、両自然公園ともに誘致圏は全国に広がっているが、相対的に尾瀬ヶ原の方が関東からの利用者を受け入れているのに対し、富士山では近畿からの利用者が多い。これは両公園の立地による差異と考えられる。さらに、利用回数では、尾瀬ヶ原において複数回以上のリピーターが多く約 7 割を占めているのに対し、富士山では、初めての利用者が多い。グループ人数では、尾瀬ヶ原において 2 人の利用者が多く、富士山においては 3 人以上のグループを構成する割合が高い。交通手段では、尾瀬ヶ原においてマイカー利用者が多く、富士山で公共交通やツアーバスの利用者が多い。利用日数では、尾瀬ヶ原において日帰り（1 日）の利用と 1 泊 2 日の利用がそれぞれ 5 割と 4 割を占めるのに対し、富士山においては典型的に 1 泊 2 日の利用となっている。

(3) 利用者数および利用者属性間の関係性

利用者数と利用者属性間の関係性から、共通する特性として、年齢が高い利用者は利

利用回数も多く、利用回数が多い利用者は満足（評価点）が低かった。また、利用者数の多い日に公園に訪れた利用者は、混雑意識評価点が高かった。一方、尾瀬ヶ原だけに見られる特性として、満足評価点と混雑意識に負の関連性が見られ、富士山ではそのような関連性を把握することはできない。富士山のみに見られる特性としては、年齢が高い人ほど利用日数が多くなることが分かった。その他、尾瀬ヶ原においてグループ人数と利用日数の間に正の相関があるのに対し、富士山では負の相関が見られ、正反対の特性を把握した。

二つの自然公園では利用者属性に差異が見られることから、属性と満足評価点および混雑意識評価点の関連性を把握するために、両公園で特徴的に見られる属性および利用者群をグループ化し、二つのカテゴリーに区分した。その結果、分析指標となるカテゴリーは男性と女性、10代から30代および40代から60代の年齢、利用回数では初めての利用者と2回目以上の利用者、交通手段はマイカーおよび公共交通の利用者とツアーバスの利用者、利用日数は1日（日帰り）利用者と2日以上の利用者に区分された。これらのカテゴリー別に公園利用に対する満足評価点および混雑意識評価点の分析を行った。

図 5-2-1 は二つの自然公園における利用者の満足評価点の平均値（10点満点）を表している。尾瀬ヶ原と富士山でともに初めての利用者の満足評価点が高くなっている（尾瀬ヶ原： $p < .05$ 、富士山： $p < .01$ ）。また、尾瀬ヶ原においては交通手段としてツアーバスを用いた利用者（ $p < .01$ ）や利用日数が2日以上にわたる利用者（ $p < .01$ ）の満足評価点が高く把握された。さらに、富士山においては女性の利用者（ $p < .05$ ）の満足評価点が高いことが明らかとなった。これは、初めての利用者は文字通り利用経験が無く、自然公園を利用する際に期待を持っていなかったため、実際の利用体験が高く評価されたことによると考えられる。また、尾瀬ヶ原におけるツアーバスの利用者は団体利用者に対する不満が少なく（B9）、期待に交流（A8）が位置づけられるため、相対的に小さなグループ人数を構成する一般利用者に比べて、より良好な対人関係を構築できたことによると考えられる。さらに、尾瀬ヶ原において、利用日数が長い利用者は、滞在時間が長いことによって公園資源を享受できたこと（A1）や、良好な対人関係を築くことができたことによって満足評価点が高くなったと考えられる。富士山の女性の利用者の満足評価点が高い理由としては、男性と比較して、①公園資源の享受に対する期待や、②野趣性・独居性の保持に対する期待、③適切な対人関係の構築に対する期待が一般的に充足されたことによると考えられる。

表 5-2-2 尾瀬ヶ原と富士山における共通の要素

■尾瀬ヶ原における満足要素		■富士山における満足要素	
①「公園資源の享受」に対する満足要素			
A10 美しい風景に満足した	5.64 **	a9 登山途中の風景を楽しむことができた	4.52
A12 自然がよく守られていた	4.58	a4 自然がよく守られていた	4.59
②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素			
A5 人が少なく静かだった	4.52	a24 人が少なくよかった	4.53
③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素			
A8 一緒に来た友と語り合うことができた	4.77	a23 同行した家族や友人と語り合うことができた	4.53
A9 すれ違いの挨拶で気持ちよかった	4.58	a11 気持ちのよい挨拶を交わすことができた	4.59
④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素			
A4 説明板や標識が良く出来ていた	5.83	a8 説明板や標識の内容が良くできていた	5.70
A14 登山道がよくできていた	6.42 **	a7 登山道がよく整備されていた	5.73
A15 説明板や標識の数が十分だった	6.42 **	a22 説明板や標識の数が十分だった	5.73
A20 施設がよく整備されていた	5.83	a15 施設がよく整備されていた	5.73
⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素			
A3 トイレがきれいだった	5.83	a トイレがきれいだった	5.73
A17 ゴミが少なかった	5.83	a ゴミが少なかった	5.73
■尾瀬ヶ原における不満要素			
②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素			
B8 騒々しく感じた	5.83	b 騒々しく感じた	5.73
B16 人が多すぎた	5.83	b17 人が多すぎた	5.73
③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素			
B23 挨拶を返してくれない人がいた	5.83	b10 挨拶を返してくれない人がいた	5.73
B24 長い人の列が出来て追い越しができなかった	5.83	b5 長い人の列が出来て追い越しができなかった	5.73
④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素			
B3 トイレが少なかった	5.83	b6 トイレが少なかった	5.73
B13 トイレの待ち時間が長かった	5.83	b19 トイレの待ち時間が長かった	5.73
B14 説明板や標識の数が少なかった	5.83	b8 説明板や標識の数が少なかった	5.73
B15 登山道が歩きにくかった	5.83	b3 登山道が整備されていなかった	5.73
B29 説明板や標識の内容が分かりにくかった	5.83	b27 説明板や標識の内容が分かりにくかった	5.73
⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素			
B7 施設が整備されすぎていた	5.83	b23 施設が整備されすぎていた	5.73
B12 ゴミが落ちていた	5.83	b4 ゴミが捨てられていた	5.73
B28 トイレが汚れていた	5.83	b1 トイレが汚かった	5.73

図 5-2-2 は二つの自然公園における利用者の混雑意識評価点の平均値（10 点満点）である。有意な差異として捉えられたのは年齢別の評価点であり、尾瀬ヶ原においては 10 代から 30 代の利用者の評価が高い（ $p < .01$ ）のに対し、富士山においては 40 代から 60 代の利用者の評価が高く（ $p < .01$ ）、両者で違う傾向を示した。この理由として、二つの公園において混雑を感じた年代がそれぞれの公園利用者の中で少数派であり、マイノリティの心理³⁾を捉えたものとも理解されるが、明確な関係性を見出すにはまだ検討の余地がある。また、グループ人数別では尾瀬ヶ原、富士山ともに 3 人以上のグループにおいて混雑に対する意識が高い評価点となっていることが明らかとなった（但し、 $p > .05$ ）。これは、3 人以上のグループを構成する利用者は同一、同様の行動をとる必要があることから、同一グループとの対人関係によって生じる影響を受けやすいことによると考えられる。

(4) 満足要素および不満要素

尾瀬ヶ原と富士山における利用者の満足および不満要素の中に共通の要素があることから、二つの自然公園の利用者意識の差異を明らかにする観点から、特に比較可能な

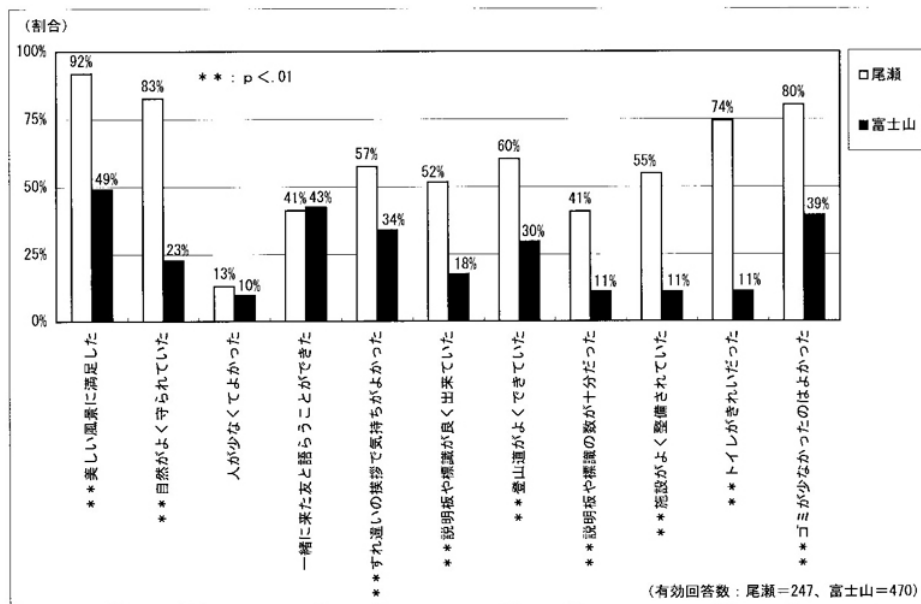


図 5-2-3 尾瀬ヶ原と富士山における利用者の満足要素の比較分析図

共通の要素について、比較分析を行った。比較を行う要素は表 5-2-2 の通りであり、11 項目の満足要素、12 項目の不満要素である。

図 5-2-3 は尾瀬ヶ原と富士山における利用者の満足要素の比較分析図である。棒グラフの高さは、項目化された満足要素について「そう思う」と回答した被験者の割合を表している。②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素の「人が少なくてよかった」(A5, a24) と、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素の「一緒に来た友と語り合うことができた」(A8, a23) の要素では有意な差が見られず、その他の全ての要素で尾瀬ヶ原の利用者の回答数の割合が高かった ($p < .01$)。このことは、利用者属性（母集団）の違う二つの自然公園において、利用者の「人の少なさ」や「交流」に対する期待の充足が、同程度で行われたことを表すと考えられる。また、その他の二つの自然公園に共通する期待では、尾瀬ヶ原で有意に多く充足されたとみることができる。

また、図 5-2-4 は同様に、不満要素の比較分析図である。満足要素の比較結果とは反対に、全般的に、富士山において不満要素が多く把握され、特に③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素の「長い人の列ができて追い越しができなかった」(B24, b5) や④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素の「トイレが少なかった」(B3, b6)、「トイレの待ち時間が長かった」(b13, b19)、「説明板や標識の数が少なかった」(B14, b8)、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素の「ゴミが捨てられていた」(B12, b4)、「トイレが汚かった」(B28, b1) において顕著な差 ($p < .01$) が見られた。これは、尾瀬ヶ原に比べて富士山の利用者の期待が充足されなかったことを意味する。一方、尾瀬ヶ原において相対的に多い不満要素があることも明らかとなった。ま

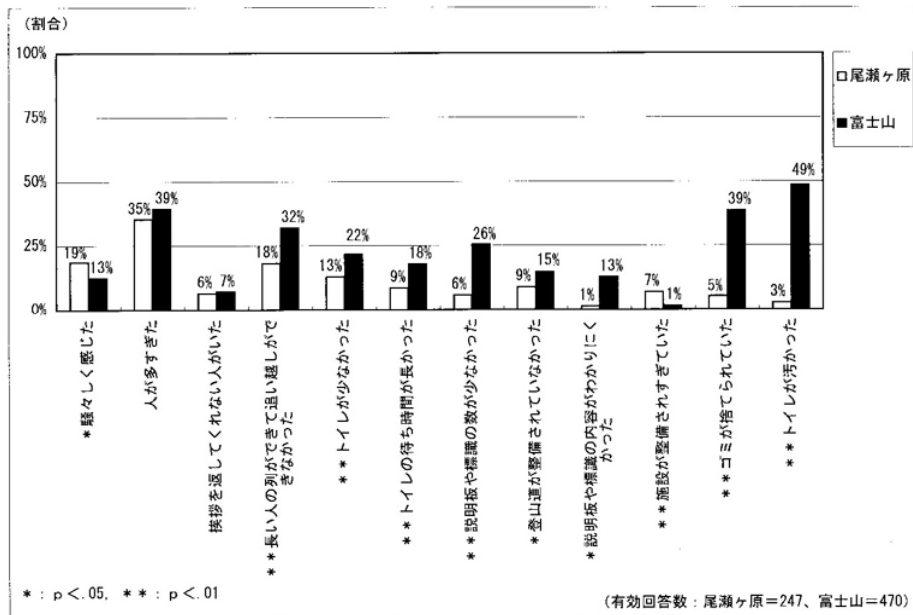


図 5-2-4 尾瀬ヶ原と富士山における利用者の不満要素の比較分析図

ず、「施設が整備されすぎていた」(B7, b23) は件数が少ないものの、富士山利用者の不満要素よりも相対的に多い ($p < .01$)。この要素は満足要素の比較分析において「施設がよく整備されていた」(A20, a15) の項目として把握されており、富士山よりもその回答数が多い。このように、施設整備に対する満足と過剰整備に対する不満の一見相反する期待が尾瀬ヶ原において把握される理由として、尾瀬ヶ原では利用者が期待する施設整備の程度の幅 (レンジ) が狭いことに起因すると考えられる。このことから、尾瀬ヶ原においては、どのくらいの施設整備が利用者の期待の水準となっているのかを明らかにしていく必要性についても考えられた。また、尾瀬ヶ原においては「騒々しく感じた」(B8, b14) 利用者が相対的に多く ($p < .05$)、富士山よりも野趣性や独居性を求める自然公園利用者の割合が高いことが明らかとなった。

(5) 利用者属性と満足要素、不満要素との関係性

第4章において把握したように、両自然公園における顕著な傾向として、まず、男性の方が野趣性や独居性に関わる期待の水準が高く、女性が相対的に低いということが挙げられる。この理由については、他の要素において共通した回答傾向が見出せず、明らかではないが、男性は過剰整備 (B7) や多すぎる山小屋 (b9) を回答するなど、“自然らしさ” や自然公園における“利用のあり方” に関わる意識を持つ可能性を見出せる。一方、女性は、同行者との交流 (A8) や山小屋の対応 (a21) を多く回答していることから、自然公園における人と人との“交流” を期待によって、野趣性や独居性に対する

期待に差異が生じていると考えられる。

次に、若年層の利用者はそれ以上の年齢の高い層に比べて、満足要素だけでなく不満要素についても回答数が少ないということも共通する特性である。若年層の利用者は、山岳利用の経験も浅いと考えられ、こうした知識や経験の少なさが自然公園に対する期待水準の欠如として現れていると考えられる。こうした傾向は、特に富士山において把握され、高い年齢層の利用者が③「適切な対人関係」や④「円滑に利用できる情報・施設」に関わる満足要素と不満要素を多く回答した。この理由としては、知識や経験の差だけでなく、両自然公園の地形的差異が考えられる。富士山は尾瀬ヶ原に比べて利用する登山道の勾配が急であり、体力的な不利が多いと考えられる高い年齢層が、登山中の対人関係や利用施設の円滑性を重視すると考えられる。

(6) 利用者数の多寡と満足要素、不満要素の関係性

まず、多数の利用者が存在する混雑日において、二つの自然公園に共通することは、②野趣性・独居性の保持に対する期待のうち、人の少なさ (A5, a24) に対する期待が充足されず、満足要素が少なく回答されるということである。これは、利用者が自然公園を訪れる前に、どの程度人の少なさを期待するかという基準に関わるものであるが、現実の利用者数の多さがその基準を超えてしまうことによって、期待が充足されなくなる利用者がいるということである。

また、③適切な対人関係の構築に対する期待に関連して、挨拶や親切を含めたマナー (A9, A11, a11, a28,) が低下することであり、満足要素の減少によって把握された。このことは、混雑した状況下においては、対人関係に対する期待が充足されなくなるだけでなく、積極的な不満として現れるということである。

その他、両自然公園に共通して、③適切な対人関係の構築に対する期待のうち、仮想行動に関わる期待が充足されず、不満要素が増加した。具体的には「ゆっくり歩くことができなかった」(B6)、「長い人の列ができて追い越しができなかった」(b5) などであり、こうした仮想行動に関連する期待は、両自然公園における予備調査の結果とあわせ、積極的な不満となると考えられる。また、富士山においてはこの積極的な不満が多く回答され、前項で考察したように、自然公園の地形的差異が示唆される。

第3節 利用者数の多寡が期待に及ぼす影響

多数の利用者の存在が自然公園利用者の個々の満足要素や不満要素に与える影響については、既に尾瀬ヶ原および富士山における利用者数の多寡と満足および不満の要素の関係性によって把握した。しかし、それぞれの期待阻害がすべて利用者の利用体験全体の質を低下させるものではなく、利用者が重視する期待の充足や期待阻害があると考えられる。このことをより明確に把握するためには、利用体験全体に対する評価と関連付けて検討していく必要がある。そこで、多数の利用者数が記録された混雑日と相対的に少数の利用者数が記録された閑散日において、尾瀬ヶ原と富士山における利用者の満足要素と不満要素がどのように満足（評価点）と関連性を持つのか分析を行った（表 5-3-1 および表 5-3-2）。

（1）尾瀬ヶ原

表 5-3-1 は尾瀬ヶ原における閑散日（10月8日）と混雑日（10月7日）の満足要素および不満要素と満足評価点、混雑意識評価点との単相関係数を一覧にしたものである。満足要素は利用体験全体の満足を構成する一部と考えるのが一般的であり、満足要素は満足評価点に正の相関があり、反対に不満要素は負の相関があると考えられるが、ほとんど関連を見出せないものや、係数の正負が逆になっている要素があることが分かる。

まず、閑散日において、満足評価点に対して正に寄与する満足要素は5つであり、その多くが④情報や施設の円滑な利用に対する期待の充足によって見られた。①「公園資源の享受」に対する7つの満足要素では、「見たいと思っていた植物が見られた」（A7）の要素のみが把握された。②「野趣性・独居性」の保持に対する3つの満足要素と、③「適切な対人関係」の構築に対する4つの満足要素では、満足評価点との有意な関係性は見出せなかった。④「円滑に利用できる情報・施設」に対する5つの満足要素では、「施設がよく整備されていた」（A20）や「木道がよくできていた」（A18）、「説明板や標識がよくできていた」（A4）の3要素が満足評価点に正に寄与することが分かった。⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する2つの満足要素の中では、「トイレがきれいだった」（A3）が満足評価点と有意な関係があることが明らかとなった。

一方、満足評価点に負に寄与する不満要素としては3つの要素が把握された。①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素の「思ったほど紅葉がきれいでなかった」（B20）や「目当てにしていた植物が少なかった」（B17）の2要素と、②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素の「人が多すぎた」（B16）である。

表 5-3-1

表 5-3-2

混雑日においては、満足評価点に対して正に寄与する満足要素は閑散日の5から13に増加した。増加する理由として、利用者の現状への肯定志向と、どのような期待の充足を重視するかという利用者の評価基準が明確化したこと、の両者が考えられる。一方、尾瀬ヶ原における利用者数および利用者属性間の分析（表4-2-2）では、利用者数と満足には有意な相関が無いことから、利用者の評価基準が明確化した可能性が高く、これにより満足要素は満足評価点に対してより強く正に寄与するようになったと考えられる。期待の5分類別に見てみると、①「公園資源の享受」に対する満足要素では「見たいと思っていた植物が見られた」（A7）や「美しい風景に満足した」（A10）、「よい写真を撮ることができた」（A19）、「山歩きを楽しめた」（A16）、「自然がよく守られていた」（A12）、「見たいと思っていた動物が見られた」（A2）が把握され、①「公園資源の享受」に対する7つの満足要素のうち6要素が満足評価点と有意な関係を持つことが分かった。②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、「やすらぐことができた」（A13）や「人が少なくてよかった」（A5）、「よい休息ができた」が満足評価点に対し正の相関を持ち、②「野趣性・独居性」の保持に対する3つの要素のすべてが満足評価点と有意な関係を持つことが分かった。③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では、「利用者のマナーが良くて、気持ちがよかった」（A6）や「すれ違いの挨拶で、気持ちがよかった」（A9）がそれぞれ有意な関係を持ち、満足評価点との単相関係数も高い。その他、「出会った人の親切な対応に接することができた」（A11）や「一緒に来た友と語りうることができた」（A8）も有意に正の相関が見出され、すべての要素が満足評価点に対して正に寄与していた。しかし、④情報や施設の円滑な利用に対する期待に関わる満足要素の多くが、閑散日において有意に満足評価点に関連を持つのにに対し、混雑日においては全く関連を持たず対照的な結果となった。また、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、満足評価点と有意な関係を持つ要素は無かった。

表 5-3-3 尾瀬ヶ原の閑散日と混雑日における利用者の期待に対する影響評価

自然公園利用者の期待	満足評価点と有意に正の相関を持つ満足要素	満足評価点と有意に負の相関を持つ不満要素	利用者の満足に対する影響評価
①公園資源の享受	1→6	2→1	×
②野趣性・独居性	0→3	1→2	△
③適切な対人関係	0→4	0→4	△
④円滑に利用できる情報・施設	3→0	0→0 (1要素は満足評価点に対して+に寄与)	○
⑤清潔・快適な空間	1→0	0→2	○

注) 閑散日→混雑日、○=影響あり △=やや影響あり ×=影響なし

一方、同じく混雑日において、満足評価点に対して負に寄与する不満要素は閑散日の3から9に増加した。これも、満足要素と同様に、利用者の評価基準が明確化したことによると考えられ、不満要素は満足評価点に対してより強く負に寄与するようになったと考えられる。①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素の中では、「思ったほど紅葉がきれいではなかった」(B20)が把握された。②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素では、「騒々しく感じた」(B8)や「人が多すぎた」(B16)が満足に対して負に寄与していた。③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では、「ツアー団体の数が多すぎた」(B9)や「ゆっくり歩くことができなかった」(B6)、「ツアー団体のマナーが悪かった」(B26)、「利用者のマナーが悪かった」(B11)が把握され、閑散日に満足評価点に対して有意に関連する要素が一つとして無かったのに対し、混雑日においては多くの要素が満足評価点に負に寄与し、良好な対人関係を構築できないことが満足を低下させていた。④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素では、満足評価点に対して負に寄与するものではなく、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する13の不満要素のうち、「植物の名前が分からなかった」(B22)のみが満足評価点に対して正に寄与していることが明らかとなった。尾瀬ヶ原における利用者属性と不満要素の関係性(表 4-2-6)から、「植物の名前が分からなかった」(B22)を主に回答するのは女性であり、なおかつ尾瀬ヶ原における利用者属性と不満要素の関係性(表 4-2-5)から、女性は「やすらぐことができた」(A13)を多く回答しており、植物の名前が分からないという不満が自然公園においてやすらぎを得たことによって補われたと考えることができる。⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する5つの不満要素では、「施設が整備されすぎていた」(B7)や「ゴミが落ちていた」(B12)の2要素において満足評価点との負の相関が認められた。

以上の結果を整理すると表 5-3-3 となる。ここで満足評価点に有意に正の相関を持つ満足要素を有意な満足と称し、満足評価点に有意に負の相関を持つ不満要素を有意な不満と称すれば、①「公園資源の享受」に対する有意な満足は、閑散日に1つのみだった

ものが、混雑日には6つに増えていることから、多数の利用者の存在によって尾瀬ヶ原の利用者の期待が阻害されたとは言い難い。また、「公園資源の享受」の未達成に対する有意な不満は、同様に2つから1つに減少することから、やはり多数の利用者の存在によって期待が阻害されたとは言えない。また、②「野趣性・独居性」の保持に対する有意な満足は0から3つに増加し、「野趣性・独居性」の欠如に対する有意な不満は1つから2つに増加していることから、尾瀬ヶ原の利用者の期待が阻害される可能性は大きくはないがあるといえる。さらに、③「適切な対人関係」の構築に対する有意な満足では0から4つに増加している一方で、「適切な対人関係」の欠如に対する有意な不満は0から4つに増加していることから、同様に、尾瀬ヶ原の利用者の期待が阻害される可能性は大きくはないがあるといえる。④「円滑に利用できる情報・施設」に対する有意な満足では、3つから0に減少し、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する有意な不満においては0から0と増減がないが、確実にこれらの期待を阻害すると考えられる。⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する有意な満足は1から0に減少し、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する有意な不満は0から2に増加することから、尾瀬ヶ原の利用者の期待が阻害される可能性は大きいといえる。

これらのことから、尾瀬ヶ原において、多数の利用者の存在が利用者の期待に及ぼす影響は、④情報や施設の円滑な利用や⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待で大きいこと、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築に対する期待において大きくはないがあることが示された。また、①公園資源の享受に対する期待に対しては影響がないといえる。

(2) 富士山

表 5-3-2 は富士山における閑散日(8月26, 27, 28日)と混雑日(7月21, 27日, 8月3日)の満足要素および不満要素と満足評価点、混雑意識評価点との単相関係数を一覧にしたものである。一般的には、満足要素は利用体験全体の満足を構成する一部であり、満足評価点に対して正の相関があり、反対に不満要素は満足評価点に対して負の相関があると考えられる。結果、予想した通り、富士山では、多くの満足要素が満足評価点に正の相関があり、反対に多くの不満要素は負の相関があった。

まず、**閑散日**において、満足評価点に対して正の相関を持つ15の満足要素が把握された。①「公園資源の享受」に対する満足要素の「富士山頂上からの風景を楽しむことができた」(a26)や「御来光を仰ぐことができた」(a2)、「富士山の雄大さを実感することができた」(a14)、「登りごたえがあった」(a19)、「自然がよく守られていた」(a4)、「長年の夢がかなった」(a10)、「空気がきれいだった」(a1)は、その多くが満足評価

表 5-3-4 富士山の閑散日と混雑日における利用者の期待に対する影響評価

自然公園利用者の期待	満足評価点と有意に正の相関を持つ満足要素	満足評価点と有意に負の相関を持つ不満要素	利用者の満足に対する影響評価
①公園資源の享受	7→10	0→1	×
②野趣性・独居性	1→0	0→0	△
③適切な対人関係	4→1	3→0	△
④円滑に利用できる情報・施設	2→2	0→0	×
⑤清潔・快適な空間	1→0	0→1	△

注) 閑散日→混雑日、○=影響あり △=やや影響あり ×=影響なし

点と高い相関を持つものであった。また、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では、「人が少なくてよかった」(a24) や、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素の「気持ちのよい挨拶を交わすことができた」(a11)、「ゴミの持ち帰りが守られていた」(a20)、「トイレチップがきちんと支払われていた」(a27)、「登山道のすれ違いのマナーが守られていた」(a28) が把握された。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では「トイレがよく整備されていた」(a12)、「施設がよく整備されていた」(a15) が、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では「ゴミが少なかった」(A5) が、満足評価点と正の相関を持ち、5 分類のすべての要素において満足評価点との関連が見られた。

一方、同じ閑散日において、満足評価点に対して負の相関を持つ不満要素は 5 つ把握された。中でも、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素の「登山道をふさいでいる団体利用者がいた」(b24) や「長い人の列ができて追い越しができなかった」(b5)、「休憩場所を占拠する団体利用者がいた」(b2) は、満足評価点と高い負の相関が見られた。また、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素の「ゴミが捨てられていた」(b4) や「トイレが臭かった」(b12) についても、満足評価点を有意に低下させていた。

混雑日においては、満足評価点と正に相関を持つ満足要素は 13 把握され、閑散日から 2 つ減少した。①「公園資源の享受」に対する満足要素では、「富士山の雄大さを実感することができた」(a14) や「富士山の自然に触れることができた」(a17) など 10 の要素が満足評価点と有意な関係を持っていた。③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では「トイレチップがきちんと支払われていた」(a27) のみが把握され、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では「トイレがよく整備されていた」(a12) や「施設がよく整備されていた」(a15) が有意に関連していた。また、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素と、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では、満足評価点との関連は見出せなかった。

一方、同じく混雑日において、満足評価点に対し負に相関を持つ不満要素が 2 つ把握

され、閑散日と比較して要素数が3つ減少した。①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素の「ガイドの解説がよくなかった」(b16)と⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素の「山小屋が多すぎた」(b9)であり、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では、関連が見られなかった。

以上を整理し、混雑日において満足と有意な関わりを持つ要素数が、閑散日と比較して、どのように変化するかをまとめたものが表5-3-4である。ここで満足評価点に有意に正の相関を持つ満足要素を有意な満足と称し、満足評価点に有意に負の相関を持つ不満要素を有意な不満と称すれば、概して、混雑日においては有意な満足が減少し、有意な不満の増加は少ない。5分類別に期待を見てみると、①「公園資源の享受」に対する有意な満足は閑散日の7から混雑日には10に増加し、有意な不満は0から1に増加するものの、全体として、利用者の期待に及ぼす影響はほとんどないといえる。同様に、②「野趣性・独居性」の保持に対する有意な満足は1から0に減少し、有意な不満の要素数には変化が無いことから、利用者の期待に及ぼす影響はあるが小さいといえる。③「適切な対人関係」の構築に対する有意な満足は4から1に減少し、有意な不満も3から0に減少することから、利用者の期待に与える影響は見られるが全体として大きくはならない。④「円滑に利用できる情報・施設」に対する有意な満足および有意な不満には変化が見られず、利用者の期待に与える影響はないと考えられる。⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する有意な満足は1から0に減少し、有意な不満は0から1に増加することから、影響はあるが大きくはない。

これらのことから、富士山において、多数の利用者の存在が利用者の期待に及ぼす影響は、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待において大きくはないと言える。また、①公園資源の享受や④情報や施設の円滑な利用に対する期待に対しては無いと考えられる。

以上、第3節では、利用者数の多寡が利用者の期待に及ぼす負の影響を把握した。その結果、時間消費型の自然公園利用においては、多数の利用者数よる負の影響が多くの期待で見られるのに対し、目的達成型の自然公園利用においては、その影響が少なく期待に与える影響もより限定的である。このように、利用型の異なる二つの自然公園で影響に差異が生じる理由は、時間消費型の利用がその過程を重視するのに対し、目的達成型の利用が目的を達するまでの過程を重視しないことによると考えられる。

第4節 利用者数の多寡と混雑意識の生起

(1) 尾瀬ヶ原

一般的には、満足要素は混雑意識とは無関係かあるいは負の相関を持つと考えられるが、閑散日の中に混雑意識と正の相関を持つ満足要素1つと、負の相関を持つ満足要素2つがあった(表5-3-1)。混雑意識と正の相関を持つ満足要素としては、④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素の「説明板や標識の数が十分だった」(A15)を把握した。この要素については、視覚的に捉えられる施設の数が、かえって混雑意識を生起する要素として捉えることができる。また、負の相関を持つ要素としては、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素の「人が少なくよかった」(A5)や、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素の「利用者のマナーが良くて、気持ちよかった」(A6)を把握した。これは、予想を下回る利用者数あるいは利用状況を認識することによって期待が満たされ、利用者のマナーの良さが利用者間の軋轢を軽減し、混雑意識を低下させたものと考えられる。

一方、不満要素は混雑意識と無関係かあるいは正の相関を持つと考えられるが、正の相関を持つものとして5つの要素と、負の相関を持つものとして4つの要素が把握された。②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素のうち「人が多すぎた」(B16)や「騒々しく感じた」(B8)の要素において混雑意識と有意な関係が見られた。特に、「人が多すぎたこと」が意味する内容は期待していた利用者数あるいは利用状況を超過して利用者がいたことであり、たとえ閑散日のような利用状況下においても、混雑意識が生起することを示唆する。もう一つの「騒々しく感じた」ことが混雑意識へと繋がることは、他の利用者によって直接的に行動が制約されることなく、心理的な働きかけのみによって混雑意識が生じることを意味する。また、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素の中で「長い人の列で追い越しができなかった」(B24)や「ツアー団体の数が多すぎた」(B9)ことが混雑意識と正の関連を持っていた。これらはたとえ、相対的に利用者数が少ない状況においても、期待する対人関係を築くことができなければ、混雑意識を生起させると考えられる。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素の中で「テントを張れる場所が少なかった」(D16)は、施設の空間的な不足によって混雑意識を生じさせたと考えられる。反対に、同じ④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素の中でも「説明板や標識の数が少なかった」(B14)や「説明板や標識の内容が分かりにくかった」(B29)、「観察テラスが少なかった」(B10)、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素の「ゴミが落ちていた」(B12)は、混雑意識に対して負の相関を持っていた。これらの要素のうち特に、「観察テラスが少なかった」

の要素について考えてみると、前述のテントを張れる場所の少なさと同様に空間の不足を意味する内容であるにもかかわらず、混雑意識には結びつかず、観察テラスさえあれば混雑には至らなかったのにとこの心理があったと考えられる。可能性として、混雑意識に対して負の相関を持つ不満要素の発現は心理的な代替作用が働いたものと考えられることができる。

混雑日においては、混雑意識に負の相関を持つ満足要素が3つ把握された。一つは②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素の「人が少なくよかった」(A5) ことであり、利用者が期待あるいは予想していた状況を実際利用状況が上回ることはなければ、混雑意識に対して負に寄与すると考えられる。10月7日の混雑日は、尾瀬全体において年間で4番目に多い約1万人の利用者を記録しているが、利用者が持つ期待(予想)の水準の高さによって、混雑意識の生成に差異をもたらすと言える。残る二つの要素は③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素に属する「利用者のマナーが良くて気持ちがよかった」(A6)と「出会った人の親切な対応に接することができた」(A11)である。良好な対人関係を築くことによって、混雑意識が緩和されたものと理解できる。

一方、混雑日における不満要素の中に、混雑意識と正の相関を持つもの8つと、負の相関を持つもの2つが把握された。②「野趣性・独居性」の欠如に対する3つの不満要素に属する「騒々しく感じた」(B8)や「人が多すぎた」(B16)、「落ち着かなかった」(B30)のすべての要素で混雑意識と繋がりを持っていた。また、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では「ツアー団体の数が多すぎた」(B9)や「ゆっくりと歩かできなかった」(B6)、「ツアー団体のマナーが悪かった」(B26)、「利用者のマナーが悪かった」(B11)、「長い人の列ができて追い越しができなかった」(B24)の5要素が関連を持ち、適切な対人関係が構築できない場合には、それが軋轢となって期待が阻害され混雑意識が生成されると考えられる。特に、「ゆっくりと歩く」(B6)や「追い越し」(B24)には利用者の仮想行動が含まれており、こうした期待する行動が阻害されると混雑意識を生じさせると考えられる。反対に、混雑意識と負の相関を持つ要素として、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素の「植物の名前が分からなかった」(B22)や、①「公園資源の享受」の未達成に対する不満要素の「目当てにしていた植物が少なかった」(B17)が把握された。これらの要素がなぜ混雑意識と関連を持つのか、その明確な根拠を見出せないが、可能性として心理的な代替作用が働いたことが考えられる。

以上、尾瀬ヶ原における利用者の満足要素および不満要素と混雑意識の関係性から、①公園資源の享受や⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待は、多数の利用者数によっては阻害されず、混雑意識を生起させないことが明らかとなった。また、②野趣性・独居性の保持や④情報や施設の円滑な利用に対する期待については、阻害されると混雑意

表 5-3-5 尾瀬ヶ原の閑散日と混雑日における利用者の混雑意識

自然公園利用者の期待	混雑意識と有意に負の相関を持つ満足要素	混雑意識と有意に正の相関を持つ不満要素	多数の利用者数によって混雑意識が新たに生起する可能性
①公園資源の享受	0→0	0→0	×
②野趣性・独居性	1→1	2→2	×
③適切な対人関係	1→2	2→4	△
④円滑に利用できる情報・施設	0→0	1→1	×
⑤清潔・快適な空間	0→0	0→0	×

注) 閑散日→混雑日、○=可能性あり △=やや可能性あり ×=可能性なし

識を生じさせるが、利用者数の多寡による影響は見られなかった。さらに、③「適切な対人関係」に対する期待は多数の利用者数によって阻害され、なおかつ混雑意識を生起させることが明らかとなった（表 5-3-5）。

(2) 富士山

満足要素は混雑意識とは無関係かあるいは負の相関を持ち、反対に不満要素は無関係か正の相関を持つと考えられるが、混雑日の満足要素の多くが混雑意識と正の相関を持ち、尾瀬ヶ原と全く違う傾向が見られた。また、閑散日の不満要素の中にも混雑意識と負の相関を持つものが見られた（表 5-3-2）。

閑散日において混雑意識と負の相関を持つ満足要素は8つあり、①「公園資源の享受」に対する満足要素の中から「富士山頂上からの風景を楽しむことができた」(a26)や「自然がよく守られていた」(a4)が把握され、混雑に対する意識を持つことなく公園資源を享受できたことが示唆された。また、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では「人が少なくてよかった」(a24)に有意な相関が見られた。これは利用者の期待していた利用状況に比べて実際の利用状況は人が少なく、期待を超える、より理想的な状況を体験できたことよって、混雑意識が生じなかったと考えられる。さらに、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では「気持ちのよい挨拶を交わすことができた」(a11)や「トイレチップがきちんと支払われていた」(a27)、「登山道のすれ違いのマナーが守られていた」(a28)、「山小屋の対応が親切だった」(a21)において有意な相関があり、良好な対人関係を構築できた場合には混雑意識が生起しないと考えられる。④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では有意な相関を持つものは無く、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では「ゴミが少なかった」(a5)において有意な相関が見られた。

一方、閑散日において混雑意識と正の相関を持つ不満要素は7つあり、まず②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素の「人が多すぎた」(b17)が把握された。このこ

とは、利用者が予想（期待）を超える利用者数を認知したことにより、混雑意識が生じたと考えられる。なおこの時、混雑意識は満足度の低下を伴っておらず、直接混雑意識に結びつくことがありうるということも注目すべき点である。③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素では「登山道をふさいでいる団体利用者がいた」(b24) や「長い人の列ができて追い越しができなかった」(b5) など4つの要素で混雑意識との有意な相関が見られた。④「円滑に利用できる情報・施設」に対する満足要素では、空間の不足を意味する「休憩場所が少なかった」(b13) や、情報の不足を意味する「トイレチップの使いみちが示されていないなかった」(b25) が把握された。トイレチップの使いみちが示されていないことがなぜ混雑意識に結びつくのかは、明確な根拠を見出せないが、この要素はツアーバスの利用者が多く回答するものであり、ツアーバス利用者が団体として行動したことと関わりがあると考えられる。

混雑日において、混雑意識と負の相関を持つ満足要素は1つのみであり、その他7つが混雑意識と正の相関を持っていた。尾瀬ヶ原との比較において、富士山に見られる最も顕著な傾向である。①「公園資源の享受」に対する満足要素では「富士山の雄大さを実感することができた」(a14) や「富士山の自然に触れることができた」(a17) など6要素が混雑意識に正の相関を持っていた。また同時に、これらの6要素がすべて満足と正の相関関係を持っていた。つまり、混雑を意識しつつも公園資源を享受できたことによって、満足度が低下しないということである。満足との相関係数を見ても頂上で公園資源を享受できたこと(a2, a26) が上位に位置することから、登山中あるいは頂上を極めるまでの過程において経験した混雑はそれほど問題とはならず、目的達成点としての頂上において期待が満たされたと考えることができる。その他、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では「人が少なくてよかった」(a24) において混雑意識との負の相関が認められた。これは、たとえ混雑した状況下にあっても、利用者が予想した利用状況より人が少ないと認識したならば、混雑意識を軽減することを示唆する。

一方、混雑日において、混雑意識と正の相関を持つ不満要素は8つ把握された。②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素の「騒々しく感じた」(b14) や「人が多すぎた」(b17) において有意な相関が把握された。また、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では「長い人の列ができて追い越しができなかった」(b5) や「団体利用者のリーダーが団体を管理できないでいた」(b29) など4つの要素で有意な相関が見られた。さらに、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素の「山小屋が多すぎた」(b9) や、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素の「トイレの待ち時間が長かった」(b19) においても相関が認められた。

表 5-3-6 富士山の閑散日と混雑日における利用者の混雑意識

自然公園利用者の期待	混雑意識と有意に負の相関を持つ満足要素	混雑意識と有意に正の相関を持つ不満要素	多数の利用者数によって混雑意識が新たに生起する可能性
①公園資源の享受	2→0	0→0	△
②野趣性・独居性	1→1	1→2	△
③適切な対人関係	4→0	4→4	○
④円滑に利用できる情報・施設	0→0	2→1	×
⑤清潔・快適な空間	1→0	0→1	△

注) 閑散日→混雑日、○=可能性あり △=やや可能性あり ×=可能性なし

富士山における利用者の満足要素および不満要素と混雑意識の関係性から、混雑日において、①「公園資源の享受」に対する満足要素の多くが混雑意識と正の相関を持っていた。また、期待の阻害は5分類した期待の全てで見られ、多数の利用者数によって引き起こされる③適切な対人関係に対する期待の阻害は混雑意識を生起させ、①公園資源の享受や②野趣性・独居性の保持、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待の阻害においても、混雑意識を生起させる可能性があることが明らかとなった(表 5-3-6)。

第4節では、利用者数の多寡による混雑意識の生起を把握した。その結果、多数の利用者数に起因する混雑意識の生起が、時間消費型の自然公園利用においては、③適切な対人関係の構築に対する期待の阻害によってのみ認められるのに対し、目的達成型の自然公園利用においては、5つの期待のうち④情報や施設の円滑な利用に対する期待を除く多くの期待阻害に認められた。利用型の異なる二つの自然公園で混雑意識の生起に差異が生じる理由は、目的達成型の自然公園利用における空間の利用の仕方として一点に集中する傾向があることと関わりがあると考えられる。

第5節 利用者数の多寡と混雑不快感の生起

(1) 尾瀬ヶ原

尾瀬ヶ原における満足要素と不満要素の中には、満足評価点の上昇に加えて混雑意識の低下を伴う4つの要素と、満足評価点の低下に混雑意識の上昇を伴う6つの要素が見られた(表 5-3-1)。特に後者は、混雑日において多く把握されることから、多数の利用者数の存在によって生起する負の影響であり、その意味内容から混雑不快感と位置づけられる。

まず、満足評価点の上昇に混雑意識の低下を伴う要素は閑散日では無かった。混雑日では、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素の「人が少なくてよかった」(A5)

表 5-3-7 尾瀬ヶ原の閑散日と混雑日における利用者の混雑不快感

自然公園利用者の期待	混雑不快感となる不満要素	多数の利用者数によって混雑不快感が新たに生起する可能性
①公園資源の享受	0→0	×
②野趣性・独居性	1→2	△
③適切な対人関係	0→4	○
④円滑に利用できる情報・施設	0→0	×
⑤清潔・快適な空間	0→0	×

注) 閑散日→混雑日

○=可能性あり △=やや可能性あり ×=可能性なし

や、③「適切な対人関係」の構築に対する満足要素の「利用者のマナーが良くて、気持ちよかった」(A6)、「出会った人の親切な対応に接することができた」(A11)、④「円滑に利用できる情報・施設」の欠如に対する不満要素の「植物の名前が分からなかった」(B22)が把握された。これらは、閑散日においては、満足の上昇と混雑意識の低下が同時に起こっていないことから、混雑した状況下で利用者の体験の評価を高める要素として注目される。但し、植物の名前が分からないことがなぜ満足評価点の上昇に混雑意識の低下を伴うのか、その明確な理由を見出せない。理由として、尾瀬ヶ原の利用者属性と不満要素の関係性(表 4-2-6)から、この不満を回答するのは主に女性であり、これまで論じてきたように、女性の満足評価点が高くなること(図 5-2-1)や、女性は相対的に野趣性と独居性を期待しないことと関連があると考えられる。

次に、満足評価点の低下に混雑意識の上昇を伴う、いわゆる混雑不快感となる要素は、**閑散日**では、②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素の「人が多すぎた」(B16)が把握された。また、**混雑日**では、②「野趣性・独居性」の欠如に対する不満要素の「騒々しく感じた」(B8)や「人が多すぎた」(B16)、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素の「ツアー団体の数が多すぎた」(B9)、「ゆっくり歩くことができなかった」(B6)、「ツアー団体のマナーが悪かった」(B26)、「利用者のマナーが悪かった」(B11)が把握された。「人が多すぎた」は閑散日においても混雑不快感として生起するが、その他の5つの不満要素は、混雑日において新たに生起することから、多数の利用者の存在による影響と考えられる。

以上、尾瀬ヶ原における混雑不快感の生起は、利用者数が少ない状況下において、②野趣性・独居性の保持に対する期待の阻害によって生じていた。また、多数の利用者数による影響として、新たに、②野趣性・独居性の保持、③適切な対人関係の構築に対する期待の阻害によって混雑不快感が生起することが明らかとなった。さらに、②「野趣性・独居性」に対する期待と③「適切な対人関係」に対する期待が満たされた場合には、満足の上昇と混雑意識を同時に低下させることも明らかとなった(表 5-3-7)。

表 5-3-8 富士山の閑散日と混雑日における利用者の混雑不快感

自然公園利用者の期待	混雑不快感となる不満要素	多数の利用者数によって混雑不快感が新たに生起する可能性
①公園資源の享受	0→0	×
②野趣性・独居性	0→0	×
③適切な対人関係	2→0	×
④円滑に利用できる情報・施設	0→0	×
⑤清潔・快適な空間	0→1	△

注) 閑散日→混雑日

○=可能性あり △=やや可能性あり ×=可能性なし

(2) 富士山

富士山の利用者が持つ満足要素と不満要素の中に、満足の上昇に混雑意識の低下を伴う7つの要素と、満足の低下に混雑意識の上昇を伴う、いわゆる混雑不快感として生じた3つの要素が見られた(表5-3-2)。

満足の上昇に混雑意識の低下を伴う7つの要素はすべて、**閑散日**の満足要素に見られ、①「公園資源の享受」に対する満足要素の「富士山頂上からの風景を楽しむことができた」(a26)と「自然がよく守られていた」(a4)が把握された。また、②「野趣性・独居性」の保持に対する満足要素では「人が少なくよかった」(a24)、③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素では「気持ちのよい挨拶を交わすことができた」(a11)や「トイレチップがきちんと支払われていた」(a27)、「登山道のすれ違いのマナーが守られていた」の3要素が把握された。さらに、⑤「清潔・快適な空間」の利用に対する満足要素では「ゴミが少なかった」(a5)において関連が見られた。これらは、閑散日において利用者の体験に対する評価を高める要素として注目される。

一方、満足の低下に混雑意識の上昇を伴う混雑不快感は、**閑散日**において2つの要素が把握された。③「適切な対人関係」の欠如に対する不満要素の「登山道をふさいでいる団体利用者がいた」(b24)と「長い人の列ができて追い越しができなかった」の2要素であり、利用者の仮想行動に関連する期待が阻害され、混雑不快感を生じさせていた。

混雑日では、⑤「清潔・快適な空間」の欠如に対する不満要素の「山小屋が多すぎた」(b9)においてのみで混雑不快感が生起し、満足評価点との相関および混雑意識評価点との相関の検定結果から、それほど強くはない混雑不快感ということが出来る。混雑日においては、多数の利用者の存在によって、個々の利用者の行動が制限されるような状況が生じて、混雑不快感となる不満要素が多くなると考えられるが、富士山ではそのような結果は得られなかった。この理由として、富士山の利用者が満足要素において混雑

意識を持ちつつも実際の利用体験に対して満足と回答しているように、利用体験の全体像からすると個々の期待阻害が重要視されなかったためと考えられる。

以上、富士山における混雑不快感の生起は、閑散日において、利用者の仮想行動に関わりがあると考えられる、③適切な対人関係の構築に対する期待の阻害によって生じていた。また、利用者が集中する混雑した状況下では混雑不快感となる要素の数が減少し、新たに、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待が阻害されて生じていた（表 5-3-8）。

第5節では利用者数の多寡による混雑不快感の生起を把握した。その結果、多数の利用者数に起因する混雑不快感の生起が、時間消費型の自然公園利用においては、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築に対する期待の阻害によって見られるのに対し、目的達成型の自然公園利用においては、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待の阻害で見られ、全体として混雑不快感が生起する可能性は低かった。利用型の異なる二つの自然公園で混雑不快感の生起に差異が生じる理由は、時間消費型の利用がその過程を重視するのに対し、目的達成型の利用が目的を達するまでの過程を重視しないことによると考えられる。

第6節 多数の利用者数による期待阻害の概念的整理

二つの自然公園の利用者の意識から、多数の利用者の存在によってどのような期待が阻害されたかを把握した。その結果、利用者の期待が阻害されるのに伴い、満足の低下や混雑意識の上昇等が生じていることが明らかになった。ここでは、こうした一連の流れを混雑という事象に関わる指標とともに概念整理し、思索的検討を行う。

混雑の事象の全体像を捉えるために必要な概念的指標には、まず本稿が扱ってきた自然公園利用者の「期待」がある。本研究では、その期待が満たされたか、満たされなかったかを把握することによって、利用者が持つ期待をそれぞれ5つに分類した。従い、自然公園利用者が持つ期待の中には5つに分類される期待が内包される。この期待が

「阻害」されると、利用者の「期待に対する充足の未達成」が生じ、「満足の低下」や「混雑意識」の生起あるいは上昇が見られた。しかし、ここで、自然公園における利用者の期待がいかなる性格のものであるかを検討する必要がある。というのは、利用者の期待が純粹な、あるいは理想的な期待であるとすれば、実際の利用体験において期待は

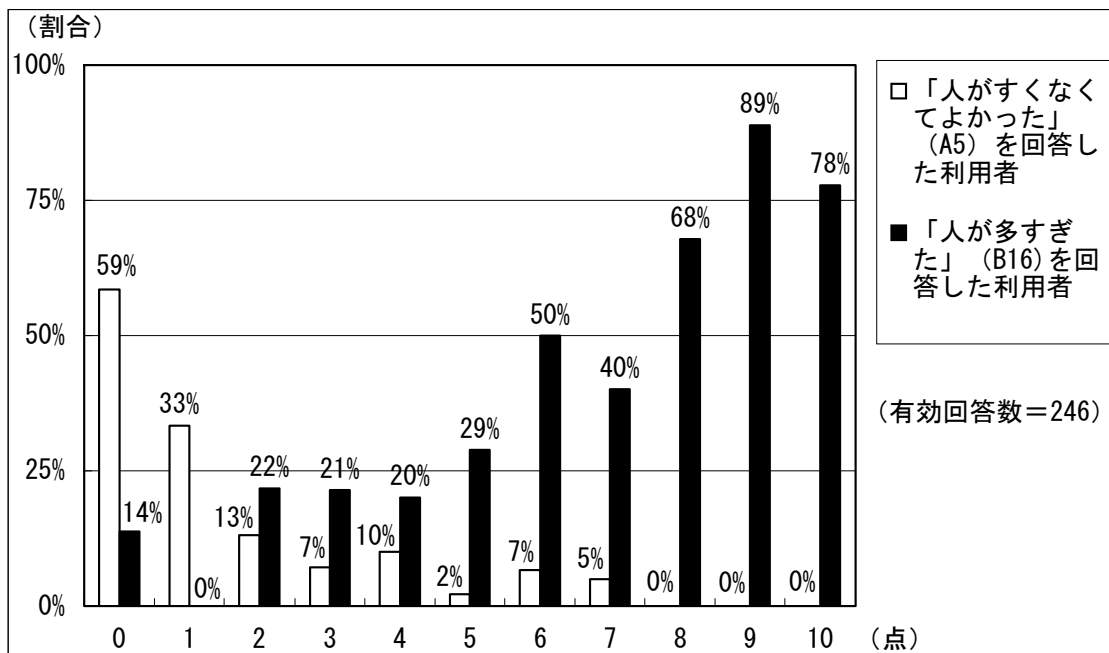


図 5-6-1 尾瀬ヶ原における混雑意識評価点別の
「人が少なくてよかった」および「人が多すぎた」の回答者割合

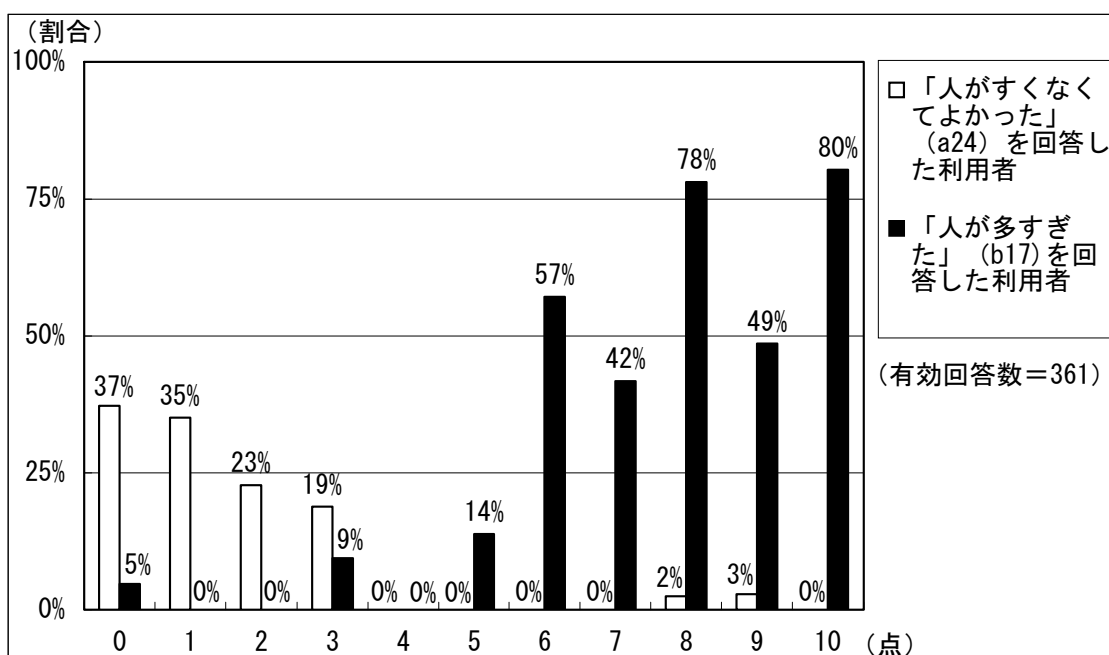


図 5-6-2 富士山における混雑意識評価点別の
「人が少なくてよかった」および「人が多すぎた」の回答者割合

常に満たされることがなく、恒常的に阻害され続けることとなるためである。したがって、期待と実際のフィールドの利用体験の比較は、理想的な期待像ではなく、自然公園に訪れる利用者が持つ「現実的な期待像」によって行われる必要がある。また、現実的な期待像と実際の利用体験の比較によって、現実的な期待像の方が大

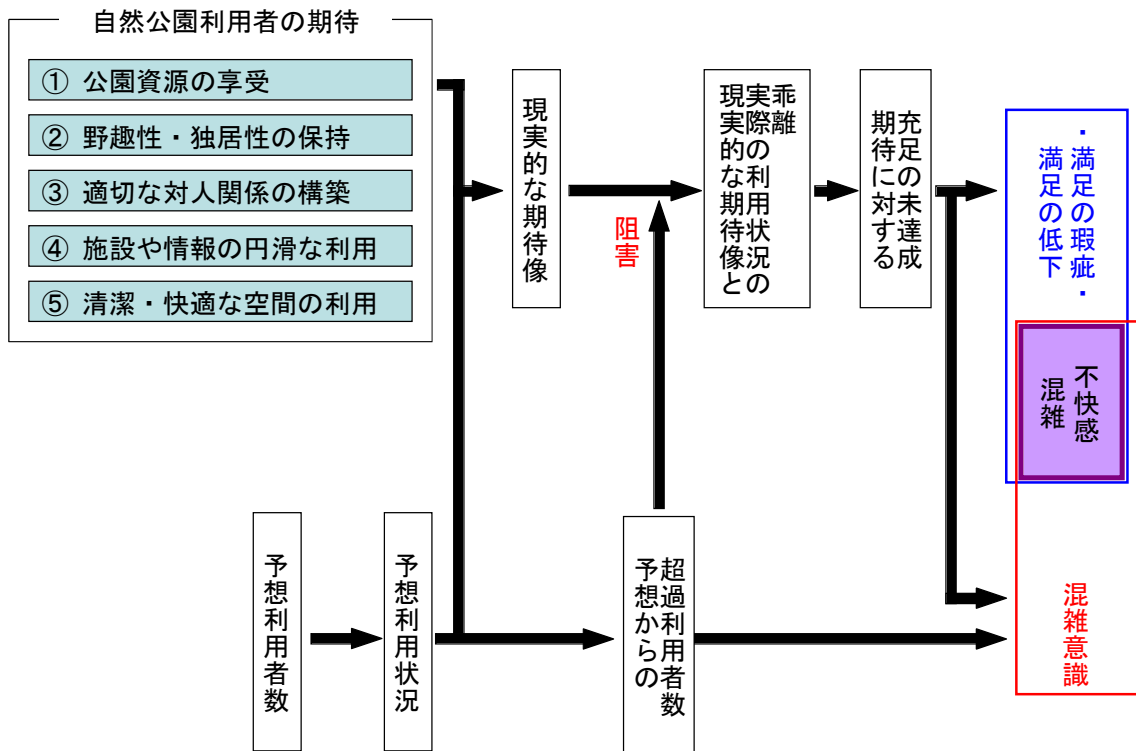


図 5-6-3 多数の利用者数をもたらす自然公園利用者の期待阻害過程（概念図）

きければ期待に対する充足の未達成が生じるが、そこで生じる差異は「現実的な期待像と実際の利用状況の乖離」と考えられる。

一方、実際の利用状況を現出する重要な指標として、利用者数がある。尾瀬ヶ原と富士山における利用者の満足要素として「人が少なくてよかった」や、不満要素としての「人が多すぎた」が回答されることは、利用者が「予想利用者数」のような何か判断材料になるものを持っていたことを示唆する。図 5-6-1 および図 5-6-2 はそれぞれ、尾瀬ヶ原と富士山における混雑意識評価点別の「人が少なくてよかった」および「人が多すぎた」の回答者割合である。富士山に比べて尾瀬ヶ原では、各評価点に回答者が広く分布し、1点と2点の間で両回答者の割合が逆転することから、このあたりに利用者数に関わる予想があり、それ以上の評価点において混雑意識に結びついたと考えられる。一方、富士山では「人が多すぎた」の回答は主に5点以上に分布することから、4点と5点の間に利用者数に関わる予想があり、混雑意識を形成していることが分かる。即ち、この予想利用者数から混雑意識の形成に直接繋がるような過程があると思われる。しかし、実際には自然公園に訪れる利用者が具体的な数字として予想利用者数を持っていることは考えにくく、より抽象的な像として利用者が「予想利用状況」を持つと考えられる。そして、この予想利用状況と実際の利用状況の比較によって混雑意識が形成されると考えられることから、その混雑意識を形成する前段階として「予想からの超過利用者数」が認識される段階も必要である。

さて、自然公園利用者の期待が阻害されて満足の低下に到る過程と、予想利用者数から混雑意識を形成するまでに到る過程を区分して論じてきたが、両者の過程は完全に独立ではない。利用者が持つ現実的な期待像の中には当日の混み具合などの予想利用状況が含まれると考えられる。また、これまで論じてきたように、予想からの超過利用人数によって、現実的な期待像が阻害されることが、混雑という事象を捉えるにあたり重要である。

以上の思索的検討によって図 5-6-3 が得られた。

第 7 節 利用者の期待阻害を考慮した自然公園計画

自然公園計画は、法令の整備や予算、時間的計画、デザイン等を含み、それらの根底に流れる統一した思想から個々の技術にまで広範囲にわたる。そのうち、ここでは、利用者の個々の期待を充足するために考えられる管理施策を整理し、本研究で取り上げた二つの自然公園において、利用者数が利用者に与える負の影響を取り除くために有効と考えられる管理施策を検討する。

期待阻害の概念的整理でも触れたように、自然公園の利用者の期待については、充足される場合と、充足が未達成となる場合とがある。このことから、自然公園計画においては、期待を充足しより高い満足を提供していく方向と、期待阻害を排除していく方向と大きく二つに区分される。目指すべき自然公園計画の理想が前者にあることは言うまでもないが、本稿が扱ってきたように、多数の利用者数が利用者の期待に与える負の影響は、これまで明らかではなかった。それゆえ、後者である期待阻害を排除していく方向を検討することも、自然公園のあるべき姿に近づくためには必要である。

表 5-3-9 は、時間消費型（尾瀬ヶ原）と目的達成型（富士山）の自然公園において把握した全ての利用者の満足要素および不満要素の内容を検討し、利用者の期待を充足するための管理施策を整理したものである。管理施策は、施策の選択肢の内容から、施設・空間整備、情報提供、利用規制の 3 つに区分できる。

（1）利用者の期待を充足するための管理施策

1) 利用者の期待と施設整備

利用者の 5 つの期待にそれぞれ対応した施設と空間の整備の管理選択肢を考えることができる。

まず、①公園資源の享受に対する期待を充足するためには、利用者が享受する資源を保護することである。もともと、自然公園の資源は人間の手によって創造することは不

表 5-3-9

自然公園における利用者の期待を充足するために有効と考えられる管理施策

利用者の期待	利用者の期待を充足するために考えられる管理施策		
	施設・空間整備	情報提供	利用規制
①公園資源の享受	・資源享受のための施設整備 (主対象・視点場の保護)	・公園資源に関わる情報の提供	・利用者数の調整 (時間・空間)
②野趣性・独居性の保持	・やすらぎ・休息のための 施設整備 ・利用動線と休憩・休息施設 の隔離	・利用が集中する時間と空間 に関する情報提供	・利用者数の調整 (時間・空間)
③適切な対人関係の構築	・利用者間の交流のための 空間(施設)整備 ・待避所・休憩所等の整備	・利用マナーの指導 ・団体利用者のリーダー に対する指導	・利用者数の調整 (時間・空間) ・利用者の利用間隔の調整 ・団体利用者の利用者数の調整 (時間・空間) ・団体利用者の団体規模の調整
④情報や施設の円滑な利用	・情報提供施設の整備 (必要性・充分性) ・利用施設の整備 (安全性・円滑性)	・利用マナーの指導 ・利用方法に関する情報 の事前提供 ・施設整備の考え方に関する 情報の提供	・利用者数の調整 (時間・空間)
⑤清潔・快適な空間の利用	・利用施設の整備 (清潔性・快適性) ・野外空間の美化清掃活動	・美化清掃活動への協力の 呼びかけ	・利用者数の調整 (時間・空間)

可能であり、本来操作不可能な対象である。しかし、人間は五感を用いて資源を享受し、特に自然公園の保護対象でもある風景は、人間の“見る”という行為と主観の形成によって成立する。その意味において、人間の見るという行為、体験を保護する施設整備を通して、利用者の公園資源の享受に対する期待を充足できる可能性がある。この時、見る対象である「主対象」⁴⁾を保護するための施設整備と、「視点場」⁵⁾を整備することによって「主対象」を保護する施設整備がある。例えば、尾瀬ヶ原においては、木道の整備によって歩行空間からの踏み外しが少なくなり、見る対象である湿性植物が保護されている⁶⁾ことから、木道の整備が利用者の公園資源の享受に寄与している。また、富士山においては、五合目までの有料道路の開通によって利用者数が激減し、荒廃した旧登山道が見受けられるが、伝統的な登山においては足を休め富士山を仰ぎ見る視点が各所にあった。登山者が主対象を得るために、視点場の森林等を整備することは、利用者の公園資源の享受に対する期待を充足することになる。

また、②野趣性・独居性の保持に対する期待を充足するためには、やすらぎ・休息のための施設整備や、利用動線とやすらぎ・休息施設の隔離を行うことである。施設整備によって人の喧騒によって生じる音の大きさを下げることだけでなく、より積極的にくつろぎやすらぎを得ることのできる施設整備を行うことや、デザインによって視線の方向を誘導することも有効と考えられる。尾瀬ヶ原では、木道の途中の休憩テラスや観察テラスが木道から近距離に設置されていることや、人気の写真撮影地点では利用者の視線が交錯するように木道が敷設されていることから、こうした現状を施設の再整備によって改善することができる。また、富士山では登山道や下山道沿いに宿泊施設

以外の休憩空間が少ないと回答する利用者がいることから、やすらぎやくつろぎのための空間づくりが有効と考えられる。

次に、③適切な対人関係の構築に対する期待を充足するためには、利用者間の交流のための空間・施設の整備や、待避所・休憩所等の整備を行うことである。本研究において把握したように、自然公園利用者の期待には少なからず「交流」が位置づけられており、利用者同士が語らうことのできる場所の整備は有効と考えられる。また、待避所・休憩所等の整備は対人関係の軋轢を生じさせないようにするための施設整備であり、この場合は、やすらぎやくつろぎといった空間の機能は必ずしも必要ではない。尾瀬ヶ原では、木道上で長い人の列を追い越すために、あるいは背後に繋がった行列を追い越させるために待避所を設けたり、木道をさらに一本追加することによって、利用者が適切な対人関係を構築できるように施設整備を行うことが可能である。富士山では、登山者と下山者が同じ道を通る区間が一部あることから、登山道と下山道が同一とならないように分けて整備することも管理施策の一つの選択肢である。

さらに、④情報や施設の円滑な利用に対する期待を充足するためには、情報提供施設と利用施設の整備を行うことである。ガイドマップや説明板、標識などの情報提供施設は必要性を欠くと景観破壊などのように公園資源の価値の低下を招き、十分性を欠く場合には利用の混乱を招くため、情報提供施設を整備する際、その施設の必要性和十分性を慎重に検討する必要がある。また、利用施設を整備する際には安全性と円滑性を考慮することが必要である。尾瀬ヶ原では、植物の名前が分からず不満とした回答が多く、利用者が情報を容易に獲得できるように施設整備することや、利用の安全性の面から木道や登山道、橋を、利用の円滑性の面からトイレや観察テラス等の整備を図ることが有効と考えられる。富士山についても同様であるが、利用者が自然に関わる情報をそれほど必要としていない点に留意することが重要である。

最後に、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待を充足するためには、利用施設の整備と野外空間の美化清掃活動を行うことである。ここでいう利用施設の整備とは、施設の拡大や改変を必ずしも意味しない。既にある利用施設について清潔性と快適性が保持されるように整備することで十分な場合もある。尾瀬ヶ原では、自然公園史において概観したように、ゴミの持ち帰り運動がいち早く定着した公園であり、わが国の自然公園の中では空間の清潔性と快適性が良好に保たれている公園と考えられる。しかし、過剰整備に対する利用者の不満も多く回答されていることから、過剰整備による空間の快適性の欠如についても考慮することが求められる。富士山では、山小屋の営業看板が利用者の不満となっており、尾瀬ヶ原と同様の配慮が必要である。

以上、利用者の期待に対応した、有効と考えられる管理施策を整理、検討したが、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待で指摘した通り、施設整備が過剰整備とならない

ように留意し検討することが極めて重要である。歩行空間の円滑性や安全性、情報提供施設の充分性、トイレ等の利用施設の清潔性・快適性を追求するあまり、いきすぎた整備を行うことはかえって利用者の期待の阻害を招き、満足の低下を生じさせる。海外の他の国では、ニュージーランドのように道路や施設の整備を最小限にすることを原則とする⁷⁾ 例も見られる。また、米国では一定の範囲内の収容力人数を決定し、その人数に基づいて施設収容力を決定している⁸⁾。一方、わが国の自然公園制度では、例に挙げたニュージーランドを含め米国や豪州などの新大陸系の国々が持つ公園制度と違い、地域を指定した上で、自然風景の保護と利用の増進の両者を基調とする。これまでは自然公園の管理施策は管理者である環境省に委ねられ、明確な判断基準を持たずに施設整備が実施されてきたが、多くの自然公園において過剰利用が指摘されている現況にあっては、施設整備の基準作りを行う必要がある⁹⁾。また、その基準づくりを行う際には、価値判断が求められるが、本研究の結果が示唆する利用者意識の特性に配慮していくことも重要である。

2) 利用者の期待と情報提供

利用者の期待を充足するための二つ目の管理施策として情報提供がある。情報提供をする際には、自然公園利用者の興味対象との関連性や、いつ情報を発信するかといった情報提供の時間的適切性に配慮して、その効果についても予測しておくことが必要と考えられる。

まず、①公園資源の享受に対する期待を充足するためには、公園資源に関わる情報の提供を行うことである。季節によって変化する風景や動植物を見ることは、自然公園利用者にとって公園を訪れる目的であり、こうした情報を利用者に事前に提供することによって、公園資源の享受に対する期待の水準を変化させることが可能である。また、実際に訪れた自然公園利用者に対しては、ガイド等による自然解説も利用者の期待を充足させるために有効な手法と考えられる。尾瀬ヶ原では、既に尾瀬保護財団等のホームページを通して、公園資源がいかなる状況にあるのかが把握できるが、情報を事前に取得している利用者は少ないと思われる。事前にできるだけ多くの公園利用者が紅葉の状況を把握していれば、「思ったほど紅葉がきれいではなかった」(B20) などのような期待阻害を防ぐことができる。富士山では、ガイドの解説を通して富士山の資源を享受することが可能であり、頂上だけでなく山麓の自然を楽しむこともできる。

また、②野趣性・独居性の保持に対する期待の中には、他の利用者の存在に否定的な意味合いが含まれていることから、利用者が集中する時間と空間に関する情報を提供することが効果的と考えられる。混雑予想日や混雑予想箇所を事前に情報提供することで、野趣性や独居性を重視する利用者は、利用日や利用場所を変更して、時間的、空間的な

利用の集中を未然に回避することが可能である。また、実際の利用時における情報提供によっても、昼食の時間を変更して利用の集中を避けることや、利用ルートを変更することが可能となる。

次に、③適切な対人関係の構築に対する期待を充足するために考えられる管理施策は、一般利用者に対する利用マナーの指導だけでなく、団体利用者のリーダーに対する指導や、旅行会社に協力を求めて事前に団体ツアーへの参加者に情報提供を行ってもらうことである。また、利用方法について情報提供することも重要である。尾瀬ヶ原と富士山には共通して、木道や登山道など限定されたルートを利用者が歩くという利用形態がある。このような場合に、規模の大きい団体利用者の行動や振る舞いは、少ない人数のグループを構成する利用者を与える影響は大きい。それゆえ、規模の大きい団体利用者を管理、誘導できる立場にあるリーダーに対する指導は有効と考えられる。

さらに、④情報や施設の円滑な利用に対する期待を充足するためには、③と同様に、利用方法に関する情報を提供することが有効である。トイレの設置箇所や設置数、利用する施設、空間に関わる情報を含め、利用方法に関する情報を提供することによって、自然公園利用者が自身の行動を計画することができる。また、情報を正確に伝えることによって、富士山において不満要素となった「トイレチップの使いみちが示されていないかった」(b25)という利用者の期待阻害を排除することができる。例えば、米国のヨセミテ国立公園では、自然破壊が生じた理由や経緯、なぜその場所を保全しているのか等について学ぶことができる解説板が多く見られる¹⁰⁾。このような情報は、管理施策に対する利用者の理解を深め、利用者の同調行動を促す¹¹⁾ ことによって、期待阻害を生じさせない可能性があり、情報提供の一步進んだあり方として注目できる。

最後に、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待を充足するためには、美化清掃活動への協力を呼びかけることや、前項と同様に、美化清掃活動で生じる費用等の情報を提供すること、管理施策に関わる情報を提供することが有効である。尾瀬ヶ原、富士山はともにトイレ等の利用施設の維持・管理費用は大きく、環境に配慮しつつ様々な取り組みが行われている¹²⁾。これらの情報を利用者に伝えることによって、利用者の同調行動を促し、清潔・快適な空間の利用を維持することが可能である。また、都市生活と同様に清潔性や快適性を期待する利用者に対して、山岳地の施設の清潔性や快適性の水準を伝えることで、期待の水準を操作することも重要である。

以上、利用者の期待を充足するために考えられる情報提供について整理を行った。情報提供の目的の一つには、重要なことは利用者を指導し監督することも含まれるが、最終的な目標は、利用者の意識を啓発することであり、環境と人との関わりについて学習する機会を提供することにあると考えられる。

3) 利用者の期待と利用規制

平成 14 (2002) 年に自然公園法が改正され、利用調整地区制度によって公園への立ち入りが認定制となり、利用者数の人数が調整できるようになった。ここで取り上げる利用規制とは、この自然公園法における利用調整地区制度による利用調整だけでなく、あらゆる規制によって自然公園の利用をコントロールするというより一般的な広い意味で用いている。

近年まで、公園管理に関わる政策の利害得失は必ずしも比較検討されず、法的手段の可能性と適切性はほとんど論じられてこなかった¹³⁾。また、平成 14 (2002) 年の自然公園法改正まで、利用調整に対する明確な法的根拠を持たなかったことから、利用調整に類する具体的な管理施策の実績は少なく、選択肢も極めて少ない。そこで、ここでは管理施策の実現可能性よりも選択肢としての幅の広さを重視して、利用者の期待を充足するために考えられる管理施策を検討する。

まず、①公園資源の享受、②野趣性・独居性の保持、③適切な対人関係の構築、④情報や施設の円滑な利用、⑤清潔・快適な空間の利用、の 5 つの期待を充足していくためには、共通して、利用者数の規制が考えられる。利用者数の規制を行う具体的な実施方法については、米国やカナダ、ニュージーランドで広く用いられている抽選や先着順¹⁴⁾、利用料金の徴収による利用者数の抑制¹⁵⁾ などがある。また、利用者数の決定方法には、植生の変化や利用者の心理を捉える指標を決定した上で、その指標と利用者数との関係を明らかにし、指標の値がある水準に達する利用者数を算出する方法が多く提案されている。但し、利用者数の決定方法には自然公園の保護対象を明確にするなどの価値判断の余地があり、方法論には未だ検討の余地がある。

本稿で扱ってきた自然公園利用者の期待の 5 分類は、自然公園利用者数を決定する際の価値判断の材料となり、それぞれの利用者の期待に対応して利用者数の調整方法を考えることができる。

まず、①公園資源の享受に対する期待を充足する方法としては、公園資源の保護を目的として時間による利用者数の調整と空間による利用者数の調整を行うことである。尾瀬ヶ原では、一年のうち利用の集中がミズバショウ期、ニッコウキスゲ期、紅葉期の三時期に限定されており、この三時期において人為の影響が拡大すると考えられる。また、一日の中でも昼間の限られた時間に尾瀬ヶ原における同時滞在者数が増加する¹⁶⁾ ことから、より短い時間に区分して利用者数を調整することも有効である。一方、富士山では、利用の集中が 7 月から 8 月にかけての週末、特に 8 月上旬の土曜日に見られる。動植物など自然生態系への影響を考慮して利用者数の調整を行うことが可能である。

また、②野趣性・独居性の保持に対する期待を充足する方法は、自然公園における野趣性や独居性を保護することを目的として時間による利用者数の調整と空間による利

利用者数の調整を行うことである。この場合、利用者が求める野趣性や独居性がどの程度の利用者数によって実現されるか、どのような場所において期待されているか、を明らかにすることが重要である。

次に、③適切な対人関係の構築に対する期待を充足するためには、適切な対人関係の構築を目的として、利用者数の時間的、空間的調整を行うことである。利用者の全体数を減じることで、利用者間の軋轢を軽減できる可能性がある。また、尾瀬ヶ原や富士山の利用者の満足要素、不満要素から明らかなように、利用者が一列になり利用者の仮想行動が阻害されていることから、利用者数の全体数を調整するのではなく、利用者の入山間隔等を調整するなど、単位時間あたりの利用者数を平準化することも有効と考えられる。その他、少人数のグループを構成する利用者と団体利用者の軋轢を軽減するために、団体利用者のみに対して利用者数の調整を行ったり、団体の規模の調整を行うことも有効である。

さらに、④情報や施設の円滑な利用に対する期待を充足する方法として、情報や施設が円滑に利用できる範囲内において、利用者数を決定し調整することである。休憩のための施設や空間、トイレ等には明らかに収容できる限界の人数があり、本来は人間が混雑を感じない理想的な利用人数があると考えられるが、この水準を根拠にして、利用者数の調整を行うことである。この方法であれば、施設の拡大を意図せずして、利用者の期待を充足することができる。

最後に、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待を充足するためには、空間が清潔、快適に保たれることを目的として、利用者数の調整を行うことである。例えば、富士山のトイレ処理速度には限界があり、その限界を超えた場合にトイレが故障するなどして、清潔性や快適性が欠如することが考えられる。

以上、自然公園における利用者の期待を充足するために考えられる利用規制について整理した。具体的な利用の調整方法は上述した方法の他にも多くの選択肢があるが、利用者の期待の意味内容に配慮して、その選択肢を決定することが重要である。

(2) 利用者数が利用者の心理に与える負の影響を取り除くための管理施策

利用者数の期待を充足するために有効と考えられる管理施策は数多く存在するが、多数の利用者数によって阻害される期待とそうでないものがあり、近年の自然公園において指摘されている過剰利用の問題に対して、すべての管理施策が有効に機能する訳ではない。既に明らかにしたように、利用者数が利用者の心理に与える影響は、自然公園の利用型によって差異があることから、管理施策を実施することで効果的に利用者の心理に働きかけるものと、そうでないものがある。また、効果的に利用者の心理に働きかけ

表 5-3-10 利用者の期待に応じた管理施策の効果

I 時間消費型（尾瀬ヶ原）			
管理施策の意図	管理目標		
	満足低下の防止	混雑意識の軽減	混雑不快感の軽減
①「公園資源の享受」 の期待の充足	×	×	×
②「野趣性・独居性の保持」 〃	△	×	△
③「適切な対人関係の構築」 〃	△	△	○
④「情報や施設の円滑な利用」 〃	○	×	△
⑤「清潔・快適な空間の利用」 〃	○	×	×

II 目的達成型（富士山）			
管理施策の意図	管理目標		
	満足低下の防止	混雑意識の軽減	混雑不快感の軽減
①「公園資源の享受」 の期待の充足	×	△	×
②「野趣性・独居性の保持」 〃	△	△	×
③「適切な対人関係の構築」 〃	△	○	×
④「情報や施設の円滑な利用」 〃	×	×	×
⑤「清潔・快適な空間の利用」 〃	△	△	△

注) ○=効果あり、△=やや効果あり、×=効果なし

る管理施策の中にもより優先順位の高いものと、低いものがある。

表 5-3-10 は、本稿で取り上げた二つの自然公園について、利用者数が利用者の心理に与える負の影響を取り除くために有効と考えられる管理施策を整理したものである。管理施策を実施する際に、影響を受ける利用者心理のうちどの影響を取り除くことを目標とするかは政策的判断を要するが、(1)満足低下の防止、(2)混雑意識の軽減、(3)混雑不快感の軽減、の3つの目標を設定することができる。

(1)満足低下の防止を目標とする場合においては、時間消費型（尾瀬ヶ原）の自然公園で②～⑤の4つの管理施策を実施することが望ましく、中でも④および⑤の施策が効果的と考えられる。これは、公園の利用が時間消費型であるため、利用の途中途中で体験する情報や施設、空間に対しても円滑性や清潔性、快適性が期待されており、多数の利用者によってそれらの期待が阻害されやすいことによると考えられる。一方、目的達成型（富士山）の自然公園では、②や③、⑤の管理施策を実施することが望ましい。時間消費型の自然公園と比較すると、④の管理施策は効果が見込めない。この理由として、目的達成型の自然公園では、目的を達するまでの過程は、利用体験全体の中でそれほど重視されないことによると考えられる。

(2) 混雑意識の軽減を目標とする場合においては、時間消費型の自然公園で③の管理施策を実施することが望ましく、他の管理施策はそれほど効果が見込めない。一方、目的達成型の自然公園では、①～③、⑤の管理施策でその効果を期待できる。このように時間消費型と目的達成型の自然公園において管理施策の有効性に差異が生じる理由は、時間消費型の自然公園に比べて、目的達成型の自然公園においては目的を達成する地点において利用が集中することに起因すると考えられる。また、両者の利用型の自然公園に共通して、③の施策の効果が見込める理由は、③適切な対人関係の構築に対する期待の中に、「他の利用者を追い越したい」(B9, b5)、「ゆっくり歩きたい」(B6)、「マナーよくすれ違いたい」(a28, b30)、「休憩したい」(b2)などの利用者自身が期待する仮想行動が含まれており、こうした仮想行動が阻害されないように対策を講じることで混雑意識を軽減できると考えられる。

(3) 混雑不快感の軽減を目標とする場合においては、時間消費型の自然公園では、②～④の3つの施策を行うことが望ましく、特に③の実施の効果が見込める。反対に、目的達成型の自然公園では、⑤の施策を行うことが望ましく①～④の4つの施策では効果が望めない。多数の利用者によって、満足の低下を伴って混雑意識を生起させる混雑不快感は、利用者心理の中でも最も排除すべき心理と考えられるが、時間消費型の自然公園では幅広い管理施策を検討することができる。一方、目的達成型の自然公園では、検討できる管理施策の選択肢の幅が狭く、もともと利用者にとって利用体験全体において混雑不快感の生起はそれほど重要な問題ではないと考えられる。

以上、利用者数が利用者の心理に与える負の影響を取り除くために有効と考えられる管理施策を検討した。利用者心理が受ける影響のうち、どの影響を取り除くことを目標とするかによって、選択すべき管理施策に差異があること、また、自然公園の利用類型によっても選択すべき管理施策に差異があることを指摘した。具体的にどの施策の選択肢を選ぶかはより総合的な政策的判断を含み、本研究の範囲ではないが、選択する管理施策によっては、一部の利用者を排除することや、満足が向上することによって意図せずより多くの利用者呼び込むことも考えられるため、慎重な検討を要する。

第8節 本章のまとめ

本章では、自然公園において利用者数の多寡が利用者に及ぼす負の影響を明らかにした。

第2節では、負の影響を捉えるための前提として、二つの自然公園利用者の意識の差異性と同一性を明らかにした。

第3節では、利用者数の多寡が利用者の期待に及ぼす負の影響を把握し、以下のようなことを明らかにした。

- ・ 時間消費型の自然公園利用（尾瀬ヶ原）において、多数の利用者の存在が利用者の期待に及ぼす影響は、④情報や施設の円滑な利用や⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待で大きいこと、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築に対する期待において大きくはないがあること、①公園資源の享受に対する期待に対しては影響が無いこと

- ・ 目的達成型の自然公園利用（富士山）における影響は、①公園資源の享受や④情報や施設の円滑な利用に対する期待に対しては無いこと、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待において大きくはないがあること

- ・ 利用型の異なる二つの自然公園で影響に差異が生じる理由として、時間消費型の利用がその過程を重視するのに対し、目的達成型の利用が目的を達するまでの過程を重視しないという、利用形態に内在する利用志向の差異が考えられること

第4節では、多数の利用者数の存在による混雑意識の生起を捉え、以下のようなことを明らかにした。

- ・ 時間消費型の自然公園利用（尾瀬ヶ原）では、①公園資源の享受や⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待は、多数の利用者数によっては阻害されず、混雑意識を生起させないこと、②野趣性・独居性の保持や④情報や施設の円滑な利用に対する期待については、阻害されると混雑意識を生じさせるが、利用者数の多寡による影響は見られないこと、③「適切な対人関係」に対する期待は多数の利用者数によって阻害され、なおかつ混雑意識を生起させること

- ・ 目的達成型の自然公園利用（富士山）では、混雑日において、①「公園資源の享受」に対する満足要素の多くが混雑意識と正の相関を持つこと、期待の阻害は5分類した期待の全てで見られ、多数の利用者数によって引き起こされる③適切な対人関係に対する期待の阻害は混雑意識を生起させること、①公園資源の享受や②野趣性・独居性の保持、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待の阻害においても、混雑意識を生起させる可能性があること

・ 利用型の異なる二つの自然公園で混雑意識の生起に差異が生じる理由は、目的達成型の自然公園利用における空間の利用の仕方として一点に集中する傾向があることと関わりがあると考えられること

第5節では、多数の利用者数の存在による混雑不快感の生起を把握し、以下のようなことを明らかにした。

・ 時間消費型の自然公園利用（尾瀬ヶ原）における混雑不快感の生起は、利用者数が少ない状況下において、②野趣性・独居性の保持に対する期待の阻害によって生じること、多数の利用者数による影響として、新たに、②野趣性・独居性の保持、③適切な対人関係の構築に対する期待の阻害によって混雑不快感が生起すること、②「野趣性・独居性」に対する期待と③「適切な対人関係」に対する期待が満たされた場合には、満足の上昇と混雑意識を同時に低下させること

・ 目的達成型の自然公園利用（富士山）では、閑散日において、利用者の仮想行動に関わりがあると考えられる、③適切な対人関係の構築に対する期待の阻害によって生じること、利用者が集中する混雑した状況下では混雑不快感となる要素の数が減少し、新たに、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待が阻害されて生じること

第6節では、得られた知見をもとにして、思索的検討を行い、多数の利用者数による期待阻害の概念的整理を行った。

最後に、第7節では、利用者の期待を充足するための管理施策を整理した上で、本研究で取り上げた二つの自然公園において、利用者数が利用者の心理に与える負の影響を取り除くために有効と考えられる管理施策を検討した。その結果、利用者心理が受ける影響のうち、どの影響を取り除くことを目標とするかによって、選択すべき管理施策に差異があること、自然公園の利用類型によっても選択すべき管理施策に差異があることを指摘した。

補注および引用・参考文献

1) 堀繁 (1993) : わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究 (I) - 指定と保護計画 : 東京大学農学部演習林報告 90, 97-182

2) 堀繁 (1994) : わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究 (II) - 利用計画と管理 : 東京大学農学部演習林報告 91, 137-209

3) Schopler, J., and Stockdale, J. E. (1977) : An Interference Analysis of Crowding : Environmental Psychology and Non-Verbal Behavior 1, pp.81-88

4) 篠原修 (1982) : 土木景観計画 : 新体系土木工学 59 : 技法堂出版

5) 前掲4)

- 6) 例えば、朝日新聞 (1957) : 6月9日朝刊
- 7) 朝日新聞 (1984) : 1月1日朝刊
- 8) 例えば、Steven R. Lawson, Robert E. Manning, William A. Valliere, Benjamin Wang (2003) : Proactive monitoring and adaptive management of social carrying capacity in Arches National Park: an application of computer simulation modeling : Journal of Environmental Management 68, pp.305-313
- 9) 岩田修二・加藤峰夫・金子博文・徳丸久衛 (2000) 保護と利用にゆれる日本の国立公園 : 山と溪谷 774, 162-165
- 10) 山本清龍・本郷哲郎 (2003) : 米国ヨセミテ国立公園にみる環境教育情報の提供のあり方について : 日本観光研究学会全国大会研究発表論文集 18, 269-272
- 11) 小野理・藤掛一郎 (1993) : レクリエーション林の利用規制の認識と行動に関する研究-マウントレニア国立公園への日本人訪問客を対象としたケーススタディ : 京都大学農学部演習林報告 65, 221-237
- 12) 財団法人自然環境研究センター (2001) : 富士山のすがお-ゴミとトイレのほんとの話 : 環境省自然環境局南関東地区自然保護事務所, 56pp.
- 13) 阿部泰隆 (1990) : 尾瀬の入山(園)規制 : 法学セミナー424, 66-70
- 14) 加藤峰夫 (2001) : 目的地は国立公園 : 信山社, 214pp.
- 15) 庄子康・栗山浩一 (1999) : 自然公園において利用料金導入がもたらす過剰利用の抑制効果-CVM(仮想的市場評価法)を用いたケーススタディ : 日本林学会誌 81(1), 51~56
- 16) 田園都市研究所 (2002) : 尾瀬における適正収容力に関する調査報告書, 226pp.

第6章 結論と今後の課題

本稿では、利用形態および利用者数の軸によって自然公園の利用を四つに類型区分した。また、利用の類型区分に応じて、時間消費型の利用が見られる自然公園の典型事例として尾瀬ヶ原を、目的達成型の利用が見られる自然公園の典型事例として富士山を選定し、二つの自然公園において四つの利用型における利用者の意識を把握した。その結果、利用者数の多寡が「自然公園利用者の期待」に及ぼす負の影響と、多数の利用者数をもたらす自然公園利用者の期待阻害過程を概念的に明らかにした。ここでは、本研究の整理と結果を総括し、最後に今後の課題について示す。

第1節 結論および考察

(1) 自然公園利用者の利用と期待

本稿では、まず、第2章において自然公園における利用を類型区分し、その分類軸として時間消費型と目的達成型の利用形態の軸を用いた。この利用者の志向ともいえるべきものは公園が持つ自然的特性および社会的特性によって生じているものであり、いわば公園が持つ魅力そのものが利用者の志向を捉えることによって、多くの人を引きつけていると考えることができる。自然公園において生じている利用の問題を論じ扱っていくためには、この利用者の志向を的確に捉えていくことが必要であり、本研究はそのための一つの整理軸を提示したと考える。

また、第3章において既往の知見の整理と、二つの自然公園における利用者意識の検討を通して、自然公園利用者が持つ期待を、①公園資源の享受、②野趣性・独居性の保持、③適切な対人関係の構築、④情報や施設の円滑な利用、⑤清潔・快適な空間の利用、の5つに分類した。自然公園史を概観したように、戦後の自然公園における管理施策においては、生物多様性の保全等を含め公園資源の保全に専心し、自然公園において生じる諸問題を解決するために、情報や施設、空間を調整、整備することによって対応してきたように思われる。しかし、自然公園法が明記しているように、利用の増進を図り、公園利用者の体験の質を保護するという視点に立つのであれば、より積極的に利用者の期待を保護することを意図して自然公園計画を立案する必要がある。利用者の期待を保護する方策としては、利用者の期待を充足しより高い満足を提供していく方向と、期待の阻害を排除していく方向と大きく二つに区分される。言うまでもなく、目指すべき自然公園の姿は前者にある。その理想ともいえる姿に近づくためには、これまで具体的に検討されることが少なかった利用者の②や③の期待について、その保護の必要性や有

効性を検討し、積極的に管理施策に反映していくことが有効と考える。

(2) 利用者数の多寡が「自然公園利用者の期待」に及ぼす負の影響と混雑意識、混雑不快感の生起

時間消費型の自然公園利用（尾瀬ヶ原）においては、多数の利用者の存在が利用者の期待に及ぼす影響は、④情報・施設の円滑な利用や⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待で大きく、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築に対する期待では、大きくはないがあること、①公園資源の享受に対する期待に対しては影響がないことを明らかにした。一方、目的達成型の自然公園利用（富士山）では、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築に対する期待、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待において大きくはないがあること、①公園資源の享受や④情報・施設の円滑な利用に対する期待では、無いことが明らかとなった（表 6-1-1（結論表））。また、利用者数の多寡による混雑意識の生起の把握から、時間消費型の自然公園利用においては、③適切な対人関係の構築に対する期待の阻害によってのみ混雑意識の生起が認められるのに対し、目的達成型の自然公園利用においては、多くの期待の阻害に認められた。さらに、利用者数の多寡による混雑不快感の生起の把握から、時間消費型の自然公園利用においては、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築、④情報や施設の円滑な利用に対する期待の阻害によって混雑不快感の生起が見られるのに対し、目的達成型の自然公園利用においては、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待の阻害で見られ、全体として混雑不快感が生起する可能性は低かった。以上のように、利用型の異なる二つの自

表 6-1-1 多数の利用者数が自然公園利用者の期待に及ぼす負の影響について

自然公園利用者の期待	利用型による公園の類型区分	
	I 時間消費型 (尾瀬ヶ原)	II 目的達成型 (富士山)
① 公園資源の享受 ex.) 自然、風景、植物、動物	×	×
② 野趣性・独居性の保持 ex.) やすらぎ、落ち着き、人の少なさ	△	△
③ 適切な対人関係の構築 ex.) 利用者同士のすれ違い、利用者マナー	△	△
④ 情報や施設の円滑な利用 ex.) トイレの行列、登山道の行列、標識等	○	×
⑤ 清潔・快適な空間の利用 ex.) 落ちているゴミ、トイレの汚れ	○	△

注) ○=影響あり △=やや影響あり ×=影響なし

然公園において、利用者数が利用者の心理に及ぼす影響に差異が生じる理由は、時間消費型の利用がその過程を重視するのに対し、目的達成型の利用が目的を達するまでの過程を重視しないことによると考えられる。時間は空間とともに人間の認識の基礎を成すものであり、目的は利用者の期待に明確に位置づけられて強く実現が望まれる。時間あるいは時間消費に対する考え方の違い、明確な目的の有無が、利用者数による負の影響の差異を生じさせていると言える。その他、目的達成型の自然公園利用における空間の利用の仕方として一点に集中する傾向があることも関わりがあると考えられる。

本稿で扱った利用者の心理に対する負の影響は取り除くことが望まれるが、自然公園の管理施策として数多くある選択肢の中から、利用者の期待に応じてどのような意図で施策を講じるべきかこれまで明らかではなかった。第5章で論じ考察したように、得られた知見を整理することによって、利用者数が利用者の心理に与える負の影響を取り除くために有効と考えられる管理施策を検討することができ、その際に、自然公園の利用型や、利用者の心理が受ける影響のうち、どの影響を取り除くことを目標とするかを決定することが重要である。

(3) 多数の利用者数がもたらす自然公園利用者の期待阻害過程

思索的検討を通して、多数の利用者数がもたらす自然公園利用者の期待阻害過程を明らかにした。その過程では、自然公園利用者の期待と予想利用状況によって構成される利用者の現実的な期待像が、予想を超える利用者数の存在によって阻害されることにより始まる。その結果、現実的な期待像と実際の利用状況の乖離が、利用者の期待に対する充足の未達成を引き起こし、満足の低下と混雑意識を生起する。また、満足の低下に混雑意識を伴うものは混雑不快感として生起することが明らかとなった(図 5-6-3 (結論図))。

わが国の多くの自然公園では、利用の集中によって、利用者の満足度の低下や混雑意識あるいは混雑不快感が生じていると考えられる。この時、自然公園の利用者数のみにその原因を求め対策を行うのではなく、自然公園に訪れる利用者の期待を把握し、どのように阻害されているのか、その実態を見極めることが重要である。利用者が持つ期待像は、自然公園の“自然公園らしさ”という像でもあり、この像を明確にし、求められている期待の水準を考慮して公園管理を行うことが最も根本的な対策である。また、現実的な期待像は事前の情報提供等によって操作可能なものも含まれることから、実際に利用者が自然公園を訪れる前にどのような動機づけなどの介入ができるかを検討することも有効である。

第2節 今後の課題

かつて自然保護を基調として様々な取り組みが行われた時代に比べ、現在では、自然環境保全の意義がはるかに自然公園の利用者に浸透し、理解されているのではなかろうか。しかし、自然公園が保護すべき対象は何かなど、自然公園の“自然公園らしさ”に繋がる公園の理想像は設立当初からそれほど明確ではないため、目標のない保全が図られているにすぎない。このことが常に、自然公園において生じる諸問題を議論する際の壁になっているように思う。その意味において、本研究のように自然公園の利用者の期待を扱い論じることは、公園の理想像を明確にしていくための具体的方法の一つと考えられる。

しかし、これまで触れてこなかったが、本研究の手法自体が持つ限界もあり、ここで課題として整理しておきたい。一つは、予め期待が阻害されることが分かっているため自然公園に訪れなくなっている人がいるということであり、その中には、もともと自然公園に対して高い期待を持つがゆえに訪れなくなった人がいると考えられる。それゆえ、自然公園の正当な像を見極めるためには、自然公園の実際の来訪者について意識を把握するのみでは十分ではなく、数としては多くないと予想されるが、潜在的な自然公園利用者の意識の把握を行うことも極めて重要である。本研究では、以上のような研究手法を採用しなかったが、今後の課題としておきたい。

二つ目は、第1章で日本人が混雑に対する独特の感覚を持つ可能性について指摘したが、本研究の目的と方向が異なるため十分には明らかにできなかったことである。本研究の結果から、富士山においては混雑が利用体験の満足の中に位置づけられていないことなど、かつての信仰登山だけでなく、現代の登山の中にも日本人独特の感覚で登山が行われている可能性を指摘できるが、より歴史的側面から慎重に検討していく必要もあろう。これも今後の課題である。

その他、自然公園の管理計画の観点から、自然公園管理の思想や技術、方法論の中にどのように地域づくりの視点を取り込むことができるか、管理施策の決定のための方法論の構築とその施策の効果の把握が重要である。これらは、本研究の範疇ではなかったが今後取り組まれるべき研究課題と考えている。

論文の内容の要旨

論文題目 自然公園における利用者数が利用者の期待に及ぼす影響に関する研究
氏 名 山本清龍

美しい風景を見たい、珍しい動物や植物を見たいといった期待は誰しもが持ちうるものである。その一方で、野趣性に優れた自然風景地において一人佇み自然の風趣を堪能することを期待として持つとすれば、他の一人の利用者の存在すら否定的に捉えてしまうことが考えられる。この事実は、訪れる利用者の期待が個人々々において多種多様であり、場合によっては利用者の期待と他の利用者のそれとが対立関係を生じさせる可能性を示唆する。しかし、他の利用者の存在がどのように利用者が持つ期待に影響を及ぼすかについては、その全貌は明らかでない。また、混雑心理については、どのような過程を経て生じる心理であるのか、概念整理が十分に行われていない。そこで本研究では、自然公園における諸問題のうち特に人が受け取る心理的な問題に着目し、第一に、利用者数の多寡が「自然公園利用者の期待」に及ぼすマイナスの影響は、自然公園において主に想定される利用型によって、差異があることを明らかにすること、第二に、混雑および満足に関わる利用者心理の概念整理を行うこと、の二点を目的とした。

まず、**第一章**では、研究の背景と目的について示し、混雑心理を扱った既往の研究成果および利用者の期待や動機を扱った既往の研究成果の整理を通し、本研究の位置づけを行った。また、研究に取り組むにあたり重要な利用者数や混雑意識、満足等の用語について定義し、本研究の構成と方法を示した。

第二章では、自然公園において主要な利用形態と考えられる登山について、わが国の登山史を概観することによって、その質の変容を整理した。また、自然公園の利用者数の変遷を概観し、自然公園や国立公園、利用者数の多い国立公園について、その利用者数の増減とその要因を関連づけて整理し考察を行った。さらに、わが国の自然公園における利用の問題がどのように扱われてきたかを把握し、整理を行った。最後に、自然公園の利用の類型区分を行った。

その結果、近代登山の幕開けによって、アルピニズムに代表されるように単に頂上への到達を目指す登山と、一刻を争い頂上を目指すのではなく悠々と山を楽しむ日本らしい登山の形態が出現したことが整理された。また、自然公園の利用者数は戦後において飛躍的に増大し、自然公園や複数の国立公園に共通する利用者数の変化点があることや、平成年代に入り自然公園における利用者数が過去最大を記録したことなどを指摘した。さらに、近年になって自然公園における利用は単に量としての問題にとどまらず、その質としての変化が問題として捉えられていることを明らかにした。以上の知見を踏まえ、自然公園の利用の類型区分の分析軸として、「時間消費型」と「目的達成型」を両極とする利用形態の軸と、「利用者数が多いタイプ」と「利用者数が少ないタイプ」を両極とする利用者数の軸を設定し、その二つの軸によって自然公園の利用の類型を四つに区分した。

第三章では、まず、本研究において重要な調査指標となる期待や満足、不満に対する考え方の整理を行い、既往の知見から自然公園利用者の期待を分類した。また、第二章で行った自然公園の利用の類型区分に応じて研究対象地を選定し、その概要を把握した。以上を踏まえて、実際の自然公園における利用者の意識を把握するための調査の設計を行った。

その結果、調査指標の設計のための概念整理から、自然公園利用者が満足と不満のいずれを感じるかは、利用者個人が持つ主観的な期待に関連し、三つの水準があることを整理した。また、利用者が持つ期待を①公園資源の享受に対する期待、②野趣性・独居性の保持に対する期待、③適切な対人関係の構築に対する期待、④情報・施設の円滑な利用に対する期待、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待、の五つに分類した。さらに、研究対象地として、時間消費型の自然公園の代表事例から尾瀬ヶ原を、目的達成型の自然公園の代表事例から富士山を選出した。加えて、研究対象地の概要の側面として自然公園史および利用の概況を概観することによって、二つの自然公園の現在の利用の成立背景と特性を把握した。両研究対象地において時間的、空間的に利用の集中と分散が見られることから、現在の利用の成立背景と特性を検討し、本研究の目的を遂行するに相応しい調査日および調査地点、利用者の期待の充足状況を把握するためのアンケート調査票の構成を決定した。

第四章では、研究対象地とした尾瀬ヶ原と富士山のそれぞれについて利用者属性の他、満足要素と不満要素、利用者属性と満足および不満の要素の関係性、利用者数の多寡と満足および不満の要素の関係性から、利用者の意識構造の把握を行った。

その結果、尾瀬ヶ原では2回目以上のリピーターが約7割を占めることなど現在の尾瀬の利用の特性を把握した。また、多くの利用者にとって公園資源の享受が満足要素となり、野趣性・独居性の欠如が不満要素になっていることを明らかにし、満足要素と不

満足要素の比較と考察を通し、もともと期待されていない要素があることを指摘した。さらに、初めての利用者を除いて、公園資源の享受に対する期待は同様であることや、野趣性・独居性の保持に対する期待は性別や利用回数、交通手段によって差異があることなど、利用者属性別に特有に見られる満足要素と不満要素を把握した。加えて、多数の利用者の存在は、情報・施設の円滑な利用に関連する多くの満足要素を減少させることや、利用状況に合わせて、利用者が期待の大きさを変化させている可能性があることなどを明らかにした。

一方、富士山では初めての利用者が約7割を占めることなど現在の富士山の利用の特性を把握した。また、多くの利用者にとって公園資源の享受が満足要素となり、清潔・快適な空間の欠如が不満要素となっていることを明らかにした。さらに、野趣性・独居性に対する期待は男性の方が大きいことや、年齢が50代や60代の利用者と比較して、年齢が20代の利用者で全般的に自然公園に対する期待が低いことなど、利用者属性別に特有に見られる満足要素と不満要素を把握した。加えて、主に野趣性・独居性の保持、適切な対人関係の構築、情報・施設の円滑な利用の期待が、多数の利用者数によって阻害されていることを明らかにした。その他、満足要素の中には、多数の利用者数が記録された混雑日において多く回答されるものがあり、利用体験に対する肯定志向のあることを指摘した。

第五章では、利用者数の多寡によって生じている負の影響を捉えるための前提として、二つの自然公園利用者の意識の同一性と差異性を明らかにした上で、自然公園利用者の期待の阻害による満足の低下、混雑意識の生起、混雑不快感の生起を把握した。また、多数の利用者数による期待阻害について概念整理を行い、利用者の期待阻害に配慮した自然公園計画について論じ考察した。

その結果、時間消費型の自然公園（尾瀬ヶ原）では、多数の利用者数の存在による負の影響は④情報・施設の円滑な利用や⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待で大きいこと、②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築に対する期待ではその影響の可能性のあること、①公園資源の享受に対する期待においては影響がないことを明らかにした。

一方、目的達成型の自然公園（富士山）では、多数の利用者数の存在による負の影響は②野趣性・独居性の保持や③適切な対人関係の構築、⑤清潔・快適な空間の利用に対する期待においてその可能性のあることや、①公園資源の享受や④情報・施設の円滑な利用に対する期待において無いことが明らかとなり、自然公園の利用の類型と関連づけて考察を行った。

混雑意識と混雑不快感の生起については、時間消費型の自然公園（尾瀬ヶ原）では多数の利用者数によって混雑不快感が生起するのに対し、目的達成型の自然公園（富士山）

では多くの期待の充足と阻害が混雑意識に関連するものの、混雑不快感としては生起しなことを明らかにした。

得られた以上の知見をもとに、多数の利用者数がもたらす自然公園利用者の期待阻害について概念的整理を行った。その期待阻害とは、自然公園利用者の期待と予想利用状況を合わせた自然公園に対する現実的な期待像が、予想を超える利用者数の存在によって阻害される過程である。さらに、現実的な期待像と実際の利用状況の乖離によって、期待に対する充足の未達成が発生し、満足の低下または混雑意識を生起すると考えられる。この時、特に満足の低下を伴う混雑意識は混雑不快感として生起すると整理された。

また、主に想定される利用が異なる二つの自然公園において、多数の利用者数による期待の阻害に差異があることから、時間消費型と目的達成型の自然公園のそれぞれにおいて有効と考えられる管理計画を検討し、期待阻害の分類に対応する具体的な管理施策を示した。

最後に、**第六章**では、本研究によって得られた結果を総括し、展望を含めた今後の課題について言及した。

Summary of Contents of Paper

A Study on the Impact of Natural Park Visitor Numbers on Visitor Expectations

Kiyotatsu YAMAMOTO

Anybody visiting a natural park has certain expectations about wanting to see beautiful landscapes, or unusual animals or plants. At the same time, if someone expects to enjoy the scenic beauty of a natural landscape, with its full rusticity, in solitude for as long as desired the presence of even one other person can have a negative impact. The expectations of people visiting natural parks vary widely from individual to individual, which suggests the possibility of conflicts between the expectations of different visitors. However, much is still unclear about how the expectations of visitors are impacted by the presence of others. In addition, no adequate conceptual framework exists to analyze this type of “congestion psychology” and its development. This study looks at the various problems in natural parks, focusing on the psychology of visitors. The two basic goals of the study are as follow: first, to clarify how the negative impact of the number of visitors on the expectations of natural park visitors differs with respect to the primary envisioned types of natural park usage; and, second, to construct a conceptual framework for analyzing the psychology of visitors in relation to congestion and satisfaction.

In Chapter 1 we outline the background and goals of the research and present our study in the context of the findings of previous studies relating to “congestion psychology,” and the expectations and motivations of visitors to natural parks. We then attempt to define important terms, such as visitor numbers, congestion consciousness, and satisfaction. Finally, we outline the structure and method of the research work.

Because mountain climbing is one of the main “uses” of natural parks in Japan, Section 2 summarizes the history of mountain climbing in order to put into perspective the transformation of this activity. We also give an overview of the transition in the numbers of visitors to natural parks. The numbers of visitors at highly frequented natural parks and natural parks rises and falls, and so we examine factors leading to this result. We then try to systematically grasp how usage problems at natural parks in Japan are

handled. Finally, we classify the uses of natural parks.

Our study found that two basic types of mountain climbing have evolved. One of these, derived from the beginning of modern mountain climbing and typical of alpinism, aims merely to arrive at the summit of a mountain; the other type, which is characteristically Japanese, aims not to conquer the summit as fast as possible, but rather to leisurely enjoy the experience of being on the mountain. We also found that the numbers of visitors to natural parks rose rapidly following the war. This is a common change point in the number of visitors to natural parks and multiple natural parks, and that visitor numbers at natural parks reached a peak in approximately 1988. Furthermore, we clarified that in recent years the problems of natural park usage have not been solely about quantity, but also about the change in quality. Based on the above knowledge, we devised the following classification system for natural park usage. The usage pattern is plotted on an axis between two poles labeled “pastime-type” and “purpose-type” uses, while visitor numbers are plotted on an axis extending between the two poles of “many visitors” and “few visitors.” Thus, using these two axes, we classified natural park usage into four types.

In Section 3, we attempt to conceptualize the parameters of expectation, satisfaction, and dissatisfaction, which serve as important indicators in this study, and then to classify the expectations of natural park visitors based on their past knowledge. In addition, we selected specific park areas in Japan at which to conduct surveys of the visitors, according to the natural park usage classification given in Section 2. Based on the above, we designed a survey to assess the consciousness of visitors for existing natural parks.

Using our findings, we defined three levels to gauge the subjective expectations of individual visitors to natural parks to assess whether they felt satisfied or dissatisfied with their experience. We classified the expectations of visitors into five categories: (1) expectation of enjoying park natural resources; (2) expectation of maintaining rusticity and solitude; (3) expectation of establishing favorable interpersonal relations; (4) expectation of easily utilizing information and facilities; and (5) expectation of using a pure and pleasant space. As survey sites, we selected Ozegahara as a typical example of a “pastime-type” natural park, and Mt. Fuji as a typical example of a “purpose-type”

natural park. In addition, we assessed the background and characteristics of the current usage of the two natural parks by providing an outline of their history and the overall conditions of their usage. Since the usage of the two surveyed park areas is concentrated and dispersed in both time and space, we decided to develop a questionnaire survey form in order to examine the current usage background and characteristics of the parks and to approximately determine the most suitable survey days and survey points for our study.

In Section 4, we tried to ascertain the consciousness structure of visitors to each of our two survey areas—Ozegahara and Mt. Fuji—based on visitor attributes, satisfaction/dissatisfaction factors, the relationship between visitor attributes and satisfaction/dissatisfaction factors, and the relationship between the level of visitor numbers and satisfaction/dissatisfaction factors.

We learned that 70% of current visitors to Ozegahara are repeat visitors, i.e., on their second or subsequent visits to the park. It is also clear that for many visitors, enjoyment of park natural resources is a satisfaction factor, while a lack of rusticity and solitude is a dissatisfaction factor. By comparing and examining the satisfaction and dissatisfaction factors, we found that there are factors that are not affected by expectation. In addition, we found that satisfaction and dissatisfaction factors vary with visitor attributes—for example, the expectation of enjoying park natural resources was uniform for all visitors except first-time visitors, while the expectation of maintaining rusticity and solitude varied according to gender, number of visits, and means of transport. We also clarified that visitors can change the degree of their expectations according to usage conditions—for example, the presence of a large number of visitors can reduce the satisfaction for many factors relating to easy use of information and facilities.

In contrast to Ozegahara, at Mt. Fuji we found that approximately 70% of the current visitors are first-timers. We also clarified that for many visitors enjoyment of park natural resources is a satisfaction factor, while the lack of pure and pleasant spaces is a dissatisfaction factor. Again we showed that visitor attributes affect the satisfaction factors. For example, expectations of rusticity and solitude were stronger in males, and expectations of visitors in their 20s were generally lower than those of visitors in their 50s and 60s. In addition, we discovered that a large number of visitors can lower

expectations, particularly those related to maintaining rusticity and solitude, establishing interpersonal relationships, and easy use of information and facilities. However, we also discovered that on congested days, when large numbers of people were in the parks, many visitors to Mt. Fuji responded positively to some of the satisfaction factors, revealing a very positive attitude relative to their experience at the park.

In Section 5, we assessed the decline in satisfaction and the rise of congestion consciousness and congestion displeasure due to the inhibition of natural park visitor expectations, by clarifying the similarities and differences between the two kinds of natural park visitors, based on the assumption that a large number of visitors has a negative impact. In addition, we created a conceptual framework for the inhibiting effect of large visitor numbers on expectations, and we discuss and examine a natural park plan that takes into account this dampening effect on visitor expectations.

Our results showed that at the “pastime-type” natural park (Ozegahara), the presence of large numbers of visitors had a strong negative impact on the expectations about easily using information and facilities (4) and using pure and pleasant spaces (5); it had a possible negative impact on expectations about maintaining rusticity and solitude (2) and establishing favorable interpersonal relationships (3), but, there was no measurable impact on expectations about enjoying park natural resources (1).

On the other hand, our findings demonstrated that at the “purpose-type” natural park (Mt. Fuji), the presence of large numbers of visitors had a possible negative impact on expectations about maintaining rusticity and solitude (2), establishing favorable interpersonal relationships (3), and using pure and pleasant spaces (5); but, there was no measurable impact on the expectations about enjoying park natural resources (1) and easily using information and facilities (4). We thus examined the correlation with natural park usage.

In relation to the rising congestion consciousness and congestion displeasure, large numbers of visitors at the “pastime-type” natural park (Ozegahara) increase the congestion displeasure; in contrast, at the purpose-type natural park (Mt. Fuji) large numbers of visitors do not increase the congestion displeasure, despite the fact that the satisfaction and inhibition of numerous kinds of expectations are influenced by

congestion consciousness.

Based on the findings outlined above, we developed a conceptual framework to describe the inhibition of the expectations of natural park visitors due to large numbers of visitors. This expectation inhibition can be explained as the process by which a realistic expectation image about the natural park experience, which combines the visitor's expectation with anticipated usage conditions, is inhibited due to the fact that the numbers of visitors present in the park is greater than anticipated. Due to the discrepancy between the realistic expectation image and actual usage conditions, the expectation is not fully satisfied, therefore resulting in lower satisfaction or congestion consciousness. In such cases, particularly where lower satisfaction is accompanied by congestion consciousness, congestion displeasure can arise.

In addition, for the two kinds of natural parks, which are distinguished principally by their envisaged usage, the degree of expectation inhibition due to large visitor numbers differs. In view of this, we examined management plans expected to be effective for each of the "pastime-type" and "purpose-type" natural parks, and detailed their implementation in accordance to their respective expectation inhibition characteristics.

Finally, in Section 6 we summarize the results obtained through the study, and outline the challenges and prospects of future research.

謝辞

本研究の実施に際し、多くの方々にお世話になった。まず、環境省委託調査「利用体験からみた尾瀬の収容力に関する調査」への参加をお誘い頂いた、麻生恵東京農業大学教授、一場博幸田園都市研究所長には深く感謝の意を表したい。日本の自然保護の象徴と言われる尾瀬ヶ原における宿泊、調査の体験は、その後の私の研究の取り組みに対しユニークな視点やヒントを与えてくれている。また、調査の企画においては、古谷勝則千葉大学準教授、栗田和弥東京農業大学講師、田村裕希田村環境計画代表には貴重な助言を頂き、意義ある調査を実施できたことに対しても謝意を表したい。さらに、調査が円滑に実施できるよう全力を尽くして下さった下嶋聖、望月寛、山崎人詩の三氏をはじめとする東京農業大学の学生諸君にも心からお礼を申し上げる。その他、尾瀬利用適正化推進検討委員会の委員の先生方、事務局の方々からも調査企画に対する助言と調査実施に対するご理解とご協力を頂いており、特に、加藤峰夫横浜国立大学教授、相場栄樹尾瀬保護財団元主事には大変お世話になった。お礼を申し上げたい。

一方、富士山における調査では共同研究者でもあった本郷哲郎山梨県環境科学研究所主幹研究員、小笠原輝同研究員、千葉大学大学院の齋藤伊久太郎君から調査企画、実施に対する助言とご協力を頂いた。また、富士吉田市役所富士山課、富士山五合目総合管理センター、六合目富士山安全指導センター、富士山ボランティアセンター、河口湖富士線有料道路管理事務所、佐藤小屋、富士箱根伊豆国立公園船津管理官事務所をはじめ、富士山の管理計画に関わる関係機関の各位には調査に対するご理解とご協力を賜り、フィールドの貴重な情報についてもご提供頂いた。感謝したい。

これまで取り組んできた研究をまとめ一つの研究論文とすることは、私の力量からして難題であり、結果として難産でもあったが、諦めずに励まし続けて頂いた上に、学位審査を務めて頂いた東京大学森林風致計画学研究室の熊谷洋一教授、下村彰男教授、小野良平準教授、斎藤馨東京大学新領域創成科学研究科準教授、学位請求当時に演習林の研究部長として温かく見守ってくれた丹下健教授にも心からお礼を申し上げる。また、私の勤務先の富士演習林の上司、先輩でもある石橋整司東京大学教授、千島茂東京大学技術職員、高村洋子非常勤職員の皆さんからは、本稿の執筆に際し、多大なご理解とご配慮を頂いた。ぜひ、今後の仕事を通してその恩返しをしたい。

最後に、田舎の高知からの上京だけでなく、研究に取り組むことを許してくれた幸憲、陽子の両親、研究に取り組む上で必要な体調管理に気を遣ってくれている妻智子にもこの論文を捧げたい。

平成 19 年 10 月 29 日 記